

未詳撰者『慈悲道場懺法』十卷の資料価値*

船 山 徹

[目次]

序

第 1 節 『慈悲道場懺法』の概要 1.1 版本 1.2 構成 (1.21 郗氏の因縁 1.22 傳承上の撰者と年代 1.23 目次復元の試み)

第 2 節 他の同時代文獻に見られる併行句 2.1 原文 A 「斷酒肉文」一 2.2 原文 B 「斷酒肉文」二 2.3 原文 C 2.4 原文 D 2.5 原文 E 2.6 原文 F 2.7 原文 G 2.8 原文 H 2.9 原文 I 2.10 原文 J

第 3 節 『慈悲道場懺法』の語彙 3.1 「攝大威儀戒」 3.2 「道場」 3.3 「東西二治」 3.4 「隨從」 3.5 副詞「～到」

第 4 節 『慈悲道場懺法』の引用書 4.1 『慈悲道場懺法』が引用・言及する佛典 4.2 引用書から分かること

第 5 節 『慈悲道場懺法』の原形と改變 5.1 梁武帝『發菩提心』 5.2 梁後の改變 5.3 『淨住子』の影響

結

附録 『慈悲道場懺法』における『淨住子』併行句の所在 先行研究

序

「中國在家の佛教觀：唐道宣撰『廣弘明集』を読む」共同研究班 (2020 年 4 月～2024 年 3 月, 班長船山徹) では唐の道宣『廣弘明集』卷二六に收める梁の武帝 (502-549 在位) の「斷酒肉文」(大正五二・二九四中～三〇三下) を精讀している。一年後を目處に原文校勘と譯注を公開豫定である。「斷酒肉文」は武帝が在家の立場から食肉と飲酒の是非について、酒肉を攝るべからずと説く大乘の經典と肉食を一部認める律典 (出家僧團の生活規則を定めた聲聞乘文獻) との関係を論じ、食肉飲酒の完全禁止を目指す¹⁾。

* 謝辭 本論文の最終版を作成するに当たり、共同研究班員の倉本尙徳・古勝隆一・趙ウニルの三氏の批評を仰ぎ、一部を修正補足することができた。もとより誤りの責がすべて船山にあるのは言うまでもないが、三氏にここに深く御禮申し上げる。

1) 本稿主題は「斷酒肉文」解讀ではないので、それに關連する先行研究の紹介を割愛する。

未詳撰者『慈悲道場懺法』十巻の資料價値

共同研究班では毎回擔當者を交替しながら「斷酒肉文」を會讀している²⁾。そこから「斷酒肉文」の特色を既にいくつか見出した。詳細は後に公表する譯注を参照されたいが、二三の例を挙げると、「斷酒肉文」には他に見られない独自の語がある、後代の唐の懷信の撰とされる『釋門自鏡錄』巻下に省略を含む引用がある、「斷酒肉文」と共通する語彙を用いる注目すべき文獻に、南齊の蕭子良『淨住子』二十巻を唐の道宣が節略した「統略淨住子淨行法門」一卷（『廣弘明集』巻二七收）、道世『法苑珠林』、未詳撰者『慈悲道場懺法』十巻がある等である。これらは班員の共有見解であり、筆者の創見ではない。

上掲三書中、編纂に關する由來と傳播に不明な點が多く、「斷酒肉文」との關係を定め難いのは、『慈悲道場懺法』である。そこで本稿では共同研究班の研究成果の一部として、『慈悲道場懺法』について現時點で知りうる事柄を整理し、その撰者と編輯時期を検討する。

『慈悲道場懺法』十巻には複数の別名がある。巻數にも異なる記録がある。經典目錄その他を調査した徐立強の説に基づいて整理すると、『梁武帝懺』六巻、『慈悲道場文』六巻、『慈悲懺法』十巻ほかがあり、このうち最も古いのは圓珍『日本比丘圓珍入唐求法目錄』に出る『梁武帝懺』である³⁾。六巻とする理由は分からない。『慈悲道場懺法』は『梁皇懺』や『慈悲道場梁皇懺法』とも呼ばれる⁴⁾。

第1節 『慈悲道場懺法』の概要

【1.1 版本】大正新脩大藏經の用いる『慈悲道場懺法』版本は三種である。

原本	高麗大藏經再雕本（13世紀前半）
甲本	〔元〕延祐三年（1316）刊本
乙本	〔明〕萬曆十三年（1585）刊増上寺報恩藏本

参照に値する基礎的文獻研究として今は諏訪（1988）（1997）と陳志遠（2013）のみを挙げる。

- 2) これまで「斷酒肉文」の會讀を擔當した班員は、古勝隆一、魏藝、趙ウニル、中西俊英、船山徹、久永昂央、倉本尙徳、船山徹、ウィッテルン・クリスティアン、河上麻由子、中西龍也、魏藝、趙ウニル、倉本尙徳、船山徹である。毎回有益な討論を提供してくれる班員諸氏に感謝する。
- 3) 徐立強（1998b: 3）。圓珍（814-891）『日本比丘圓珍入唐求法目錄』〔「梁武帝懺」六巻〕（大正五五・一一〇一中）。跋に「巨唐大中十一年十月 日 日本國求法僧圓珍錄」と大中十一年（857）成書年を記す。
- 4) 元の覺岸『釋氏稽古略』巻二によれば『慈悲道場懺法』を『梁皇懺』とも言う（大正四九・七三七下）。清の儀潤『百丈清規證義記』巻一は『梁皇懺法』と『慈悲道場梁皇懺法』という呼稱を用いる。

このほかにも大藏經本は數點ある⁵⁾。しかし本稿で参照したのは大正新脩大藏經のみである。そのため、原文引用の字句を十分校勘できていない甘さを豫め認めざるを得ない。

【1.2 構成】『慈悲道場懺法』の撰者は不明であり、序跋も目次もない。本書の構成を三つの角度から整理する。本書が編まれた経緯と、前近代の傳承における本書編纂年代と、目次を復元する試みとである。

【1.21 郗氏の因縁】『慈悲道場懺法』が編纂された経緯を示す逸話は三書に見られる。すなわち㊶未詳撰者「慈悲道場懺法傳」、㊷唐の姚思廉『梁書』高祖郗皇后傳、㊸唐の李延壽『南史』后妃下の梁の武德郗皇后傳、㊹元の覺岸『釋氏稽古略』卷二（1354年成書）である。

㊶は『慈悲道場懺法』巻首に付す未詳撰者の文である。その末尾に「自梁迄今、已數百年」とあるのが年代の目安となる。梁末から數百年後とすれば早くとも北宋かそれ以降となろう。㊶～㊹に共通するのは、梁の武帝の亡妃、郗氏の因縁譚である。㊷㊸郗皇后傳によれば、中興二年（502）に蕭衍（後の梁武帝）が梁公となった時に郗氏は梁公妃となった。同じく㊷㊸によれば、郗氏は妬心強く、蕭衍が雍州刺史であった時（すなわち南齊建武二年〔495〕七月以後）に三十二歳で亡くなった。その年を㊷は永元元年（499）とするから、郗氏の生卒年は468-499である。蕭衍が梁の武帝として即位すると、郗氏は德皇后と諡された。

㊶によれば、郗氏は没後、大蛇⁶⁾となって武帝の前に現れ、死後の苦境を訴えた。武帝は郗氏を濟度するため、禮拜懺悔の手引書の編纂を決意する。それが本書『慈悲道場懺法』である。本書の效力によって郗氏は大蛇の身を脱し、麗しい天女として忉利天に轉生した。また㊶は現存する『慈悲道場懺法』十卷に相當するものを『悔文』十巻と呼び、禮拜懺悔をすべしと武帝に進言した僧名を「志公」と言う。志公は慧皎『高僧傳』卷十に立傳される保誌（418-514）である⁷⁾。ただし『慈悲道場懺法』の編纂年は、(1)から特定

5) 蔡運辰（1983: 218）によれば『慈悲道場懺法』は洪武南藏・永樂北藏・龍藏にも收めるが筆者未見。現存する高麗大藏經初雕本は『慈悲道場懺法』を含まない。

6) 大蛇のことを㊶は「蟒」、㊷は「龍」、㊸は「巨蟒」と記す。

7) 慧皎『高僧傳』卷十の保誌は、寶誌とも、寶志とも言う。[參考]『高僧傳』卷一〇法雲傳「天監五年冬早，雩祭備至，而未降雨。誌忽上啓云，『誌病不差，就官乞治。若不啓百官，應得鞭杖。願於華光殿講『勝鬘』請雨。』上即使沙門法雲講『勝鬘』。講竟，夜便大雪」（大正五〇・三九四下）。非濁『三寶感應要略錄』卷中「梁武帝欲祈雨。志公曰，『將請光宅寺雲公』。即請講『勝鬘經』。雨降受潤自足矣」（大正五一・八四〇下）。

できない。

【1.22 傳承上の撰者と年代】上に示した㊦㊧㊨㊩は、『慈悲道場懺法』の編纂時期を、郗氏逝去後とするのみで、499年以降が含意されるに過ぎない。武帝その人の撰か、武帝が諸僧に命じて編纂させたかも不明確である。上掲㊦は冒頭に「此懺者、梁武帝爲皇后郗氏所集也」と言うのは武帝撰とする説である⁸⁾。一方、大正新脩大藏經の校勘記によれば、巻一題下に「梁朝諸大法師集撰」と記す本がある。これは武帝の敕によって複数の僧が編纂したと見なす傳承を示す。また、元の慶吉祥等『至元法寶勘同總錄』（1285年成書）巻一〇に『慈悲道場懺法』十巻、梁誌公、寶唱等集」と記すのも複数による編纂とする説である⁹⁾。

一方、『慈悲道場懺法』の年代についての傳統説はどうか。上掲『釋氏稽古略』巻二は『慈悲道場懺法』の編纂にかかる期日を「慈悲懺法」という項で示し、天監二年（503）に排列する。想像するにその理由は、郗氏の卒年は上述の通り499年であり、死後に大蛇に生まれ變わって苦境を訴えたという筋書きから卒年直後の頃の出來事と見立てたのであろう。因みに上記㊦未詳撰者「慈悲道場懺法傳」は、大蛇の現れを「郗氏崩後數月」のこととする。これによれば499～500年の出來事か。

【1.23 目次復元の試み】『慈悲道場懺法』は十巻という大部の書であるにもかかわらず、全體の構成を示す解説や目次の類いをもたない。それ故、何をどのように排列するか容易に知ることができない。極端に言えば、過去の罪業を懺悔する文言を亂雜に延々繰り返すだけの書であるかの印象すら與えかねない。しかしそのような理解は正鵠を射ていない。かなり緩やかな構成であることは否定できないけれども、十巻は大きな流れに沿った内容を示している。

まず冒頭に掲げるのは(1)未詳撰者「慈悲道場懺法傳」である。これが一種の序の如き役割を果たしている。しかし撰者は全十巻の編纂より數百年後の人であるから、本書成立當初は序も導入部もなかった。

巻一は「慈悲道場」という四字に言い及び、彌勒の夢に感通したことを略記する¹⁰⁾。そして「歸依三寶第一。斷疑第二。懺悔第三。發菩提心第四。發願第五。發迴向心第六」

8) 更に『大明三藏聖教南藏目錄』（『洪武南藏』目錄）は書名を『梁武慈悲道場懺法』とする（『昭和法寶總目錄』第二卷・三五三中）。

9) 慶吉祥等『至元法寶勘同總錄』巻一〇（『昭和法寶總目錄』第二卷・二三八中）。

10) 巻一冒頭「立此「慈悲道場」四字、乃因夢感彌勒世尊」云云（大正四五・九二二下）。

の六段を示した後、「歸依三寶第一」と題する内容が始まる。ここだけを見ると、本書全體が以上の六段から成るかのように見えるが、そうではない。以下に、十卷全體の構成を示す言葉を「」付きで引用し、目次の復元を試みる。およそ次の通りである¹¹⁾。

卷一	(無題, 第一群)	(無題: 導入部)	卷一	[T45, 922c-923a]
		「歸依三寶」第一		[T45, 923a-924b]
		「斷疑」第二		[T45, 924b-926b]
		「懺悔」第三		[T45, 926b928a]
卷二	(無題, 第一群)	「發菩提心」第四	卷二	[T45, 928a-929c]
		「發願」第五		[T45, 929c-931a]
		「發迴向心」第六		(「發迴向心」) [T45, 931a-c] 「讚佛呪願」 [T45, 931c-932a] ¹²⁾
卷三	(無題, 第二群)	「顯果報」第一	卷三・四	[T45, 932a-939a]
卷四		「出地獄」第二	卷四	[T45, 939a-942a]
卷五		「解怨釋結」第三	卷五・六	[T45, 942a-949b]
卷六		「發願」第四	卷六	(「發願」) [T45, 949b-950a] 「讚佛呪願」 [T45, 950a] ¹³⁾
卷七	(無題, 第二群)	「自慶」第一	卷七	(無題: 導入部) [T45, 950b] (無題: 「自慶第一」導入部) [T45, 950b-951b]
				「警緣三寶」第二 [T45, 951b-952a]
				「主謝大衆」第三 [T45, 952a-b]
				「總發大願」第四 [T45, 952b-953a]
				「奉爲天道禮佛」第一 [T45, 953a-c]
				「奉爲諸仙禮佛」第二 [T45, 953c-954a] ¹⁴⁾
				「奉爲梵王等禮佛」第三 [T45, 954a]
				「奉爲阿修羅道一切善神禮佛」第四 [T45, 954b-c]
				「奉爲龍王禮佛」第五 [T45, 954c-955a]
				「奉爲魔王禮佛」第六 [T45, 955a]

- 11) 以下の目次復元を鹽入 (1977/2007: 473-476) 「品名對照表」と比較されたい。残念ながら鹽入の表はベタ書きで構造分析していないため、内容をよく理解できない。
- 12) 『慈悲道場懺法』中の偈は原則として押韻しないが例外が二箇所ある。一はこの「讚佛呪願」である。原文「大聖世尊，巍巍堂堂，神智妙達，衆聖中主。形遍六道，體散十方，頂肉髻相，項出日光。面如滿月，妙色金莊，儀容挺特，行止安詳。威震大千，群魔驚遑，三達洞照，衆邪潛藏。見惡必救，濟苦爲糧，度生死岸，爲行舟航」(大正四五・九三一下)。「堂」「王」，「方」「光」，「莊」「詳」，「遑」「藏」，「糧」「航」は押韻を示す。初偈は支謙譯『八師經』の「巍巍堂堂，猶星中月，神智妙達，衆聖中王」を踏まえる(大正一四・九六五上)。もう一箇所の押韻は直後の注に示す。
- 13) 卷六「發願」第四の「讚佛呪願」も例外的に押韻する。原文「大聖世尊，巍巍堂堂，三達洞照，衆聖中主。分身濟物，現坐道場，天人歸仰，滄粟未央。八音遠被，群魔驚遑，威震大千，慈化流芳。以慈悲力，普攝十方，長辭八苦，到菩提鄉」(大正四五・九五〇上)。「堂」「王」，「場」「央」，「遑」「芳」，「方」「鄉」は押韻を示す。直前注も見よ。
- 14) ここに「諸仙」と言う対象は、六道中の「天道」に屬する生きもののうち「諸天」「梵應」から區別される「諸仙」であるから、インド文化における天界の聖仙(／最高位の ṛṣi, devarṣi) を指す。鹽入 (1977/2007: 498) が「これは中國の仙を云っている」と解するのには従えない。

第八		「爲六道禮佛」 第二	第八	「爲人道禮佛」 第七	(無題：「爲人道禮佛」第七導入部) [T45, 955a-b]
					「奉爲國王禮佛」第一 [T45, 955b-c]
卷九	(無題, 第三群)		卷九	「三惡道禮佛」 (第八)	「奉爲諸王禮佛」第二 [T45, 955c-956a]
					「奉爲父母禮佛」第三 [T45, 956a-b]
					「各爲過去父母禮佛」第四 [T45, 956b-c]
					「奉爲師長禮佛」第五 [T45, 956c-957b]
					「爲十方比丘, 比丘尼禮佛」第六 [T45, 957b-c]
					「爲十方過去比丘, 比丘尼禮佛」第七 [T45, 957c-958a]
					「爲阿鼻地獄禮佛」第一 [T45, 958a-c]
					「爲灰河, 鐵丸等地獄禮佛」第二 [T45, 958c-959a]
					「爲飲銅, 炭坑等地獄禮佛」第三 [T45, 959a-b]
					「爲刀兵, 銅釜等地獄禮佛」第四 [T45, 959b-c]
第十		「發願」第四	第十		「爲火城, 刀山等地獄禮佛」第五 [T45, 959c-960a]
					「爲餓鬼道禮佛」第六 [T45, 960a-b]
					「爲畜生道禮佛」第七 [T45, 960b-c]
					「爲六道發願」第八 [T45, 960c-961a]
					「警念無常」[T45, 961a-c]
					「爲執勞運力禮佛」[T45, 961c-962a]
					(無題) [T45, 962a-b]
					「說迴向法」[T45, 962b-c]
					「菩薩迴向法」[T45, 963a-c]
					(無題：「發願」第四導入部) [T45, 963c]
第十		「囑曇」第五	第十		「初發眼根願」[T45, 963c-964a]
					「初發耳根願」[T45, 964a-c]
					「初發鼻根願」[T45, 964c-965a]
					「初發舌根願」[T45, 965a-b]
					「初發身根願」[T45, 965b-c]
					「初發意根願」[T45, 965c-966a]
					「初發口願」[T45, 966a-b]
					「諸行法門」[T45, 966b967a]
(無題：「囑曇」第五導入部) [T45, 967a-c]					
					「讚佛呪願」[T45, 967c]

この表が示すように、全十巻は巻一・巻二の第一群、巻三～巻六の第二群、巻七～巻十の第三群の三部に分かれる¹⁵⁾。前篇・中篇・後篇と稱してもよいかも知れない。しかしながら本文中には三群の呼稱が何ら示されていないため、表中ではそれぞれ無題と表した。

15) 鹽入 (1977/2007: 479-482) は全十巻を四部に分ける構成を掲げるが、筆者には納得できない。

第2節 他の同時代文獻に見られる併行句

本節では『慈悲道場懺法』の内容と年代を推測する一助として、『慈悲道場懺法』とそれ以外の書の間に見られる併行句——有意義な同一文言——を調査する。筆者は十卷全體について一通りの調査を終えたが、結果として、夥しい分量の併行句を見出せる。それらは四種に大別できる。

- ①『慈悲道場懺法』が直接引用する漢譯經論か、書名を示さず暗黙裏に用いる漢譯經論
- ②『慈悲道場懺法』との併行句を有する、後代の漢譯經論。
- ③『慈悲道場懺法』が直接引用する漢語文獻か、書名を示さず暗黙裏に用いる漢語文獻。漢譯以外。
- ④『慈悲道場懺法』との併行句を有する、後代の漢語文獻。漢譯以外。

これらは皆それぞれ価値を有するが、併行句の網羅的指摘は繁瑣を極め、また繁瑣なるが故に、かえって『慈悲道場懺法』形成史の要を曖昧にしかねない。本節では③の一部のみを選択的に取り上げる。

本節で検討対象とする文獻は以下の八種である。

- (1)『慈悲道場懺法』十卷（大正新脩大藏經第四五卷一九〇九號）

これを主題とし、そこに見られる特徴的な語句を次の(2)～(8)と対照する。

- (2)[梁]武帝「斷酒肉文」（大正新脩大藏經第五二卷二一〇三號、道宣『廣弘明集』卷二八收）

研究班「中國在家の佛教觀：唐道宣撰『廣弘明集』を読む」で現在會讀中の文獻である。『慈悲道場懺法』と一致する語彙は多くないけれども、武帝（502-549在位）「斷酒肉文」と『慈悲道場懺法』とがその他の文獻に認められない語句を共有する場合がある。

- (3)蕭衍「東都發願文」一卷（ベリオ將來敦煌寫本二一八九號；Pelliot chinois 2189）

従來の『慈悲道場懺法』形成史研究においてこの文獻はほとんど注目されてこなかった。注目すべき例外がある。郭麗英（1993）「敦煌本《東都發願文》考略」、李秀花（2008a）「《慈悲道場懺法》成書考」、李秀花（2008b）「論齊梁皇族蕭氏願文」である¹⁶⁾。李

16) 筆者はこれら三研究を見落としていたが、同僚である共同研究班班員の倉本尚徳氏から教示を受けて知るに至った。倉本氏にここに深く感謝する。

氏は(1)『慈悲道場懺法』と(3)梁武帝「東都發願文」の間に密接な語彙の共通性があることと、本稿で次項に論ずる『淨住子』と『慈悲道場懺法』の繋がりを簡潔に指摘する。

(3)「東都發願文」にはただ一つペリオ敦煌寫本 2189 のみが現存する如くである。郭麗英と李秀花の研究以外にも筆者の氣付いていない重要な論文があるかも知れない。寫本の跋文に「東都發願文」一卷という書名が記され、西魏の「大統三年(537)五月一日」の書寫であることや、供養者その他が記される¹⁷⁾。寫本全體の録文として黄徵・吳偉(1995: 283-290)がある¹⁸⁾。本稿で引用する原文は黄徵・吳偉(1995)に従う。

この寫本は四紙餘りの短文の中に「弟子蕭衍」を二十六回、「弟子蕭衍之身」を二回、「蕭衍」を二回、合わせて三十回の多きに涉り撰者蕭衍の名を記す。蕭衍は言うまでもなく梁の武帝である。そればかりでなく、實際に使用する語句の中には『慈悲道場懺法』やその他梁代佛教文獻と共通するものが多い。その一部は已に郭麗英と李秀花の兩女史が指摘しているが、他にも幾つかの事柄を指摘できる。

(4)[唐]道宣「統略淨住子淨行法門」三十一門(大正新脩大藏經第五二巻二一〇三號、道宣『廣弘明集』卷二七收)

これは唐の玄奘と同時代の道宣(596-667)の撰書である。「統略淨住子淨行法門」には基づく先行文獻がある。それは南齊の蕭子良(460-494)が撰した『淨住子』二十巻である。原本である『淨住子』は現存しないが、元來の二十巻の語句をほぼそのまま用いて一卷に節略したものが「統略淨住子淨行法門」である(ただし僅少なながら例外的な加筆もある)¹⁹⁾。それを集録する『廣弘明集』の成書は道宣晩年の664年であった。

このような経緯から我々は「統略淨住子淨行法門」に記される内容および語彙を七世紀中頃の資料としてでなく、梁の武帝に先行する蕭子良の時代の内容および語彙と解することができる。道宣の序によれば、蕭子良『淨住子』の成書は南齊の永明八年(490)とされる²⁰⁾。

17) 郭麗英(1993: 106)。

18) 跋文題録のみの録文注として、更に池田(1990: 120-121)「梁武帝東都發願文中大覺寺智嚴、令狐休寶題記」を参照。

19) 蕭子良『淨住子』二十巻の原本になく道宣『統略淨住子淨行法門』で新たに補足されたと推定される箇所として現在指摘されているのは「敬重正法門第二十六」における「年垂六百」「易州石經」「朔州恆安石窟」「西印度黑峰山寺」である。船山(2006: 308)の第三章第三章第二節分「道宣による改變と加筆」を見よ。

20) 道宣「統略淨住子淨行法門序」(『廣弘明集』卷二七)「以齊永明八年、感夢東方普光世界天王如來、樹立『淨住淨行法門』、因其開衍」(大正五二・三〇六上)。和譯「齊の永明八年(490)に、夢のなかで東方の普光世界天王如來に感通し、『淨住淨行法門』を樹立し、それ

(5)[唐] 道世『法苑珠林』百卷（大正新脩大藏經第五三卷二一二二號）

道宣と同じく智首に師事した道世も、『淨住子』からの轉載である、一部引用である等と明記せず『淨住子』の文言を用いることがある。どこが該当するかは「統略淨住子淨行法門」と仔細に比べて始めて分かる。

『法苑珠林』百卷の成書は、李儼「法苑珠林序」によれば總章元年（668）であるが、百卷の大著が突然一擧になったとは考えられない。先行研究によれば、658年頃から約十年をかけて編纂されたと想定される。本稿もこの假説に暫定的に従う。また、道世には別に『諸經要集』二十卷という撰著もある（大正新脩大藏經第五四卷二一二三號）。兩書は内容的に大幅に重複するが、『淨住子』に基づく箇所は『法苑珠林』に現れる場合が多いので、本稿では『法苑珠林』との對應を掲げ、『諸經要集』との一致は注記に止める²¹⁾。

(6)[唐] 懷信(?/慧祥?)²²⁾『釋門自鏡錄』卷上引「南齊竟陵文宣王『淨住子』略〈新錄〉²³⁾」

本書には説話性が強いが、一箇所に『淨住子』に基づく引用が見られる。しかも引用文は「統略淨住子淨行法門」の對應箇所より詳細である。そこで道宣の統略本とは異なる『淨住子』二十卷の原文を推定する文献資料として『釋門自鏡錄』の引用文を検討する。

(7)[梁] 蕭綱「唱導文」（大正新脩大藏經第五二卷二一〇三號、道宣『廣弘明集』卷一五收）

上記(4)～(6)は南齊蕭子良『淨住子』と関係するものであったが、再び梁代文献に戻る時、更に二つの書に『慈悲道場懺法』に特徴的な語彙が見られる。その一つが(7)「唱導文」であり、撰者は、後に簡文帝として即位することになる蕭綱（503-551）である。

(8)[梁] 簡文帝（蕭綱）「四月八日度人出家願文」（大正新脩大藏經第五二卷二一〇三號、道

によって廣く法を説き弘めた」。船山（2006:9,88）参照。

21) 『法苑珠林』『諸經要集』の先後関係について筆者は、山内（1974）と川口（1975/2000）に基づいて『法苑珠林』が『諸經要集』に先行したと假定する。

22) 『釋門自鏡錄』は撰者・撰時共に確定的でない。大正新脩大藏經本は撰者を懷信とするので本稿も假に従っておく。しかし撰者は慧祥なりとの説もある。西山進によれば、『釋門自鏡錄』の撰者は懷信撰でなく、武周期末から玄宗期初年の間に成立したと主張する（西山1995そこに引用される先行研究を参照）。この可能性は確かに考慮すべきであろう。

23) 『釋門自鏡錄』には「新錄」と明記する資料が十五點ある。新錄とあるからには舊錄または原錄と稱すべきものが存在し、『釋門自鏡錄』の編纂過程に最低二段階あったと想定すべきだが、詳細は筆者には不明。

未詳撰者『慈悲道場懺法』十巻の資料價值

宣『廣弘明集』巻二八收)

これも『慈悲道場懺法』と共通の語彙を示す。蕭綱が簡文帝に在位したのは549-551年であった。

さてこれら文献八種に共通する語彙を抽出するに当たり、本稿では以下に原文A~Jの九箇所を取り上げる。もちろん共通する語彙を示すのは九箇所だけではないが、原文A~Jを集中的に精査することによって、文献八種の語彙的特性を考察する。

原文の相互比較は細かな字句にわたるため、理想を言えば、単色刷りとせずに多色で區別しながら共通箇所と相違箇所とを視覚的に示すのが最善である。しかし多色印刷できない本稿は次善策として、次の下線四種と傍点と太字とによって語句を相互に關係付ける。

【2.1】～【2.10】に掲げる原文A~Jに示す下線四種および傍点・太字とそれぞれの意味	
太下線	(1)『慈悲道場懺法』原文と(2)~(8)の間に認められる完全同一の文字列
細下線	原文に現れる引用經典のうちで他文献中に同定できる文字列
二重下線	失われた『淨住子』二十巻原典に存在したと推定できる文字列 ²⁴⁾
点線	失われた『淨住子』二十巻原典に存在した可能性があると推定される文字列
傍点	大正新脩大藏經の諸佛典中、『慈悲道場懺法』のみに現れる文字列
太字	表中二箇所以上に現れる特に注目すべき文字列

最後にもう一つ但し書きを付す。本稿で漢語原文を引用する時、典型的には本節で以下に示す原文A~Jがそうであるが、現代語譯を併記せずに原文のみを示すことが多いことを諒承されたい。本稿は上記八種を主とする原文における語句の比較を中心課題とするため、専ら原文を比較し易くするよう和譯は割愛する。和譯を長々と示すことで筆者の論點が却って明確とならず論旨が曖昧になることを危惧するからである。

【2.1 原文A「斷酒肉文」一】はじめに『慈悲道場懺法』巻一と巻九に現れる(1)「斷酒肉文」と(4)「統略淨住子淨行法門」とに共通の語彙を示す。

(1)『慈悲道場懺法』巻一： 仰願大衆，各秉其心，被忍辱鎧，入深法門。 今日道場同業大衆，宜各愍重，起勇猛心，不 放逸心，安住心，大心，勝心，大慈悲心，樂善	(4)「統略淨住子淨行法門」開物歸信門第二： 若不如是，雖復殷勤倍切，直恐障礙難通。豈可 不五體投地，如太山崩，一心歸信，無復疑想。 奉爲至尊，皇太子，七廟聖靈，龍神八部，一切
---	---

24) 「統略淨住子淨行法門」は『淨住子』原本の節略本であり、一部例外的箇所を除くならば、原則として道宣は『淨住子』の語句を用いて節略したと考えられている。それ故、(4)「統

<p>心、歡喜心、報恩心、度一切心、守護一切心、救護一切心、同菩薩心、等如來心、一心志意五體投地。奉爲國王，帝主，土地人民，父母，師長，上中下座，善惡知識，諸天，諸仙，護世四王，主善罰惡²⁵⁾，守護，持呪，五方龍王，龍神八部，廣及十方無窮無盡含靈抱識，水陸空界一切衆生。</p> <p>歸依十方盡虛空界一切諸佛〈一拜〉。歸依十方盡虛空界一切尊法〈一拜〉。歸依十方盡虛空界一切賢聖〈一拜〉。(大正四五・九二三中)</p>	<p>劇苦衆生，敬禮十方一切三世諸佛，求哀懺悔。既悔已後，常行柔軟調和心，堪受心，不放逸心，寂滅心，真正心，不雜心，無貪吝心，勝心，大心，慈悲安樂心，善歡喜心，度一切心，守護衆生心，無我所心，如來心，發如是等廣勝妙心，專求多聞，修離欲定。奉戒清淨，念報恩德，常懷悅豫，不捨衆生。</p> <p>(大正五二・三〇七上～中。徐立強 1998a: 204)</p>
<p>(1) 『慈悲道場懺法』卷一： 相與人人等一痛切，五體投地，如大山崩，奉爲有識神以來，至于今身，經生父母，歷劫親緣，和尚，阿闍梨，同壇尊證，上中下座，信施檀越，善惡知識，諸天，諸仙，護世四王，主善罰惡²⁶⁾，守護，持呪，五方龍王²⁷⁾，龍神八部，廣及十方無窮無盡一切衆生，歸依世間大慈悲父。</p> <p>(大正四五・九二五上～中)</p>	<p>(2) 梁武帝「斷酒肉文」： 今日集會此是大事因緣，非直一切諸佛在此，非直一切尊法在此，非直一切聖僧在此。諸天亦應遍滿虛空，諸仙亦應遍滿虛空，護世四王亦應在此，金剛密迹大辯天神，功德天神，韋馱天神，毘紐天神，摩醯首羅，散脂大將，地神堅牢，迦毘羅王，孔雀王，封頭王，富尼跋陀羅伽王，阿修羅伽王，摩尼跋陀羅伽王，金毘羅王，十方二十八部夜叉神王，一切持咒神王，六方大護都使安國，如是一切有大神足力，有大威德力，以如是一切善神遍滿虛空，五方龍王，娑竭龍王，阿耨龍王，難陀龍王，跋難陀龍王，伊那滿龍王，如是一切菩薩，龍王，亦應遍滿在此。</p> <p>(大正五二・二九七下～二九八上)</p>
	<p>(3) 梁武帝「東都發願文」： 弟子蕭衍今日於十方盡虛空界一切三寶前，諸天，諸仙，聰明正直護法善神，十方無邊一切幽顯，不可說言廣大衆中，慚愧懺悔，功德清淨。</p> <p>(黃徵・吳偉 1995: 284; 李秀花 2008a: 36)</p>

略淨住子淨行法門」の原文は全て二重下線の対象である。一部例外箇所については船山(2006: 308「道宣による改變と加筆」)参照。なお、これ以下の各表で、同じ文字に二重下線または点線が太下線または細下線と重なる場合は、太下線または細下線を優先的に表示するものとする。これは、一字に二種の異なる線を同時に引くことが技術的に不可能であることによる便宜的手段であることを豫め了解頂きたい。

- 25) [比較] 孫綽「喻道論」「且君明臣公，世清理治，猶能令善惡得所，曲直不濫。況神明所莅無遠近幽深，聰明正直，罰惡祐善者哉」(『弘明集』卷三。大正五二・一六中～下)。
- 26) 直前注 25 を見よ。
- 27) 因みに上掲右欄の(2) 梁武帝「斷酒肉文」(大正五二・二九七下～二九八上)は、かなり凝縮した形で左欄『慈悲道場懺法』の「諸天，諸仙，護世四王，主善罰惡，守護，持呪，五方龍王」(大正四五・九二五中)に對應する。この對應關係は『慈悲道場懺法』に繰り返し現れ、ほぼ同じ表現が全十巻中に十回近く見られる。

	<p>(3) 梁武帝「東都發願文」： <u>仰願十方盡虛空界一切諸佛</u>，<u>仰願十方盡虛空界一切尊法</u>，<u>仰願十方盡虛空界一切聖僧證明</u>，弟子蕭衍今日至誠發露，慚愧懺悔，願衆罪惡皆得消滅。 (黃徵·吳偉 1995: 284)</p> <p>(3) 梁武帝「東都發願文」： <u>仰願十方盡虛空界一切諸佛</u>，<u>仰願十方盡虛空界一切聖僧證明</u>，弟子蕭衍今日大莊嚴，敬大誓願，至于道場，終不自爲，但爲救拔一切衆生，合(令)得盡苦，今日成佛。 (黃徵·吳偉 1995: 288; 李秀花 2008a: 36)</p> <p>(8) 梁簡文帝「四月八日度人出家願文」： 弟子蕭綱，以今日建齋設會功德因緣，<u>歸依十方盡虛空界一切諸佛</u>，<u>歸依十方盡虛空界一切尊法</u>，<u>歸依十方盡虛空界一切聖僧</u>。竊聞『涅槃經』言，……。受持法藏爲佛真子。一切道行，皆悉能行。一切大誓，不休不息。 <u>仰願十方盡虛空界一切諸佛</u>，<u>仰願十方盡虛空界一切尊法</u>，<u>仰願十方盡虛空界一切聖僧</u>，咸加證明。 又<u>仰願十方盡虛空界一切諸天</u>，<u>仰願十方盡虛空界一切諸仙</u>，<u>仰願十方盡虛空界一切聰明正直</u>，<u>守護一切善神</u>，又願今日現前幽顯大衆，咸加證明。 今日誓願使弟子蕭綱得如所願，滿菩提願。一切衆生，皆悉隨從，得如所願。願皆禮一拜。 (大正五二·三二四中～下)</p>
<p>(1) 『慈悲道場懺法』卷一： 又復無始以來，至于今日，以三不善根，起四顛倒，造作五逆，行於十惡，熾然三毒，長養八苦，造<u>八寒</u>，<u>八熱諸地獄因</u>，造<u>八萬四千鬪子地獄因</u>，<u>造一切畜生因</u>，<u>造一切餓鬼因</u>，造人天生老病死種種苦因，受於六道無量苦果，難可堪忍，不可聞見。如是罪惡，無量無邊，今日懺悔，願乞除滅。(某甲)等<u>重復苦到五體投地</u>，求哀悔過。 (大正四五·九二七中)</p> <p>(1) 『慈悲道場懺法』卷九「三惡道禮佛」(第八)「爲飲銅炭坑等獄禮佛」第三：</p>	<p>(2) 梁武帝「斷酒肉文」： 噉食衆生是<u>想地獄因</u>。噉食衆生是<u>黑繩地獄因</u>。噉食衆生是<u>衆合地獄因</u>。噉食衆生是<u>叫喚地獄因</u>。噉食衆生是<u>大叫喚地獄因</u>。噉食衆生是<u>熱地獄因</u>。噉食衆生是<u>大熱地獄因</u>。噉食衆生是<u>阿鼻地獄因</u>。噉食衆生是<u>八寒</u>，<u>八熱地獄因</u>，乃至是<u>八萬四千鬪子地獄因</u>，乃至是不可說不可說鬪子地獄因。噉食衆生乃至是一切餓鬼因。噉食衆生乃至是一切畜生因。當知餓鬼有無量苦。當知畜生有無量苦。畜生暫生暫死，爲物所害。生時有無量怖畏，死時有無量怖畏。此皆是殺業因緣，受如是果。若欲具列殺果，展轉不窮盡。大地草木亦不能容受。 (大正五二·二九六下～二九七上)</p>

<p>今日道場同業大衆，重複至心五體投地，普爲十方盡虛空界。一切地獄，飲銅地獄，衆合地獄，叫喚地獄，大叫喚地獄，熱地獄，大熱地獄²⁸⁾，炭坑，燒林，如是等無量無邊眷屬等獄，今日現受苦衆生，〈某甲〉等以菩提心，普代歸依世間大慈悲父。 (大正四五・九五九上)</p>	
--	--

以上の箇所から(2)「斷酒肉文」と同じ語彙が(1)『慈悲道場懺法』巻一の二箇所と巻九の一箇所に散在することを見て取れる。さらに注目すべきは(3)梁武帝「東都發願文」に(1)と同一の「諸天、諸仙」および「十方盡虛空界一切諸佛（/尊法）」という、他にほとんど用例のない特徴的な語を見出せることである。

【2.2 原文 B「斷酒肉文」】次に(1)『慈悲道場懺法』と(2)「斷酒肉文」のみに見られる対応語句を示す。

<p>(1)『慈悲道場懺法』巻六「解怨釋結」： 又無始已來，至于今日，或殺害衆生，<u>噉食</u>其肉，或縱三毒，鞭打衆生，或以毒食飼殺衆生，如是怨對無量無邊。今日懺悔，願乞除滅。 …… 又無始已來，至于今日，無慈悲行，在六道中，於一切衆生備加楚毒。或鞭打眷屬，不以其道。或繫或縛，鎖械幽閉。或考掠側立，刺射傷毀。或斬截殘害，剝炙燒煮。如是怨對無量無邊。今日懺悔，願乞除滅。 (大正四五・九四六下)</p>	<p>(2) 梁武帝「斷酒肉文」： <u>噉食</u>衆生是自燒因。<u>噉食</u>衆生是自煮因。<u>噉食</u>衆生是自炮因。<u>噉食</u>衆生是自炙因。<u>噉食</u>衆生是自割因。<u>噉食</u>衆生是自剝因。 …… <u>噉食</u>衆生是鞭因，<u>噉食</u>衆生是杖因。<u>噉食</u>衆生是答因，<u>噉食</u>衆生是督因。<u>噉食</u>衆生是罵因，<u>噉食</u>衆生是辱因。<u>噉食</u>衆生是繫因，<u>噉食</u>衆生是縛因。<u>噉食</u>衆生是幽因，<u>噉食</u>衆生是閉因。 (大正五二・二九六中。二九六下)</p>
--	---

兩書は「鞭」「繫」「縛」「幽」「閉」の出し方が近似する一方で、「剝炙燒煮」を四字とするか分解して示すかに違いがある。一連の箇所に同じ語彙を示す點に兩書の語彙の共通性を指摘できよう。

【2.3 原文 C】次に示す原文はやや複雑な関係を示す。(2)「斷酒肉文」は關與しないが、

28) 南本『大般涅槃經』巻一〇「……。是諸光明皆悉遍至阿鼻地獄，想地獄，黑繩地獄，衆合地獄，叫喚地獄，大叫喚地獄，焦熱地獄，大焦熱地獄。是八地獄」(大正一二・六七一上～中)。表の右欄の(2)「斷酒肉文」は、「想地獄」「黑繩地獄」を先に挙げ、「阿鼻地獄」を末に置くので都合八地獄となる。その意味では『大般涅槃經』の地獄數と一致する。しかし『大般涅槃經』の「焦熱地獄」と「大焦熱地獄」「斷酒肉文」は「熱地獄」「大熱地獄」とするのは『大般涅槃經』と合わず、表の左欄『慈悲道場懺法』巻九と合う。その意味で「斷酒肉文」は『慈悲道場懺法』の語彙と一致する。

(1)『慈悲道場懺法』の一箇所と(4)「統略淨住子淨行法門」に加えて(5)「法苑珠林」と(6)『釋門自鏡錄』が關わる。構成を理解し易くするために、原文を§1~§8に細分して示す。

面倒なことが3つある。

第一に、關連五文獻の對應箇所が§1~§8の順に現れないことである。(4)と(5)の對應語は共に§1~§8の順に現れるのに對して(5)には他と對應しない文言が入り、かつ§1, §8, §6の順に語が現れる。

第二に、(4)と(5)は對應語順が共通するけれども、(4)に現れない語が(5)には『淨住子』からの引用の形で複数箇所に現れることである。

第三に、(5)は『淨住子』からの引用であるとも「統略淨住子淨行法門」からの引用であるとも言わないけれども、(4)と完全に一致する文字列が存在する一方で、(4)とは對應しない(7)の文言の中に(4)と完全に一致する文言が存在することである。

この箇所においても上記四種の下線を區別して使用するが、それだけでは明らかにならない箇所として直前に指摘した第三點が存在するため、例外として、(5)と(7)の間のみ完全一致する語句をゴチックで表示することによって理解の便を圖ることとする。

(1)『慈悲道場懺法』卷三： § 1. 今試檢校，從旦至中，從中至暮，從暮至夜，從夜至曉，乃至一時一刻，一念一頃，無有片心念三寶，四諦。無有片心報父母恩。無有片心報師長恩。無有片心欲 [1]布施， [2]持戒， [3]忍辱， [4]精進。無有片心欲學 [5]禪定，修 [6]智慧業。 § 4. 清白之法，無一可論。煩惱重障，森然滿目。 § 6. 若不作此檢察，亦自言「我功德不少，有小片善」，而生恃賴言「我能作，他不能作」，言「我能行，他不能行」。意氣高傲，傍若無人。追此而言，實可羞恥。今於大眾前，披誠發露，懺悔衆罪。願布施歡喜，將來無障。大眾亦宜自浣身心。果報之徵，具如向說。豈得自寬，不求捨離。大眾莫言，「我無是罪」。我既無罪，何須懺悔。若有此念，願即除滅。 (大正四五・九三三上~中)		
(4)「統略淨住子淨行法門」檢覆三業門第七： § 1. 剋責之情猶味，審的之旨未彰。故以事檢心，校所修習。既知不及，彌增悚惡。何謂檢校。檢我此身，從旦至中，從中至暮，從暮至夜，從夜至曉，乃至一時一刻，一念一頃，有幾心	(5) 道世『法苑珠林』卷八三「六度篇精進部述意部」： § 1. 夫忍行之情猶味，審的之旨未顯。所以策墮，令心不懈。是故『經』曰，「汝等比丘，當勤精進。十力慧日既已潛沒，汝等當爲無明所覆」 ²⁹⁾ 。又言，「闍提之人，屍臥終日。當言成道，	(6)『釋門自鏡錄』卷上： 南齊蕭子良撰『淨住子』二十卷中有「檢校三業門」。今略云爾： § 1. 次復檢校。彌增悚惡。何謂檢校。我此身，從旦至中，從中至暮，從暮至夜，從夜至曉，乃至一時一刻，一念一頃，有幾心幾善幾惡。

29) 南本『大般涅槃經』卷二「是故，汝等應當精進，攝心勇猛，摧諸結使。十力慧日既潛沒已，汝等當爲無明所覆」(大正一二・六一六中)。

<p>幾行幾善幾惡。 <u>幾心欲摧滅煩惱。</u> <u>幾心欲降伏魔怨。</u> <u>幾心念三寶，四諦。</u> <u>幾心念苦，空，無常。</u> ① <u>幾心念報父母恩慈。</u> <u>幾心願代衆生受苦。</u> <u>幾心發念菩薩道業。</u> <u>幾心欲 [1] 布施， [2] 持戒， 幾</u> <u>心欲 [3] 忍辱， [4] 精進， 幾心</u> <u>欲 [5] 禪寂， 顯 [6] 慧。</u></p> <p><u>幾心欲慈濟五道。</u> <u>幾心欲勸勵行所難行。</u> <u>幾心欲超求辨所難辨。</u> <u>幾心欲忍苦建立佛法。</u> <u>幾心欲作佛化度群生。</u> ②</p> <p>§ 2. <u>上已檢心， 次復檢口。</u> 如 <u>上時刻， 從旦已來，</u> <u>已得演說幾句深義。</u> <u>已得披讀幾卷經典。</u> <u>已得理誦幾許文字。</u></p>	<p>無有是處」³⁰⁾。『釋論』云，「在家 懈怠，失於俗利。出家懶墮，喪 於法寶」³¹⁾。是以斯那勇猛，諸佛 稱揚迦葉精奇，如來述讚³²⁾。 『書』云，「夙興夜寐，竭力致 身，乃曰忠臣，方稱孝子」³³⁾。故 知放逸懈怠之所不尚，精進劬勞 無時不可。豈得恣其愚懷，縱情 僥蕩，致使善根種子不復開敷。 道樹枝條，彌加枯瘁。況復命屬 死王，名繫幽府。奄歸長夜，頓 罷資糧。冥曹拷問將何酬答。當 於此時悔恨何及。是故令者勸諸 行人。聞身餘力預備前糧。常須 檢校三業。勿令違於六時。每於 晝夜，從旦至中，從中至暮，從 暮至夜，從夜至曉，乃至一時一 刻，<u>一念一刹那，檢校三業。</u> <u>幾心行善，幾心行惡。</u> <u>幾心行孝，幾心行逆。</u> <u>幾心行厭離財色心，幾心行貪著</u> <u>財色心。</u> <u>幾心行人天善根業，幾心行三塗</u> <u>不善業。</u> <u>幾心厭離名聞著我心，幾心貪求</u> <u>名聞著我心。</u> <u>幾心欣修三乘出世心，幾心輕慢</u> <u>三乘，深樂世間心。</u> § 8a. 如是善惡，日夜相違。行 者常須檢校，勿令放逸，墮於邪 網。常省三業遞相誠勸，<u>心，口</u></p>	<p><u>幾心欲摧滅煩惱。</u> <u>幾心欲降伏魔怨。</u> <u>幾心念三寶，四諦。</u> <u>幾心念報父母恩育。</u> <u>幾心願代衆生受苦。</u> <u>幾心發念菩薩道意。</u> <u>幾心欲 [1] 布施， [2] 持戒， 幾</u> <u>心欲 [3] 忍辱， [4] 精進， 幾心</u> <u>欲 [5] 禪寂， [6] 念定。</u> <u>幾心欲顯無相智。</u> ④ <u>幾心欲慈悲救攝。</u> ⑤ <u>幾心欲廣³⁴⁾度五道。</u> <u>幾心欲獎策勸勵行所難行。</u> <u>幾心欲超求勝果辨所難辨。</u> <u>幾心欲捍勞忍苦建立佛法。</u> <u>幾心欲捨身命，護持三寶。</u> ⑥ <u>幾心欲紹繼佛種，使不斷絕。</u> ⑦ <u>幾心欲化諸外道，使入正法。</u> ⑧ <u>幾心念諸聲聞所作已辦。</u> ⑨ <u>幾心念諸菩薩行地功德。</u> ⑩ <u>幾心專念求如來智。</u> ⑪ <u>幾心自念我當作佛。</u> ⑫ <u>幾心運想緣諸淨利。</u> ⑬ <u>幾心發意觀地獄苦。</u> ⑭</p> <p>§ 2. <u>次復檢口。</u> <u>從旦已來， 次</u> <u>第時刻，</u> <u>已得演說幾句深義。</u> <u>已得披讀幾卷經典。</u> <u>已得理誦幾許文字。</u></p>
---	---	---

30) 法顯譯『大般泥洹經』卷三「真解脫者，亦復如是。非時得者，無有是處。如一闍提懈怠懶惰，尸臥終日，言當成佛。若成佛者，無有是處」(大正一二·八七三下)。

31) 未同定。『釋論』は『大智度論』の異稱。

32) 未詳。

33) 未同定。[參考]『論語』學而「賢賢易色，事父母能竭其力，事君能致其身，與朋友交，言而有信，雖曰未學，吾必謂之學矣」。『孝經』士「資於事父以事母，而愛同。資於事父以事君，而敬同。故母取其愛，而君取其敬，兼之者父也。故以孝事君則忠，以敬事長則順。忠順不失，以事其上，然後能保其祿位，而守其祭祀。蓋士之孝也。『詩』云，「夙興夜寐，無忝爾所生」。

34) 「廣」は「濟」の誤りか。

<p>已得幾過³⁵⁾歎佛功德。 已得幾過稱菩薩行。 已得幾過稱讚，隨喜。 已得幾過迴向，發願。³⁾</p> <p>§ 3. 次復檢身。如上時刻， 已得幾過屈身禮佛幾拜。 已得幾過屈身禮法，禮僧。 已得幾過執勞掃塔塗地。 已得幾過燒香，散花然燈。</p> <p>已得幾過拂除塵垢， 正列供具。 已得幾過懸幡表利，合掌供養。 已得幾過遶佛，恭敬幾¹⁰⁰匝。</p> <p>§ 4. 如是檢察，會理甚少，違道極多。白淨之業，裁不足言。煩惱重障，森然滿目。闇蔽轉積，解脫何由。</p> <p>§ 5. 如上檢察，自救無功，何有時閑議人善惡。故須三業自相訓責，知我所作幾善幾惡。 (大正五二・三〇九中～下)</p>	<p>相訓，心語口言，「汝常說善，莫說非法」。¹⁷⁾ 口還語心，「汝思正法，莫思非法」。心復語身，「汝勤精進，莫行懈怠」。¹⁸⁾</p> <p>§ 8b. 如是我心自制我口，自慎我身自禁。¹⁹⁾如是自策，足得高昇。何勞他控橫起怨憤。²⁰⁾故『經』曰，「身行善，口行善，意行善，定生善道。身行惡，口行惡，意行惡，定生惡趣」³⁶⁾。又「如快馬顧影馳走，不同驚畜，加諸杖捶」³⁷⁾。若不自誠，要假他呵。反增觸惱，益罪尤深也。 (大正五三・八九六下～八九七上)</p> <p>[參考] 道世『諸經要集』卷一〇「六度部精進篇述意緣」，大正五四・九八上～中もほほ同文。</p>	<p>已得幾迴³⁸⁾歎佛功德。 已得幾迴稱菩薩善。 已得幾迴稱讚，隨喜。</p> <p>§ 3. 次復檢身。如是時刻，從旦已來，屈躬俯仰禮佛幾拜，乃至法，僧，其數多少， 已得幾迴掃塔塗地。 已得幾迴然燈散華。 已得幾迴入佛堂殿。¹⁵⁾ 已得圍遶幾十匝。 已得幾迴拂除塵垢。 已得幾迴整列供具。 已得頂戴幾許幢幡。 已得焚燒幾許妙香。</p> <p>§ 4. 試作如是檢察，故知會理甚少，違道極多。白淨之業，裁不足言。煩惱重障，森然滿目。闇蔽轉積，解脫何由。</p> <p>§ 5. 若迴世，俗語言戲，朋聚遊適，作此檢校，惡何由起。唯得自救無暇，豈復議及於人。</p> <p>§ 6. 若復不作此檢校，亦復言「我功德不少，有許斥(→片)善，便自謂「人不能作，而我能作」，「人不能行，而我能行」。</p>
--	--	--

35) 「過」は「迴」と同義。

36) 僧伽提婆譯『增壹阿含經』卷二三「諸有衆生身行惡，口行惡，意行惡，誹謗賢聖，恆懷邪見，與邪見相應。身壞命終，生地獄中。諸有衆生身行善行，口修善行，意修善行，不誹謗賢聖，恆修正見，與正見相應。身壞命終，生善處天上」(大正二・六六六下)。

37) 未詳。

38) 「迴」は「過」と同義。

	<p>(3) 道世『法苑珠林』卷第七十七，十惡篇慳貪部述意部：</p> <p>§ 8c. 夫群生惑病，著我爲端。凡品邪迷，慳貪爲本。所以善輕毫髮，惡重丘山¹⁷。福少春冰，貧多秋雨。六情之網未易能超。三毒之津無由可度。身重常沒。譬等河裏之魚。鼓翅欲飛。難同天上之鳥。致使貧貧相次競加侵逼。苦苦連綿爭來損害，似飛蛾拂焰，自取燒然，如蠶作繭，非他纏縛。良由慳惜貪障，受罪飢寒。施是富因，常招豐樂也。</p> <p>(大正五三・八六〇上～中)</p>	<p>§ 7. 若作如是檢校者，便可立知善惡淺深，輕重多少，如來大悲，愍念衆生，欲令遠苦，得安隱樂，故闡無量法門，開人天正路。而觸念違『經』，歷心背『律』。『書』，『禮』箴誠，棄捨不從。順惡逆善，念念增盛，而欲以纖毫微福。望免大苦，豈得免乎。¹⁶</p> <p>§ 8. 今檢校已畢，實知惡重丘山，善輕毛髮，便應各各責心，口相訓，心語於口，『汝常言法，莫說非法』。¹⁷口還語心，『汝常思法，莫思非法』。心復語身，『汝勤行法，莫行非法』。¹⁸如是我心自制我口，我口自制我心。我心自制我形，我形隨順我口。更相制勤，豈不爲美。¹⁹何復勞他心口，制我心口者，我寧不自愧我心口乎。²⁰</p> <p>(大正五一・八一三上～下。船山2006: 287-289)</p>
--	--	---

以上のうち(6)『釋門自鏡錄』は，冒頭に出典を「南齊蕭子良撰『淨住子』二十卷中有「檢校三業門」と明記し，道宣「統略淨住子淨行法門」には觸れない。(6)と(4)を比較すると，(4)に存在しない文が(6)には複数ある。この相違を説明する最も単純で説得力のある假説は，(6)を蕭子良『淨住子』二十卷という原典からの引用であると推定することである。なるほど確かに(4)にも(6)にない文がある。¹²³がそれである。しかしながら，(4)に對應しない(6)のみの引用は⁴～²⁰まで十七箇所ある。この相違は有意味である。

特筆すべきはこれだけではない。その第一点は，(6)の示す引用元文のうち，¹⁷と¹⁸は(5)道世『法苑珠林』に同じ番號を付した三箇所と合致し，(6)の¹⁹と²⁰は(5)道世『法苑珠林』に同じ番號を付した二箇所と合致する事實である。これは何を意味するか。(6)の成立時期よりも(5)の成立時期の方が百五十年ほど早いのである。それ故，道世が(5)を撰した時に(6)は存在しなかったから，(6)を参照することは當然できなかった。ということは

つまり、(5)と(6)に一致する⑬～⑳の四ヶ所を、道世は年代的制約から(4)道宣「統略淨住子淨行法門」からも(6)『釋門自鏡録』からも孫引きできなかったから、道世もまた蕭子良『淨住子』二十巻を参照しながら上掲箇所を編纂したと考える以外、可能性はあり得ない。

特筆すべき第二點は、表中最初に掲げた(1)『慈悲道場懺法』原文中に§6として示した一段が存在する事實である。(4)「統略淨住子淨行法門」に§6は存在しない。(5)『法苑珠林』に§6は存在するが、異なる箇所の文である。すなわち(1)『慈悲道場懺法』の§6の原文は、(6)『釋門自鏡録』とのみ合致するのである。このことは(1)『慈悲道場懺法』の成立年代ならびに性格と深く関係する。もし(1)『慈悲道場懺法』が(6)『釋門自鏡録』の文を暗々裏に引用していると假定するならば(1)『慈悲道場懺法』の成立時期は(6)『釋門自鏡録』よりも後代となる。一方、もし(1)『慈悲道場懺法』が(6)『釋門自鏡録』以前に編纂されたと假定するなら、(1)『慈悲道場懺法』は蕭子良『淨住子』二十巻本を参照しつつ編纂したことになる。

特筆すべき第三點は、(1)(4)(5)(6)の四文獻に見られる太下線の語句は、出現順序が見事に一致する事實である。(1)『慈悲道場懺法』における太下線の語句はいずれも『淨住子』または(4)「統略淨住子淨行法門」に存在する。ここから(1)『慈悲道場懺法』は『淨住子』を素材に用いて編纂されたと結論できる。複数文獻中で語句が一致するというだけならば様々な理由を想定することができるであろうが、特徴的な語句が一致し、しかもその出現順序まで同じであるという状況は、單なる偶然から生じる可能性は限りなく無に近い。最も自然で説得力のある説明は、それら語句と語句の現れる順序を共有する諸文獻には、その素材となった文獻が存在すると推定することである。今の場合、失われた『淨住子』がその素材であると考えられる³⁹⁾。

道世と道宣は師匠である智首律師の下で修學した兄弟弟子であり、共に長安で同時代を過ごした。そのような中、道世が(4)「統略淨住子淨行法門」一巻を編纂することができたということは、當然ながら、道世の手元には蕭子良『淨住子』二十巻本が保管されていたことを意味する。道世は同じ長安に住まった兄弟弟子であるから、蕭子良『淨住子』二十巻本を参照可能な環境は道世にも與えられていたと推定できる⁴⁰⁾。

39) 筆者は舊稿(船山2019b)においてこのような特殊な語句の一致のことを、“語句が飛び飛びに一致する”、“語句が散在的に一致する”、“文獻中で語句が緩やかに斑狀に一致する”という表現で示し、文獻學研究におけるその意義を論じたことがある。

40) この可能性を補強する點が少なくとも一箇所原文中にある。原文Cの表中(5)『法苑珠林』の原文§1の中に次のような「『經』曰、……。『書』云……」という形式が見られる。

『經』曰、「汝等比丘、當勤精進。十力慧日既已潛沒、汝等當爲無明所覆」。又言、「闍提之人、屍臥終日。當言成道、無有是處」。『釋論』云、「……。……。『書』云、「夙

ただ、繰り返しになるが、(5)道世『法苑珠林』には『淨住子』から引用したことを示す語句が見当たらず、そもそも他書からの引用としてでなく、自らの文——地の文——において『淨住子』の語彙を用いる。それ故、道世の残した文中のどこが引用部であり、どこが彼自身の文かを形態的に區別できない。上記原文Cにおいても(5)と(6)と一致しないような(5)の語句に関しては、そのうちどれが『淨住子』に基づき、どれが『淨住子』に基づかない道世自身の語句かを明示的に確定することは、現時点の我々にはできない。

【2.4 原文D】以下に示す原文D,E,Fは(1)『慈悲道場懺法』においても(4)「統略淨住子淨行法門」においても末尾に置かれる一連の箇所である。一致する文言を太下線で示す。三箇所の主題は共通するので、以下に三箇所すべてを合わせて検討することにしよう。まず原文を示す。

<p>(1)『慈悲道場懺法』卷十「初發眼根願」： <u>願今日道場同業大衆，廣及十方四生，六道一切衆生，從今日去，乃至菩提，眼常不見貪欲無厭詐幻之色，不見諂諛曲媚佞會之色，不見玄黃朱紫惑人之色，不見曠恚，鬪諍，醜狀之色，不見打扑，苦惱，損他之色，不見屠裂，傷毀衆生之色，不見愚癡，無信，疑闇之色，不見無謙，無敬，驕慢之色，不見九十六種邪見之色，眼常不見如是一切衆惡不善之色。</u> <u>願眼常見一切十方常住法身湛然之色，常見三十二相紫磨金色，常見八十種好隨形之色，常見諸天，諸仙奉寶來獻，散華之色，常見口出五種色光，說法度人之色，常見分身散體，遍滿十方之色⁴¹⁾，常見諸佛放肉髻光，感有緣來會之色。</u> (大正四五・九六三下～九六四上)</p>	<p>(4)「統略淨住子淨行法門」發願莊嚴門第三十一： <u>願一切衆生，皆從今日，乃至菩提，眼常不看貪姪邪艷惑人之色，不看曠恚，醜狀，屠裂，愚癡，闇鈍，倨慢邪衆之色。</u><u>願見一切十方常住法身之色，菩薩下生八相之色，如來相好，聖衆和會善集之色。</u> (大正五二・三二一上。船山2019b: 176-177)</p>
--	--

興夜寐，竭力致身，乃曰忠臣，方稱孝子」。……

「『經』曰（/云/言）……」と「『書』云（/曰/言）」を對比させ、かつ『書』が『書經』を意味するのでなく、廣く一般に外典を總稱することは『淨住子』の大きな特色である（先行研究として鹽入1961/2007: 437-440と船山2006: 282-283注50参照）。このC(5)§1に對應する語句は現存する「統略淨住子淨行法門」にない。従ってこの箇所は、蕭子良『淨住子』二十卷本の原典に基づく可能性——「統略淨住子淨行法門」が原文から削除した箇所の可能性が少なくない。なお道宣と道世にはほぼ同じ内容の解説や語句が認められることについての先行研究として土橋（1980）がある。

41) [比較] 偽經（傳曇摩伽陀耶舍譯）『無量義經』「善男子，第九是經不可思議功德力者，……，次第莊嚴諸波羅蜜，獲諸三昧，首楞嚴三昧，入大總持門，得勲精進力，速越上地，善能分身散體，遍十方國，拔濟一切二十五有極苦衆生，悉令解脫」（大正九・三八八下）。

【2.5 原文 E】

<p>(1) 『慈悲道場懺法』卷十「次發耳根願」： <u>又願今日道場同業大衆，廣及十方四生，六道一切衆生，從今日去，乃至菩提，耳常不聞啼哭愁苦悲泣之聲，不聞無間地獄受苦之聲，不聞鑊湯，雷沸振響之聲，不聞刀山，劍樹鋒，刃割裂之聲，不聞十八地獄間隔無量苦楚之聲。</u> 又願從今日去，耳常不聞<u>餓鬼飢渴，熱惱求食，不得之聲，不聞餓鬼行動，節間火然，作五百車聲。</u> 又願從今日去，耳常不聞<u>畜生身大五百由旬，爲諸小蟲，嚼食苦痛之聲，不聞抵債不還，生駝駝，驢馬，牛身常負重，鞭杖楚撻困苦之聲，耳常不聞愛別離，怨憎會等八苦之聲，不聞四百四病苦報之聲，不聞一切諸惡不善之聲，不聞鐘鈴，螺鼓，琴瑟，箏篴，琳瑯，玉珮惑人之聲。</u> 唯願一切衆生，從今日去，<u>耳常得聞諸佛說法八種音聲，常聞無常，苦，空，無我之聲，常聞八萬四千波羅蜜聲，常聞假名諸法無性之聲，常聞諸佛一音說法，各得解⁴²⁾聲，常聞一切衆生皆有佛性⁴³⁾，法身常住不滅之聲，常聞十地菩薩忍音修進之聲，常聞得無生解善，入佛慧，出三界之聲，常聞諸法身菩薩入法流水，眞俗竝觀，念念具足萬行之聲，常聞十方辟支，羅漢，四果之聲，常聞帝釋，爲諸天說『般若』之聲，常聞十地補處大士，在兜率宮，說法不退轉地行之聲，常聞萬善同歸⁴⁴⁾得佛之聲，常聞諸佛讚歎一切衆生能行十善隨喜之聲。</u> 願諸衆生常聞諸佛讚言「善哉是人不久成佛」之聲。 (大正四五・九六四上～中)</p>	<p>(4) 「統略淨住子淨行法門」發願莊嚴門第三十一： <u>願一切衆生，耳常不聞悲啼愁歎聲，地獄苦楚聲，餓鬼，畜生受苦聲，八苦交對聲，四百四病起發聲，八萬四千塵勞聲。願耳常聞諸佛說法八音聲，八萬四千波羅蜜聲，三乘聖果，十地功德，如是等聲。</u> (大正五二・三二一上。船山 2019b: 177)</p>
---	--

42) 「統略淨住子淨行法門」禮舍利寶塔門第二十五「大聖詮化，隨機感益，譬若一音說法，各得其解」。鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』「佛以一音演說法，衆生隨類各得解」(大正一四・五三八上)。南本『大般涅槃經』卷九「佛以一音而爲說法，彼彼異類各各得解」(大正一二・六六五上)。

43) 法顯譯『大般泥洹經』卷五「其無知者，聞一切衆生皆有佛性，不知其眞，便妄想說」(大正一二・八八七下)。南本『大般涅槃經』卷七「一切衆生皆有佛性」(大正一二・六四五中)＝卷八(六五四中)＝卷九(六六〇上)。

44) 『書』蔡仲之命「爲善不同，同歸于治。爲惡不同，同歸于亂」。

【2.6 原文 F】

<p>(1)『慈悲道場懺法』卷十「次發意根願」： 又願今日道場向衆大衆，廣及十方一切衆生，<u>從今日去，乃至菩提，意常得知貪欲，瞋恚，愚癡爲患，常知身殺，盜，姪，妄言，綺語，兩舌，惡口爲患，常知殺父，害母，殺阿羅漢，出佛身血，破和合衆是無問罪，常知謗佛，法，僧，不信因果，人死更生報應之法，常知遠惡知識，親近善友，常知謔受九十六種邪師之法爲非，常知三漏，五蓋，十纏之法是障，常知三途可畏，生死酷劇苦報之處。</u> <u>願意常知一切衆生皆有佛性，常知諸佛是大慈悲父，無上醫王，一切尊法爲諸衆生病之良藥，一切賢聖爲諸衆生看病之母。</u> (大正四五・九六五下)</p>	<p>(4)「統略淨住子淨行法門」發願莊嚴門第三十一： <u>願一切衆生，皆從今日，乃至菩提，意常覺知九十八使，八萬四千塵勞之法，十惡，五逆，九十六種邪師之法，三途可厭，生死大苦。</u>願意常知一切衆生皆有佛性，佛爲醫王，法爲良藥，僧爲看病者，爲諸衆生，治生死患，令得解脫，心常無礙，空有不染。 (大正五二・三二一中。船山 2019b: 179)</p>
---	--

以上に示した原文 E, F, G から分かることは何か。私見によれば、この三箇所には共通の特徴が見られる。それは【2.3 原文 C】において結論として示したことと同じく、この三箇所においても、(1)『慈悲道場懺法』における太下線の語句の現れる順序が(4)「統略淨住子淨行法門」における對應語句の出現順序と完全に一致することである。これは、【2.3 原文 C】に示したこと——(1)『慈悲道場懺法』は『淨住子』を素材に用いて編纂されたという假説——を補強する根據となる。

三箇所に共通する傾向は更に指摘できる。それは三箇所それぞれにおいて太下線は、(1)『慈悲道場懺法』においては前半にはほぼ集中し、引用原文の後半に對應が僅少である事實と、(1)『慈悲道場懺法』における語句の對應はやや散在的であり、(4)「統略淨住子淨行法門」にない語句を挿入する箇所も少なくない事實である。ここから一義的な結論を導くことはできないが、『慈悲道場懺法』において太下線が現れない後半部位においても『淨住子』二十卷の對應語句が含まれている可能性は大いにあり得る。

【2.7 原文 G】次の原文は、(1)『慈悲道場懺法』では繼續する一連の文が(4)「統略淨住子淨行法門」では開物歸信門第二と善友勸獎門第十九という連續しない箇所に對應することを示す。太下線を参照する限りでは『淨住子』を素材とするように思えるが、各語彙の現れる順序を考慮すると整然とした對應とは言い難い。

<p>(1)『慈悲道場懺法』卷五「解釋結第三」： 相與今日何故受生死身，不得解脫。<u>進不觀面前授記，退不聞一音演說。良由罪業深厚，怨結牢固。非唯不見前佛後佛，菩薩賢聖。而亦將恐十二分教聞聲傳響，永隔心路。惡道怨對，無從得免。捨此形命，方沈沸海。輪轉三途，備歷惡趣。何當復得見此人身。發如是意，實有切情之悲，運如是</u></p>

想，不覺痛心之苦。相與已得仰淪風化，割愛辭親，捨榮棄俗，更無異緣，豈得不與時競各求所安。若不堅強其志，捍勞忍苦，銜悲惻愴者，忽使身被篤疾，中陰相現。

獄卒羅利，牛頭阿旁，殊形異狀，一朝而至，風刀解身，心懷怖亂。眷屬號無所覺知。當此之時，欲求今日起一善心，五體投地，禮佛懺悔，豈可復得。但有三途無量衆苦。

今日大衆各自努力，與時馳競。若任情適意，則進趣理遲。捍勞忍苦，則趣向心疾。故『經』言，「悲是道場，忍疲苦故。發行是道場，能辦事故」⁴⁵⁾。故知萬善莊嚴，不勤無託。欲度巨海，非舟何寄。

若有願樂之心，而不行願樂之事，其願必虛，未見其果，如絕糧之人，心存百味，於其飢惱終無濟益。當知欲求勝妙果報，必須心事俱行，相與及時生增上心，懷慚愧意，懺悔滅罪，解諸怨結。脫更處闇，開了末期⁴⁶⁾。人皆解脫，莫追後悔。
(大正四五・九四五上～中)

(4)「統略淨住子淨行法門」開物歸信門第二：
如來愍念衆生，愛同一子。何常不以善權方便弘濟益之津乎。所以垂形丈六，表現靈儀，隨方應感，法身匪一。……今者雖稟精靈，昏惑障重，進不覩分衛國城，退不開八音辯說。將由罪業深厚，煩惱牢固。非惟恐不見前佛後佛，來聖近賢，深憂惡道，無由可絕。發如此意，實有切情之悲，運如是想，不覺痛心之苦，豈容順默使流，晏安苦海，沈淪沸火，而不自拔者乎。當須慷慨慄厲，挫情折意，生增上心，懺悔滅罪，去諸塵累，乃可歸信。自不堅強其志，亡身捨命，捍勞忍苦，銜悲惻愴者，將恐煩惱熾火，無由而滅。無明重闇，開了末期。譬如牢獄重囚，具嬰衆苦，抱長枷，穿大械，帶金鉗，負鐵鎖，捶撲其軀，膿瘡穢爛，周遍形骸，臭惡纏匝。而欲以此狀求見國主貴臣，雖復一心無怠，懇誠嘉到，恐升高殿，踐玉筵，亦無由而果。假令愍念欲觀為難。何以故。以其具諸罪惡不離苦具故。若去枷脫鎖，洗垢嚴服，王不我礙，自然而現。
(大正五二・三〇六下～三〇七上)

(4)「統略淨住子淨行法門」善友勸獎門第十九：
夫善惡之理，皎然明白。但以任情適道，則進趣之理遲，善友勸獎，便勇猛之心疾。『經』有獎課之文，『書』有勸學之說。當知要行實由勸成。故『經』云，「菩薩自身布施，亦勸他人令行布施。

(5)道宣『法苑珠林』卷二三「獎導篇述意部」：
夫貴賤靡常，貧富無定，譬水火更，互寒暑遞來。故見有財富室溫，衣豐人足，不勞營覓，自然而至。復見有貧苦飢弊，役力馳求，晨起夜寐，形骸為之沮悴，心情為之勞擾。縱有所獲，百方散失，終日願於富饒，未嘗暫有。以此苦故，所以勸獎，令其惠施，力厲修福。若復有人衣食服玩，鮮華香潔，春秋氣序，寒溫冷暖，四時變改，隨須無闕，而復見有尺布不完，丈帛殘弊。垢穢塵墨，臭膩朽爛。炎暑不識絺絰，冰雪不知繪纈。乃至形骸不蔽，男女露露，非唯可恥，實亦慚作。若見此苦，豈可不遠。所以勸獎，令其修福，應施衣服及以室宇。豈不見衆人皆有，而我獨無。是故應須勇猛修習。若復有人食則甘味竝薦，珍羞備舉，連机重案，滿床亘席。芳脂芬馥，馨香具列，而復有脫粟之飯不充，藜藿之羹常乏。鹽梅早自兩無，魚菜久已雙闕。乃至并日而餐，糜粥相係。雜以水果，加以草菜。萎黃因篤，自濟無方。若見此苦，豈可不遠。所以勸獎，令其修福，應施飲食及以水漿，豈可衆人皆足，而我獨困。是故應須勇猛修習。若復有人榮位通顯，乘肥衣輕，適意自在。行則天人瞻仰，住則鬼神敬

45) 鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』卷上「菩薩品」直心是道場，無虛假故。發行是道場，能辦事故。深心是道場，增益功德故。菩提心是道場，無錯謬故。布施是道場，不望報故。持戒是道場，得願具故。忍辱是道場，於諸衆生心無礙故。精進是道場，不懈退故。禪定是道場，心調柔故。智慧是道場，現見諸法故。慈是道場，等衆生故。悲是道場，忍疲苦故。喜是道場，悅樂法故。捨是道場，憎愛斷故。……」(大正一四・五四二下)。

46) 道世『法苑珠林』卷四九不孝篇述意部「夫以立忠立孝，所以揚名於後代。行逆行乖，所以受報於來苦。孝逆昇沈，善惡胡越，故大慈愍闍王之凶勃，譽羅雲之善微。將恐不孝毒火，無由而滅，惡逆重闇，開了末期。譬如牢獄重囚，具嬰衆苦，抱長枷，穿大械，帶金鉗，負

<p>自行持戒，忍辱，精進，一心，智慧，亦勸他人令行此事」。然則勝美之事，欣樂羨仰，物之恆情。今若徒有願樂之心，不行願樂之事，未見其果，猶若絕糧思味，其於飢渴，終無濟益。……今有財富室溫，家給人足，不勞營覓，自然而至。復有貧苦飢弊，形骸勞悴，終日願於富饒，而富饒未嘗暫有。以此苦故，勸其布施，力厲修福。若有衣裘服翫，鮮華充備，又有尺布不全，垢膩臭雜。是以勸獎令施衣服及以室宇。若見甘味珍羞，連几重案，又有藜藿不充，困於水菜，所以勸獎令施飲食。若見榮位通顯，乘肥衣輕，適意自在，復有卑陋猥賤，人不齒錄，塗炭溝渠，坐臥糞穢。此苦可厭，勸令修福，除滅憍慢，奉行謙敬。豈可他人常貴，我常在賤。若見形貌端正，吐言廣利，又有面狀姪陋，所言險暴。此苦可捨，勸令忍辱。若見意力强幹，少病登勞，行道無礙，有人多患不安，所行莫濟。見有此苦，勸施醫藥。令其進趣。……</p> <p>(大正五二・三一五中～下。船山 2006: 295-296)</p>	<p>貴。而復見有卑鄙猥賤，人所不齒。生不知其生，死不知其死。塗炭溝渠之側，坐臥糞壤之中。雖有叱咄之聲，反致捶撲之苦。非唯神鬼不敬，乃亦狗犬加毒。若見此苦，豈可不遠。所以勸獎，令其修福。應滅憍慢，奉行謙敬。豈可他人常貴，而我常賤。是故應當勇猛修習。若復有人形貌端正，言音風吐，常存廣利，仁慈博愛，語不傷物，而復有人而狀瘞醜，所言險暴，唯知自利，不計念彼。彼忍辱故，所以致勝。多瞋恚故，所以招惡。若見此苦，豈可不遠。所以勸獎，令其修福。應滅瞋恚，奉行忍辱。豈可以令眾人常處勝地，而我永隔淨緣。是故應須勇猛修習。若復有人意力强幹，少有疾病，常堪行道，無有障礙，而復有人羸瘵多患，氣力弊劣，動輒增困，眠坐不安，見有此惡，實宜捨遠。所以勸獎，令其修福，應施醫藥，隨時賑救。豈可眾人常無疾頓，而我永嬰沈滯。是故應須勇猛修習。凡是如此之事，實最應勸。若不相勸，則學者不勤也。</p> <p>(大正五三・四五七上～中)⁴⁷⁾</p>
--	--

上記の原文について補足しておきたいのは、(5)道世『法苑珠林』に(4)道宣「統略淨住子淨行法門」と一致する文言が同じ語順で現れるが、道世の文(5)における二重線で示した対応語句が飛び飛びに、つまりごく散在的に現れることである。もし道世が(4)道宣「統略淨住子淨行法門」を素材としたのでなく、蕭子良『淨住子』二十巻を素材としてこの箇所を編纂したと考えることが許されるならば、点線で示した語句も『淨住子』二十巻に基づく可能性が大きい。

【2.8 原文 H】次の原文(1)『慈悲道場懺法』巻一の引用中、冒頭二段落は漢譯經典に基づく文言であるが、第三段落から(4)「統略淨住子淨行法門」との語對應を示す太下線が現れる。しかし(4)「統略淨住子淨行法門」の對應部位は、順に、開物歸信門第二・三界内苦門第十四・開物歸信門第二・禮舍利寶塔門第二十五と飛び、(4)の一定部位のみに限って對應するわけではない。この傾向は直前に掲げた原文 G と共通する。

(2)梁武帝「斷酒肉文」と一致する語句は、既に原文 A に掲げたのと同じ文言である⁴⁸⁾。

鐵鎖，捶撲其軀，膿瘡穢爛，周遍形，臭惡纏匝。而欲以此狀求見慈父懇，誠難親也)(大正五三・六五九下)。

47) 道世『諸經要集』巻七獎導部誠男緣第二も一部ほぼ同文(大正五四・五八中～下)。

48) 前注 27 を見よ。

(1) 『慈悲道場懺法』卷一：

今日道場向業大眾，何故應須歸依三寶。諸佛，菩薩，有無限齊大悲，度脫世間，有無限齊大慈，安慰世間⁴⁹⁾，念一切衆生，猶如一子⁵⁰⁾。大慈大悲，常無懈倦，恆求善事，利益一切，誓滅衆生三毒之火，教化令得阿耨多羅三藐三菩提⁵¹⁾。衆生不得佛，誓不取正覺。以是義故，應須歸依。

又復諸佛慈念衆生，過於父母⁵²⁾。『經』言，「父母念兒，慈止一世，佛念衆生，慈心無盡」⁵³⁾。又父母見子，背恩違義，心生恚恨，慈心薄少。諸佛，菩薩，慈心不爾。見此衆生，悲心益重，乃至入於無間地獄大火輪中，代諸衆生，受無苦⁵⁴⁾。是知諸佛，諸大菩薩愛念衆生，過於父母⁵⁵⁾。而諸衆生，無明覆慧，煩惱覆心⁵⁶⁾，於佛菩薩不知歸向。說法教化，亦不信受，乃至僞言，起於誹謗，未曾發心，念諸佛恩。以不信故，墮在地獄⁵⁷⁾，餓鬼，畜生諸惡道中，遍歷三途，受無量苦。罪畢得出，暫

- 49) 求那跋陀羅譯『勝鬘師子吼一乘大方便方廣經』一乘章「如來無限齊大悲，亦無限齊安慰世間，無限大悲，無限安慰世間。作是說者，是名善說如來」(大正一二·二二〇下～二二一上)。
- 50) 南本『大般涅槃經』卷五「四相品」[如來等視一切衆生，猶如一子](大正一二·六三一上)。[參考] 求那跋陀羅譯『央掘魔羅經』卷一「如來等視一切衆生，如羅睺羅」(大正二·五二一下)。梁武帝「斷酒肉文」[視一切衆生，猶如一子。是故不聽令食子肉]([『廣弘明集』卷二六。大正五二·三〇二上)。
- 51) 鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷二譬喻品「舍利弗，如來亦復如是，則爲一切世間之父。於諸怖畏，衰惱，憂患，無明闇蔽，永盡無餘，而悉成就無量知見，力無所畏，有大神力，及智慧力，具足方便智慧波羅蜜，大慈大悲，常無懈倦，恆求善事，利益一切。而生三界朽故火宅。爲度衆生老病死，憂悲苦惱，愚癡闇蔽，三毒之火，教化令得阿耨多羅三藐三菩提」(大正九·一三上)。
- 52) 鳩摩羅什譯『大智度論』卷三〇「菩薩愍念衆生，過於父母念子」(大正二五·二七九中)。
- 53) 支謙譯『開解梵志阿闍經』「父母養子，恩極一世。佛開天下，使人得道，自見本末五道生死，知人壽命。意志已正，所爲自恣，欲上天即上，入海即入」(大正一·二六二上)。鳩摩羅什譯『大智度論』卷六二「著法愛故自破，亦令他破般若波羅蜜，如父母愛子，恩極一世」(大正二五·五〇二中)。[唐]道宣『釋門歸敬儀』卷下「行者以清淨深心於一切時，念佛大恩，令出生死，如念父母此但生身一世之養，佛恩深重，爲諸衆生，入三有獄，殷勤教誡，令修正行得出生死無數劫。故我今日常念佛恩。況念佛故，生善種子，功德果報不可窮盡」(大正四五·八六六下)。妙叶『寶王三昧念佛直指』「十方世界一切衆生，皆我彌陀願力所持，猶彼慈母愛惜嬰兒，懷抱乳哺，不令失念。父母愛兒，但止一世，報盡則休。佛念衆生，世世不捨」(大正四七·三七二下)。
- 54) 佛陀跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷一四「我當爲一切衆生，受無量苦，令諸衆生悉得免出生死沃焦。我當爲一切衆生，於一切利，一切地獄中，受一切苦，終不捨離。我當於一一惡道盡未來劫，代諸衆生，受無量苦。何以故。我寧獨受諸苦，不令衆生受諸楚毒。當以我身免贖一切惡道衆生，令得解脫」(大正九·四八九下)。
- 55) [參考]『大智度論』卷三〇「菩薩愍念衆生，過於父母念子。慈悲之心」(大正二五·二七九中)。
- 56) 南本『大般涅槃經』卷二五「一切衆生悉有一乘，以無明覆故，不能得見」(大正一二·七六九上)，「一切衆生悉有佛性，煩惱覆故，不能得見」(七六九中)。
- 57) [比較] 偽經『大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經』卷下「復次，善男子，若人不信，輕些不敬，則爲謗此十二部經，及謗金剛色身，及謗大士文殊師利，及以謗此十方諸佛。是人定墮地獄，而無虛也。何以故。而不信故，謗正法故，謗上人故，謗一切十方三世佛故，定墮地獄」(大正八五·一三五五上)。

生人聞⁵⁸⁾，諸根不具，以自莊嚴，無禪定水，無智慧刀⁵⁹⁾。如是等障，由無信心。
 今日道場向業大眾，不信之罪，衆罪之上，能令行人長不見佛。相與今日各自慷慨，折意挫情，生增上心，起慚愧意。稽顙求哀，懺悔往罪。
業纍既盡，表裏俱淨，然後運想，入歸信門。若不起如是心，運如如意，直恐隔絕，障滯難通。一失斯向，冥然無返。豈得不人人五體投地，如大山崩，一心歸信，無復疑想。
 ……中略……

夫人天幻惑，世界虛假。由其幻惑非真，故無實果。虛假浮脆故，遷變無窮，無實果故。所以久滯生死之流，遷變改故。所以長泛愛苦之海，如是衆生聖所悲念。故『悲華經』⁶⁰⁾云，「菩薩成佛，各有本願。釋迦不現長年，促爲短壽」⁶¹⁾。悲此衆生變化俄頃，長淪苦海，不得捨離。故在此土，救諸弊惡。教有剛強，苦切之言⁶²⁾，不捨於苦，而度衆生。未嘗不以善法方便弘濟益之心。

所以『三昧經』⁶³⁾言，「諸佛心者，是大慈悲。慈悲所緣，緣苦衆生。若見衆生受苦惱時，如箭入心，如破眼目。見已悲泣，心無暫安。欲拔其苦，令得安樂」⁶⁴⁾。

又諸佛等智，其化是均。至於釋迦，偏稱勇猛，以能忍苦，度脫衆生。當知本師慈恩實重，能於苦惱衆生之中，說種種語，利益一切。

我等今日不蒙解脫，進不聞一音之旨，退不觀雙樹潛輝，良由業障，念與悲隔。

相與今日起悲戀心，以悲戀如來故，善心濃厚。既在苦中憶如來恩，嗚咽懊惱，慚顏哽慟，等一痛切，五體投地，志心⁶⁵⁾奉爲國王，帝主，土地人民，父母，師長，信施檀越，善惡知識，諸天，諸仙，聰明正直，天地虛空，護世四王，主善罰惡，守護，持呪，五方龍王，龍神八部，廣及十方無窮無盡一切衆生。

重復歸依十方盡虛空界一切諸佛（一拜）。
 歸依十方盡虛空界一切尊法（一拜）。
 歸依十方盡虛空界一切賢聖（一拜）。 …… (大正四五・九二三中～九二四中)

- 58) 傳康僧鑑譯『無量壽經』卷上「是故死墮惡趣，受此長苦。罪畢得出，生爲下賤，愚鄙斯極，示同人類」(大正一二・二七一下)。
- 59) 未詳出典。
- 60) 未同定。
- 61) [參考] 曇無讖譯『悲華經』卷八「是諸世尊各各處於清淨世界，壽命無量，純爲善心，調伏白淨，成善根者，作於佛事。是大光明佛處斯穢惡不淨世界五濁惡世，成阿耨多羅三藐三菩提。所有衆生多作逆罪，乃至成就諸不善根，壽命短促。能於是中增益長壽」(大正三・二一八上)。[參考] 曇無讖譯『金光明經』卷一「壽量品」[爾時王舍城中，有菩薩摩訶薩名曰信相，已曾供養過去無量億那由他百千諸佛，種諸善根。是信相菩薩作是思惟，『何因何緣，釋迦如來壽命短促，方八十年』」(大正一六・三三五下)。
- 62) 鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』卷下香積佛品第十「如是剛強難化衆生故。以一切苦切之言，乃可入律」(大正一四・五五三上)。
- 63) 『三昧經』は『觀佛三昧經』を指す。次注及び後注94を見よ。
- 64) 佛陀跋陀羅譯『觀佛三昧經』卷六「觀四無量心品」[諸佛心者，是大慈也。大慈所緣，緣苦衆生」(大正一五・六七四中)。『觀佛三昧經』卷六「觀四無量心品」[如是慈心名習慈者，既習慈已，次當行悲。悲者見衆受苦，如箭入心，如破眼目。心極悲苦，遍體兩血，欲拔彼苦。如此悲者，有百億門，廣說如大悲三昧」(大正一五・六七四下)。『觀佛三昧經』は『觀佛三昧海經』と稱することもあるが，齊梁頃の南朝では「海」を付けずに『觀佛三昧經』と呼ぶことが多かった。後注94を見よ。
- 65) 「志心」は原文のまま。あるいは「至心」の誤りと解すべきか。「統略淨住子淨行法門」對應箇所は「至心」。

<p>(4)「統略淨住子淨行法門」開物歸信門第二： 當須慷慨懷厲，挫情折意，生增上心。懺悔滅罪。去諸塵累，乃可歸信。自不堅強其志，亡身捨命，捍勞忍苦，銜悲惻愴者，將恐煩惱熾火，無由而滅，無明重闇，開了末期。……今欲歸信亦復如斯。將見如來相好光明者，先當淨身口意，洗除心垢。六塵愛染，永滅不起。十惡重障，淨盡無餘。業纍既除，表裏俱淨，方可運明想於迦維，標清心於寶利，去諸塵勞，入歸信門。必然仰觀法身無礙，如囚脫枷鎖，自然見於王。我今除煩惱，亦必觀諸佛。若不如是，雖復殷勤倍切，直恐障礙難通。豈可不五體投地，如太山崩，一心歸信，無復疑想。 (大正五二・三〇七上～中。徐立強 1998a: 205)</p>	<p>(2) 梁武帝「斷酒肉文」： 今日集會此是大事因緣，非直一切諸佛在此，非直一切尊法在此，非直一切聖僧在此。諸天亦應遍滿虛空，諸仙亦應遍滿虛空，護世四王亦應在此，金剛密迹大辯天神，功德天神，韋馱天神，毘紐天神，摩醯首羅，散脂大將，地神堅牢，迦毘羅王，孔雀王，封頭王，富尼跋陀羅伽王，阿修羅伽王，摩尼跋陀羅伽王，金毘羅王，十方二十八部夜叉神王，一切持咒神王，六方大護都使安國，如是一切有大神足力，有大威德力，以如是一切善神遍滿虛空，五方龍王，娑竭龍王，阿耨龍王，難陀龍王，跋難陀龍王，伊那滿龍王，如是一切菩薩，龍王，亦應遍滿在此。 (大正五二・二九七下～二九八上。徐立強 1998a: 200-201)</p>	<p>(3) 梁武帝「東都發願文」： 如諸佛，菩薩所知見弟子蕭衍罪惡數量多少，今日於十方盡虛空界一切諸天前，於十方盡虛空界一切諸仙前，於十方盡虛空界一切聰明正直善神前，又於十方不可說不可說無邊幽顯，廣大衆中，至誠發露。 (黃徵・吳偉 1995: 283)</p> <p>(3)「同」： 仰願十方盡虛空界一切諸佛，仰願十方盡虛空界一切尊法，仰願十方盡虛空界一切聖僧證明，弟子蕭衍今日至誠發露，慚愧懺悔，願衆罪惡皆得消滅。 (黃徵・吳偉 1995: 284)</p> <p>(3)「同」： 仰願十方盡虛空界一切諸佛，仰願十方盡虛空界一切聖僧證明，弟子蕭衍今日大莊嚴，敬大誓願，至于道場，終不自爲，但爲救拔一切衆生，合(令)得盡苦，今日成佛。 (黃徵・吳偉 1995: 288)</p>	<p>(8) 梁簡文帝「四月八日度人出家願文」： 弟子蕭綱，以今日建齋設會功德因緣，歸依十方盡虛空界一切諸佛，歸依十方盡虛空界一切尊法，歸依十方盡虛空界一切聖僧。竊聞『涅槃經』言，……受持法藏爲佛眞子。一切道行，皆悉能行。一切大誓，不休不息。 仰願十方盡虛空界一切諸佛，仰願十方盡虛空界一切尊法，仰願十方盡虛空界一切聖僧，咸加證明。又仰願十方盡虛空界一切諸天，仰願十方盡虛空界一切諸仙，仰願十方盡虛空界一切聰明正直⁽⁶⁶⁾，守護一切善神，又願今日現前幽顯大衆，咸加證明。 今日誓願使弟子蕭綱得如所願，滿菩提願。一切衆生，皆悉隨從，得如所願。願皆禮一拜。 (大正五二・三二四 中～下)</p>
<p>(4)「統略淨住子淨行法門」三界內苦門第十四： 夫三界牢獄，四圍輪轉。在家出家，未斷我倒，無得免者。既爲生死所纏，身心勞瘁，遷變無窮，無非是苦。 (大正五二・三一二下)</p>			
<p>(4)「統略淨住子淨行法門」開物歸信門第二： 如來愍念衆生，愛同一子。何常不以善權方便弘濟益之津乎。 (大正五二・三〇六下)</p>			
<p>(4)「統略淨住子淨行法門」禮舍利寶塔門第二十五： 大聖詮化，隨機感益，譬若一音說法，各得其解。是故應以現生蒙利者，所以降神母胎，誕聖王宮。應以出家蒙利者，所以捨金輪位，剷除鬚髮。應以相好蒙利者，所以現成正覺，坐菩提樹。應以實相蒙利者，所以三轉法輪十二部經。應以減度蒙利者，所以雙樹潛輝，現於涅槃。良由衆生障業煩多。是故聖化隨應不一。然則現於涅槃者，復是增發悲戀之心，以悲慕故，善心濃到。……以苦報故，憶如來恩。是以今各歸心，於此像塔，嗚咽涕零，慙顏哽慟。至心奉爲至尊，皇</p>			

66) [比較] 孫綽「喻道論」[且君明臣公，世清理治，猶能令善惡得所，曲直不濫。況神明所莅無遠近幽深，聰明正直，罰惡祐善者哉] (『弘明集』卷三。大正五二・一六中～下)。

<p>后，皇太子，七廟聖靈，今日信施龍神八部，廣及一切劇苦衆生，敬禮十方三世一切諸刹土中所有如來形像靈廟。(大正五二・三一八中。船山 2006: 300-301)</p>			
---	--	--	--

以上の原文から新たに知られる対応は、(1)『慈悲道場懺法』と(3)梁武帝「東都發願文」および(8)梁簡文帝「四月八日度人出家願文」との文言一致である。「歸依十方盡虛空界一切諸佛(ノ一切尊法ノ一切聖僧)」または「歸依十方盡虛空界一切三寶」という表記はすこぶる独特である。(3)から武帝の用法を確認できることに最大の価値があるが、同じ表現が簡文帝にも繼承されたことが(8)から分かる。梁の蕭綱の場合は「請爲諸寺檀越疏」にも認められる⁶⁷⁾。こうした状況からこの語彙も梁代の言語的特徴の一つと見なしてよからう。

【2.9 原文 I】次に掲げるのは(1)『慈悲道場懺法』卷四の一節である。引用第五段落から『觀佛三昧經』⁶⁸⁾と逐語的に一致する文言が始まるが、それに先行する最初の三段落に、(4)「統略淨住子淨行法門」沈冥地獄門第十一と一致する語句が現れる。そして『觀佛三昧經』に基づく長文中には(2)梁武帝「斷酒肉文」および(6)『釋門自鏡錄』卷下と共通する語彙が一部見られる。そして『觀佛三昧經』文の後、(4)「統略淨住子淨行法門」沈冥地獄門第十一及び(4)「統略淨住子淨行法門」禮舍利寶塔門第二十五から文言が用いられ、更に(7)梁簡文帝「唱導文」に見える特徴的な表現との一致が見られる。

(1)『慈悲道場懺法』卷四「出地獄第二」:

今日道場同業大衆，雖復萬法差品，功用不一。至於明闇相形，唯善與惡。語善則人天勝果，述惡則三途劇報。二事列世，皎然非虛。而愚惑之者，多起疑異，或言「人天是妄造，地獄非真說」，不知推因驗果，不知驗果尋因。既因果不分，各執世解，非但言空。談有乃亦題篇造論。心乖勝善，未曾云謬。設使示譴，執固益堅。如是等人自投惡道，如射箭頃墮在地獄。慈親孝子不能相救。唯得前行，入於火鑊。身心摧碎，精神痛苦⁶⁹⁾。當此之時，悔復何及。

67) 梁蕭綱「請爲諸寺檀越疏」にも「菩薩戒弟子蕭綱，歸依十方盡虛空界一切諸佛，歸依十方盡虛空界一切尊法，歸依十方盡虛空界一切聖僧」(大正五二・三二五中)と言う。大正新脩大藏經は本疏の著者を「梁簡文」とするが、問題なしとしない。冒頭に「菩薩戒弟子蕭綱」と自稱するのは自らが既に菩薩戒を正式に受戒したことを示す表現であるが、皇帝の場合は「菩薩戒弟子皇帝(名前)」と表記するのが常であり、本疏が皇帝と記していないのは即位前だったかを思わせる。

68) 『觀佛三昧經』という經名については後注 94 を見よ。

69) (傳)康僧鎧譯『無量壽經』卷下「今世爲惡，福德盡滅，諸善神鬼各去離之。身獨空立，無所復依。壽命終盡，諸惡所歸，自然迫促，共趣奪之。又其名籍，記在神明。殃咎牽引，當往趣向。罪報自然，無從捨離。但得前行，入於火鑊。身心摧碎，精神痛苦。當斯之時，悔復何及」(大正一二・二七六下)。「其人若不値善友獎道則靡惡不造致使大。」

今日道場同業大衆，善惡相資，猶如影響。罪福異處，宿預嚴持⁷⁰⁾。幸各明信，無措疑心。何謂地獄。『經』言，「三千大千世界鐵圍兩山黑闇之間，謂之地獄。鐵城縱廣一千六百萬里。城中八萬四千高下以鐵爲地。上以鐵爲網。火燒此城，表裏洞赤。上火徹下，下火徹上。其名則有衆合黑闇，刀輪劍林，鐵機刺林，鐵網鐵窟，鐵丸尖石，炭坑燒林，虎狼叫喚，鑊湯爐炭，刀山劍樹，火磨火城，銅柱鐵床，火車火輪，飲銅吐火，大熱大寒，拔舌釘身，犁耕斧斫，刀兵屠裂，灰河沸屎，寒冰淤泥，愚癡啼哭，聾盲瘡癩，鐵鉤鐵嘴。

復有大小泥犁阿鼻地獄。佛告阿難，「云何名阿鼻地獄。阿者言無，鼻者言遮。阿者言無，鼻者言救。合言無遮無救。又阿者言無聞，鼻者言無動。阿言極熱，鼻言極惱。阿言不閑，鼻言不住，不閑不住名阿鼻地獄。又阿言大焰，鼻言猛熱，猛火入心，名阿鼻地獄⁷¹⁾。

⁷²⁾佛告阿難，阿鼻地獄，縱廣正等三十二萬里。七重鐵城，七層鐵網。下十八高，周匝七重，皆有刀林。七重城內，復有劍林。下十八高，高八萬四千重。於其四角有四大銅狗。其身長大萬六千里。眼如掣電，牙如劍樹，齒如刀山，舌如鐵刺。一切身毛皆出猛火。其煙臭惡。世間臭物無以爲譬。又有十八獄卒。頭如羅刹頭。口如夜叉口。六十四眼，眼散迸鐵丸，如十里車。鈎牙上出，高百六十里。牙頭火流，燒前鐵車，令鐵車輪一一輪轉化爲一億火。刀鋒刃劍戟，皆從火炎中出。如是流火，燒阿鼻城，令阿鼻城亦如融銅。獄卒頭上有八牛頭，一一牛頭有十八角。一角頭，皆出火聚。火聚復化成十八火網，火網復變，作大刀輪，如車輪許。輪輪相次，在火炎間，滿阿鼻獄。銅狗張口，吐舌在地，舌如鐵刺。舌出之時，化無量舌，滿阿鼻城。七重城內，有七鐵幢。幢頭火涌，如沸涌泉。其鐵流迸，滿阿鼻城。阿鼻四門，於門闔上有十八釜。沸銅涌出，從門漫流，滿阿鼻城。一一高間有八萬四千鐵蟒大蛇，吐毒吐火，身滿城內。其蛇哮吼，如天震雷。兩大鐵丸，滿阿鼻城。城中苦事八萬億千。苦中苦者，集在此城。又有五百億蟲，蟲八萬四千嘴。嘴頭火流，如雨而下，滿阿鼻城。此蟲下時，阿鼻猛火。其炎大熾，赤光火炎，照三百三十六萬里。從阿鼻地獄上衝大海，沃焦山下。大海水滂，如車軸許，成大鐵尖，滿阿鼻城。

佛告阿難，若有衆生殺父害母，罵辱六親，作是罪者，命終之時，銅狗張口，化十八車，狀如金車，寶蓋在上。一切火炎，化爲玉女。罪人遙見，心生歡喜，「我欲往中。我欲往中。風刀解身，寒急失聲，寧得好火。在車上坐，然火自爆」。作是念已，即便命終，揮霍之間，已坐金車，顧瞻玉女，皆捉鐵斧，斬截其身。身下火起，如旋火輪，譬如壯士屈伸臂頃，直墮阿鼻大地獄中。從於上高如旋火輪，至下高際，身遍高內。銅狗大吼，齧骨嚼髓。獄卒羅刹捉大鐵叉，叉頭令起，遍體火炎，滿阿鼻城。鐵網兩刀，從毛孔入。化閻羅王，大聲告救，「癡人獄種。汝在世時，不孝父母，邪慢無道。汝今生處名阿鼻地獄。汝不知恩，無有慚愧。受此苦惱爲樂不耶」。作是語已，即滅不現。

爾時，獄卒復驅罪人，從於下高，乃至上高，經歷八萬四千高中。擘身而過，至鐵網際。一日一夜，爾乃周遍。阿鼻地獄一日一夜，此閻浮提日月歲數六十小劫。如是壽命，盡一大劫。五逆罪人，

命將盡，臨窮之際，地獄惡相皆現在前。當爾之時，悔懼交至，不預修善，臨窮方悔，後將何及乎。殃禍異處，宿預嚴持。當獨趣入遠到地獄。所住得前行入於火。身心損碎，精神痛苦」(大正一四・三〇六上)。

70) 直前注を見よ。

71) 佛陀跋陀羅譯『觀佛三昧海經』卷五「佛告阿難，云何名阿鼻地獄。阿言無，鼻言遮。阿言無，鼻言救。阿言無聞，鼻言無動。阿言極熱，鼻言極惱。阿言不閑，鼻言不住，不閑不住名阿鼻地獄。阿言大火，鼻言猛熱。猛火入心，名阿鼻地獄」(大正一五・六六八中～下。次注へ續く)。[參考] 偽經『大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經』卷下「佛告文殊，快哉快哉，快問是義。諦聽諦聽。及諸大衆，善思念之。吾當爲汝廣開分別。云何名爲阿鼻地獄。阿者言無。鼻者言聞。聞無暫樂故言無聞。阿者言無。鼻者言遮。阿者言無。鼻者言救。阿者言無。鼻者言不動。阿者言極熱。鼻者言極惱。阿者言不閑。鼻者言不住。不住不閑故名阿鼻地獄。阿者言大火。鼻者言極熱。猛火入心，故名阿鼻地獄」(大正八五・一三五三中)。

72) 次注『觀佛三昧經』卷五。

無慚無愧，造作五逆。五逆罪故，臨命終時，十八風刀，如鐵火車，解截其身。以熱逼故，便作是言，「得好色華，清涼大樹。於下遊戲不亦樂乎」。作此念時，阿鼻地獄八萬四千諸惡劍林，化作寶樹。華果茂盛，行列在前。大熱火炎，化為蓮華，在彼樹下。罪人見已，「我所願者，今已得果」。作是語時，疾於暴雨，坐蓮華上。坐已，須臾鐵嘴諸蟲從火華起，穿骨入髓，徹心穿腦，攀樹而上。一切劍枝，削肉徹骨。無量刀林，當上而下。火車，爐炭十八苦事，一時來迎。此相現前，陷墜地下。從下高上，身如華敷，遍滿下高，從下高起，火炎猛熾，至於上高。至上高已，身滿其中。熱惱急故，張眼吐舌。此人罪故，萬億鎔銅，百千刀輪，從空中下，頭入足出。一切苦事過於上說，百千萬倍。具五逆者，其人受罪，足滿五劫。

復有衆生破佛禁戒，虛食信施。誹謗邪見，不識因果，斷學般若，毀十方佛。偷佛法物，起諸穢污，不清淨行，不知慚愧。毀辱所親，造衆惡事。此人罪報，臨命終時，風刀解身。偃臥不定，如被楚撻。其心荒越，發狂癡想。見已室宅男女，大小，一切皆是不淨之物，屎尿臭處，盈流于外。爾時，罪人即作是語，「云何此處無好城郭及好山林，使吾遊戲。乃處如此不淨物間」。作是語已，獄卒羅刹，以大鐵叉，擊阿鼻獄，及諸刀林，化作寶樹及清涼池。火炎化作金葉蓮華。諸鐵嘴蟲化為鳧雁。地獄痛聲，如詠歌音。罪人聞已，「如此好處，吾當遊中」。念已，尋時坐火蓮華。諸鐵嘴蟲，從身毛孔，嚼食其軀。百千鐵輪，從頂上入。恆沙鐵叉，挑其眼睛。地獄銅狗，化作百億鐵狗。競分其身，取心而食。俄爾之間，身如鐵華，滿十八高，一一華葉八萬四千，一一葉頭身手支節，在一高間。地獄不大，此身不小。遍滿如此大地獄中，此等罪人墮此地獄，經歷八萬四千大劫，此泥犁滅。

復入東方十八高中，如前受苦。此阿鼻獄南亦十八高，西亦十八高，北亦十八高。謗『方等經』，具五逆罪，破壞賢聖，斷諸善根。如此罪人具衆罪者，身滿阿鼻獄，四支復滿十八高。此阿鼻獄，但燒如此獄種衆生。劫欲盡時，東門即開。見東門外，清泉流水，華果林樹，一切俱現。是諸罪人從下高見，眼火暫歇，從下高起，宛轉腹行，肆身上走，到上高中，手攀刀輪。時虛空中，雨熱鐵丸走趣東門，既至門闔，獄卒羅刹手捉鐵叉，逆刺其眼，銅狗齧心，悶絕而死。死已復生，見南門開如前不異，如是西門，北門，亦皆如此。如此時間經歷半劫，阿鼻獄死，復生寒冰獄中，寒冰獄死，生黑闇處。八千萬歲，目無所見。受大蟲身，宛轉腹行。諸情闇塞，無所解知。百千狐狼牽掣食之。命終之後，畜生中，五千萬身受鳥獸形，如是罪畢，還生人中。聾盲瘡癩，疥癬癰疽。貧窮下賤，一切諸衰以自莊嚴。受此賤形，經五百身，後復還生餓鬼道中。餓鬼道中，遇善知識，諸大菩薩，呵責其言，「汝於前身無量世時作無限罪，誹謗不信，墮阿鼻獄，受苦苦惱，不可具說。汝今應當發慈悲心」。時諸餓鬼聞是語已，稱「南無佛。稱佛恩力」，尋即命終，生四天處。生彼天已，悔過自責，發菩提心。諸佛心光不捨是等，攝受是輩，慈哀是等，如羅睺羅。教避地獄，如愛眼目。——佛告大王，欲知佛心光明所照，常照如此無間無救諸苦衆生。佛心所緣，常緣此等極惡衆生。以佛心力自莊嚴故，過算數劫，令彼惡人發菩提心」⁷³⁾。

73) 『觀佛三昧海經』卷五「佛告阿難，阿鼻地獄，縱廣正等八千由旬。七重鐵城，七層鐵網。下十八高，周匝七重，皆是刀林。七重城內，復有劍林。下十八高，高八萬四千重。於其四角有四大銅狗。其身廣長四十由旬。眼如掣電，牙如劍樹，齒如刀山，舌如鐵刺。一切身毛皆出猛火。其烟臭惡。世間臭物無以可譬。有十八獄卒。頭羅刹頭。口夜叉口。六十四眼，眼散迸鐵丸，如十里車。狗牙上出，高四由旬。牙頭火流，燒前鐵車，令鐵車輪一一輪化為一億火。刀鋒刃劍戟，皆從火出。如是流火，燒阿鼻城，令阿鼻城赤如融銅。獄卒頭上有八牛頭，一一牛頭有十八角。一一角頭，皆出火聚。火聚復化成十八輞，火輞復變，作火刀輪，如車輪許。輪輪相次，在火焰間，滿阿鼻城。銅狗張口，吐舌在地，舌如鐵刺。舌出之時，化無量舌，滿阿鼻地。七重城內，有七鐵幢。幢頭火踊，如沸踊泉。其鐵流迸，滿阿鼻城。阿鼻四門，於門闔上有八十釜。沸銅踊出，從門漫流，滿阿鼻城。一一高間有八萬四千鐵蟒大蛇，吐毒吐火，身滿城內。其蛇哮吼，如天震雷。雨大鐵丸，滿阿鼻城。此城苦事八萬億千。苦中苦者，集在此城。五百億蟲，蟲八萬四千嘴。嘴頭火流，如雨而下，滿阿鼻城。此蟲下時，阿鼻猛火。其焰大熾，赤光火焰，照八萬四千由旬。從阿鼻地獄上衝大海，沃焦山下。大海水滴，如車軸許，成大鐵尖，滿阿鼻城。

今日道場同業大眾，聞佛世尊，說上諸苦。宜加攝心，莫生放逸。相與若復不勤方便行菩薩道，則於一一地獄皆有罪分。今日同爲現受阿鼻地獄等苦一切衆生。當受阿鼻地獄等苦一切衆生。廣及十方一切地獄現受當受無窮無盡一切衆生，等一痛切，五體投地，歸依世間大慈悲父。

佛告阿難，若有衆生殺父害母，罵辱六親，作是罪者，命終之時，銅狗張口，化十八車，狀如金車，寶蓋在上。一切火焰，化爲玉女。罪人遙見，心生歡喜，『我欲往中。我欲往中。風刀解時，寒急失聲，寧得好火，在車上坐，然火自爆』。作是念已，即便命終，揮霍之間，已坐金車，顧瞻玉女，皆捉鐵斧，斬截其身。身下火起，如旋火輪，譬如壯士屈伸臂頃，直落阿鼻大地獄中。從於上高如旋火輪，至下高際，身遍兩內。銅狗大吼，嚙骨咬髓。獄卒羅刹捉大鐵叉，叉頭令起，遍體火焰，滿阿鼻城。鐵網兩刀，從毛孔入，化閻羅王，大聲告敕，『癡人獄種。汝在世時，不孝父母，邪慢無道。汝今生處名阿鼻地獄。汝不知恩，無有慚愧。受此苦惱爲樂不耶』。作是語已，即滅不現。

爾時，獄卒復驅罪人，從於下高，乃至上高，經歷八萬四千高中。捋身而過，至鐵網際。一日一夜，爾乃周遍。阿鼻地獄一日一夜，此閻浮提日月歲數六十小劫。如是壽命，盡一大劫。五逆罪人，無慚無愧，造作五逆。五逆罪故，臨命終時，十八風刀，如鐵火車，解截其身。以熱逼故，便是言。『得好色華，清涼大樹。於下遊戲不亦樂乎』。作此念時，阿鼻地獄八萬四千諸惡劍林，化作寶樹。華果茂盛，行列在前。大熱火焰，化爲蓮華，在彼樹下。罪人見已，『我所願者，今已得果』。作是語時，疾於暴雨，坐蓮華上。坐已，須臾鐵嘴諸蟲從火華起，穿骨入髓，徹心穿腦，攀樹而上。一切劍枝，削肉徹骨。無量刀杖，當上而下。火車，爐炭十八苦事，一時來迎。此相現時，陷墜地下，從下高上，身如華敷，遍滿下高，從下高起，火焰猛熾，至於上高，至上高已，身滿其中。熱惱急故，張眼吐舌。此人罪故，萬億融銅，百千刀輪，從空中下，頭入足出。一切苦事過於上說，百千萬倍。具五逆者，其人受罪，足滿五劫。

復有衆生犯四重禁，虛食信施。誹謗邪見，不識因果，斷學般若，毀十方佛。偷僧祇物，姪泆無道。逼略淨戒諸比丘尼，姊妹，親戚，不知慚愧。毀辱所親，造衆惡事。此人罪報，臨命終時，風刀解身。偃臥不定，如被楚撻。其心荒越，發狂癡想。見己室宅男女，大小，一切皆是不淨之物，屎尿臭處，盈流于外。爾時，罪人即作是語，『云何此處無好城郭及好山林，使吾遊戲。乃處如此不淨物間』。作是語已，獄卒羅刹，以大鐵叉，擊阿鼻獄及諸刀林，化作寶樹及清涼池。火焰化作金葉蓮華。諸鐵嘴蟲化爲鳧鴈。地獄痛聲，如詠歌音。罪人聞已，『如此好處，吾當遊中』。念已，尋時坐火蓮華。諸鐵嘴蟲，從身毛孔，咬食其軀。百千鐵輪，從頂上入。恆沙鐵叉，挑其眼睛。地獄銅狗，化作百億鐵狗。競分其身，取心而食。俄爾之間，身如截華，滿十八高，一一華葉八萬四千，一一葉頭身手支節。在一高間。地獄不大，此身不小，遍滿如此大地獄中。此等罪人墮此地獄，經歷八萬四千大劫，此泥犁滅。

復入東方十八高中，如前受苦。此阿鼻獄南亦十八高，西亦十八高，北亦十八高。謗『方等經』，具五逆罪，破壞僧祇，污比丘尼，斷諸善根。如此罪人具衆罪者，身滿阿鼻獄，四支復滿十八高中。此阿鼻獄。但燒如此獄種衆生。劫欲盡時，東門即開。見東門外，清泉流水，華果林樹，一切俱現。是諸罪人從下高見，眼火暫歇，從下高起，婉轉腹行，捋身上走，到上高中，手攀刀輪。時虛空中，雨熱鐵丸走趣東門，既至門闕，獄卒羅刹手捉鐵叉，逆刺其眼，鐵狗嚙心，悶絕而死。死已復生，見南門開如前不異，如是西門，北門，亦皆如是。如此時間經歷半劫，阿鼻獄死，生寒冰中，寒冰獄死，生黑闇處。八千萬歲，目無所見。受大蟲身，婉轉腹行。諸情閉塞，無所解知。百千狐狼牽掣食之。命終之後，生畜生中，五千萬身受鳥獸形，還生人中，聾盲啞啞，疥癩癰疽。貧窮下賤。一切諸衰以爲嚴飾。受此賤形，逕五百身。後復還生餓鬼道中。餓鬼道中，遇善知識，諸大菩薩，呵責其言，『汝於前身無量世時，作無根罪，誹謗不信，墮阿鼻獄，受諸苦惱，不可具說。汝今應當發慈悲心』。時諸餓鬼聞是語已，稱『南無佛。稱佛恩力』，尋即命終，生四天處。生彼天已，悔過自責，發菩提心。諸佛心光不捨是等，攝受是輩，慈哀是等，如羅睺羅。教避地獄，如愛眼目。——佛告大王，欲知佛心光明所照，常照如此無間無救諸苦衆生。佛心所緣，常緣此等極惡衆生。以佛心力自莊嚴故，過算數劫，令彼罪人發菩提心』（大正一五・六六八下～六六九下）。

南無彌勒佛。南無七佛。南無十方十佛。

⁷⁴⁾南無三十五佛。南無五十三佛。南無百七十佛⁷⁵⁾。

74) 「五十三佛」「三十五尊」(＝三十五佛)「當來賢劫千(佛)」「現在百七十(佛)」に同時に言及する漢語文獻に本表の下段に掲げる(7)梁簡文帝「唱導文」がある。

75) [西晉]焮煌三藏譯『決定毘尼經』「若有菩薩成就五無間罪，犯於女人，或犯男子，或故犯，犯塔，犯僧，如是等餘犯，菩薩應當三十五佛邊，所犯重罪，晝夜獨處，至心懺悔」(大正一二・三八下)。和譯「菩薩が五無間罪(即刻地獄に墮ちる五大罪)をしてしまったら，女性に對して犯したにせよ，男性に對して犯したにせよ，故意に犯したにせよ，ストウパについて犯したにせよ，僧團について犯したにせよ，これらの様々な犯罪を犯したならば，その菩薩は三十五佛のいますところで犯した重罪を日夜一人で心を盡くして懺悔すべし」。

[南朝宋]曇摩蜜多譯『觀虛空藏菩薩經』「於『深功德經』說治罪法，名『決定毘尼』，有三十五佛救世大悲。汝當敬禮。汝敬禮時，當著慚愧衣。如眼生瘡，深生愧恥。如癩病人，隨良醫教。汝亦如是應生慚愧。既慚愧已，一日乃至七日，禮十方佛，稱三十五佛名。別稱大悲虛空藏菩薩名」(大正一三・六七七中)。和譯「『深功德經』に罪業を治す方法が説かれており，決定毘尼と名付ける。世間を救済する偉大な思い遣り〔を抱いている〕三十五佛がいる。汝はそれに敬しんで禮すべし。汝が敬しんで禮する時には慚愧にたえぬ程のみすぼらしい服を着て，ちょうど腫れ物ができた眼を持つ人のように深く恥辱を示し，癩病人のように良き醫者の處方に隨うべし。汝も同様にして慚愧すべし。慚愧してから，一日ないし七日のあいだ十方諸佛を禮拜し，三十五佛の名號を稱えよ。その名は多いなる思い遣りをもった虛空藏菩薩の名とも言う」。

[南朝宋]置良耶舍譯『觀藥王藥上二菩薩經』「我曾往昔無數劫時，於妙光佛末法之中，出家學道，聞是五十三佛名。聞已合掌，心生歡喜。……以是敬禮諸佛因緣功德力故，即得超越無數劫生死之罪。其千人者，花光佛爲首，下至毘舍浮佛，於莊嚴劫得成爲佛，過去千佛是也。此中千佛者，拘留孫佛爲首，下至樓至如來，於賢劫中次第成佛。後千佛者，日光如來爲首，下至須彌相，於星宿劫中當得成佛」(大正二〇・六六四上)。和譯「私は無數カルパの大昔に，妙光佛の末法時代に出家し教を學び，五十三佛の名號を聞いた。聞いてから合掌し，心に喜びが生まれた。……それ故，諸佛を敬しんで禮拜する緣と功德の力によって，無數億カルパ〔に犯した〕輪廻中の罪業を越えることができた。そのうち〔最初の〕千佛は花光佛を第一とし，毘舍浮佛を末とする〔諸佛〕であり，それは莊嚴劫(カルパ，過去の劫)において成佛した過去の千佛である。中間の千佛は拘留孫佛を第一とし，樓至如來を末とする〔諸佛〕であり，それは現劫に次々と成佛する〔現在の千佛〕である。最後の千佛は，日光如來を第一とし，須彌相〔如來〕を末とする〔諸佛であり〕星宿劫(未來のカルパ)に成佛するであろう〔未來の千佛〕である」。

『慈悲道場懺法』卷七「(某甲)等今日，又承七佛大慈心力，十方諸佛大悲心力，三十五佛滅煩惱力，五十三佛降伏魔力，百七十佛度衆生力，千佛攝受諸衆生力，十二菩薩覆護衆生力，無邊觀世流通懺力，願令十方三界六道窮未來際一切衆生，若大若小，若升若降，名色所攝有佛性者，從今懺悔之後，在所生處，各得諸佛，諸大菩薩廣大智慧，不可思議無量自在神力之身，六度身，正向菩提」(大正九五二下)。和譯「われわれ某たちは今日，〔過去〕七佛の大いなる慈しむ心の力能と，十方諸佛の大いなる思い遣りの心の力能と，三十五佛の煩惱を止滅する力能と，五十三佛の惡魔を降伏する力能と，百七十佛の衆生を濟度する力能と，千佛の諸衆生を受け止める力能と，十二菩薩の衆生を守護する力能と，無邊見菩薩と觀世音菩薩の廣く普及する懺悔の力能とを受け繼いで，願わくは〔空間については〕十方三界六道すべての，〔時間については〕未來の果てまでの，ありとあらゆる衆生が，老いも若きも，境地が高い菩薩も低い菩薩も，心と肉體に宿る佛性を有する者は，今懺悔をしてからはどこに轉生しても，諸佛・諸菩薩の廣大な智慧と不可思議で量り知れない自由な神通力と六波羅蜜を具えた體軀を獲得し，悟りに正しく向かわんことを」。

<p>南無莊嚴劫千佛。南無賢劫千佛。南無星宿劫千佛⁷⁶⁾。 南無十方菩薩摩訶薩。南無十二菩薩。南無無邊身菩薩。南無觀世音菩薩。 又復歸依十方盡虛空界無量形像，<u>優填王金像⁷⁷⁾</u>，<u>旃檀像⁷⁸⁾</u>，<u>阿育王銅像</u>，<u>吳中石像⁷⁹⁾</u>，<u>師子國王像⁸⁰⁾</u>，<u>諸國土中金像</u>，<u>銀像</u>，<u>瑠璃像</u>，<u>珊瑚像</u>，<u>琥珀像</u>，<u>磲磔像</u>，<u>碼碯像</u>，<u>眞珠像</u>，<u>摩尼寶像</u>，<u>紫磨上色閻浮檀金像</u>。 又復歸命十方如來一切髮塔，一切齒塔，一切牙塔，一切爪塔，一切頂上骨塔，一切身中諸舍利塔，袈裟塔，匙鉢塔，澡瓶塔，錫杖塔，如是等爲佛事者。 又復歸命諸佛生處塔，<u>得道塔</u>，<u>轉法輪塔</u>，<u>般涅槃塔</u>，<u>多寶佛塔</u>，<u>阿育王所造八萬四千塔</u>，<u>天上塔</u>，<u>人間塔</u>，<u>龍王宮中一切寶塔</u>。 又復歸依十方盡虛空界一切諸佛。<u>歸依十方盡虛空界一切尊法</u>。<u>歸依十方盡虛空界一切賢聖⁸¹⁾</u>。 ……中略……</p> <p>如是各有無量地獄以爲眷屬。獄有一主，<u>牛頭阿旁</u>，其性兇虐，無一慈忍。見諸衆生受此惡報，<u>唯憂不苦</u>，<u>唯恐不毒</u>。或問獄卒，「衆生受苦，甚可悲念，而汝常懷酷毒，無慈愍心」。獄卒答言，「如此罪惡諸受苦者，<u>不孝父母</u>，<u>誹佛謗法</u>，<u>謗諸賢聖</u>，<u>罵辱六親</u>，<u>輕慢師長</u>，<u>毀陷一切</u>，<u>惡口兩舌</u>，<u>詭曲嫉妬</u>，<u>離他骨肉</u>，<u>瞋恚殺害</u>，<u>貪欲欺詐</u>，<u>邪命邪求及以邪見</u>，<u>懈怠放逸</u>，<u>造諸怨結</u>。如是等人來此受苦。每至免脫之日，<u>恆加勸諭</u>，「此中劇苦，非可忍耐。汝今得出，勿復更造」。而此罪人初無改悔。今日得出，<u>俄頃復還</u>，<u>展轉輪迴</u>，不知痛苦。令我筋力，疲此衆生。從劫至劫，與其相對。以是事故。我於罪人無片慈心，<u>故加楚毒</u>，望其知苦，知慚知恥，不復更還。觀此衆生，乃可至苦，終不肯避，<u>決不修善</u>，<u>往趣泥洹</u>，既是無知之物，不知避苦求樂。所以痛劇倍於人間。何容於此而生慈忍。 (大正四五・九三九上～九四〇下。九四一中～下)</p>			
(4) 「統略淨住子淨行法門」沈冥地獄門第十一： 萬法雖差，功用不一。至於明昧相形，惟善惡二途而已。語善則人天	(2) 梁武帝「斷酒肉文」： 凡食肉者，如前說，此皆是遠事，未	(7) 梁簡文帝「唱導文」： 各宜攝心，奉爲貴嬪，歸命敬禮五十三	(6) 『釋門自鏡錄』卷下： 如前所說，此皆遠事，未爲近切，諸大

76) 直前注。

77) 佛陀跋陀羅譯『觀佛三昧經』卷六「時優填王戀慕世尊，鑄金爲像，聞佛當下。象載金像，來迎世尊。蓮華色比丘尼化作瑠璃山。結加趺坐，在山窟中。無量供具，奉迎世尊。爾時金像從象上下，猶如生佛。足步虛空，足下雨華，亦放光明，來迎世尊。時鑄金像合掌叉手，爲佛作禮。爾時世尊亦復長跪，合掌向像。時虛空中百千化佛亦皆合掌，長跪向像」(大正一五・六七八中)。

78) 僧伽提婆譯『增壹阿含經』卷二八「是時優填王，即以牛頭旃檀，作如來形像高五尺。……。時波斯匿王而生此念，『當用何寶作如來形像耶』。斯須復作是念，『如來形體，黃如天金，今當以金作如來形像』。是時波斯匿王，純以紫磨金，作如來像高五尺」(大正二・七〇六上)。

79) 慧皎『高僧傳』卷一三慧達傳「〔慧〕達以刹像靈異，倍加翹勳。後東遊吳縣，禮拜石像」(大正五〇・四〇九下)。

80) 『高僧傳』卷一三慧力傳「又有師子國四尺二寸玉像，竝皆在焉。昔師子國王聞晉孝武精於奉法，故遣沙門曇摩抑遠獻此佛。在道十餘年，至義熙中，乃達晉。司徒王謐嘗入臺，見東掖門口有寺人擲栲戲。栲所著處，輒有光出，怪令掘之，得一金像，合光趺長七尺二寸。〔王〕謐即啓聞，宋高祖迎入臺供養，宋景平末送出瓦官寺，今移龍光寺」(大正五〇・四一〇中)。

81) 【2.8 原文 H】(8)梁簡文帝「四月八日度人出家願文」〔弟子蕭綱，以今日建齋設會功德因緣，歸依十方盡虛空界一切諸佛，歸依十方盡虛空界一切尊法，歸依十方盡虛空界一切聖僧。竊聞『涅槃經』言，……。受持法藏爲佛眞子。一切道行，皆悉能行。一切大誓，不休不息。仰願十方盡虛空界一切諸佛，仰願十方盡虛空界一切尊法，仰願十方盡虛空界一切聖僧，咸加證明。……〕(大正五二・三二四中～下)。

<p>後阿育王造八萬四千塔。敬禮阿育王所造無量諸佛像。敬禮天上，人間，海中龍宮一切像塔。敬禮此國諸州諸瑞聖像。敬禮此國諸寺諸山無量靈像。敬禮天上，人間，海中無量形像。願一切衆生不在佛前佛後常見佛生，常見佛出家，常見佛得道，常見佛涅槃，能建立是無量像塔，盡於來際佛事不絕。 (大正五二・三一八中～下。徐立強1998a: 205)</p>			
---	--	--	--

以上を比較検討すると、『觀佛三昧經』は極めて長文であるにもかかわらず、ほぼ原文通りであることが分かる。經名は表示されていないが、ほぼ完全一致することから素材は『觀佛三昧經』と結論して問題ない。これはいわゆる「引用」でなく、地の文中に暗黙裏に用いた經文であるが、ここから確かめられる引用の確度は、程度の差こそあれ『慈悲道場懺法』における他の箇所にも適用可能な傾向と考えてよからう。

更に論ずべき點が二つある。第一は、(1)『慈悲道場懺法』引用第四段落の破線で示した地獄リストである。これは何に由來する表現か。諸地獄名が列記されており、句數は二十二句あるが、二十二地獄という言い方はない。一般には八地獄や十八地獄と呼ぶのが普通である。『慈悲道場懺法』は論書でないため、理論的な説明や分類を明示しないが、實際の語例から以下の諸リストが得られる。

(地獄リスト1：『慈悲道場懺法』卷四)

其名則有衆合、黑闇、刀輪、劍林、鐵機、刺林、鐵網、鐵窟、鐵丸、尖石、炭坑、燒林、虎狼、叫喚、鑊湯、爐炭、刀山、劍樹、火磨、火城、銅柱、鐵床、火車、火輪、飲銅、吐火、大熱、大寒、拔舌、釘身、犁耕斧斫、刀兵屠裂、灰河、沸屎、寒冰淤泥、愚癡啼哭、聾盲瘖瘂、鐵鉤鐵嘴。(大正四五・九三九上～中)

(地獄リスト2：卷四)

『地獄經』云、住地獄間、宮城縱廣三萬里、銅鐵所成。晝夜三時、有大銅鑊。滿中烱銅、自然在前。有大獄卒臥王熱鐵床上。鐵鉤擊口、烱銅灌之。從咽徹下、無不焦爛。彼諸大臣亦復如是。十八獄王、一曰迦延、典泥犁獄。二號屈尊、典刀山獄。三名沸壽、典沸沙獄。四名沸曲、典沸屎獄。五名迦世、典黑耳獄。六名嶺嵯、典火車獄。七名湯謂、典鑊湯獄。八名鐵迦然、典鐵床獄。九名惡生、典嶺山獄。十名呻吟、典寒冰獄。十一毘迦、典剝皮獄。十二遙頭、典畜生獄。十三提薄、典刀兵獄。十四夷大、典鐵磨獄。十五悅頭、典寒冰獄。十六名穿骨、典鐵笏獄。十七名身、典蛆蟲獄。十八觀身、典烱銅獄。如是各

有無量地獄，以爲眷屬。(大正四五·九四一中)

※參照：後掲「地獄リスト9 寶唱等『經律異相』卷四九「十八地獄及獄主名字」

(地獄リスト3：卷九)

仰承十方盡虛空界一切諸佛、諸大菩薩，大神通力、大慈悲力、解脫地獄力、濟度餓鬼力、救拔畜生力、大神呪力、大威猛力，令〈某甲〉等所作利益所願成就。等一痛切，五體投地，爲阿鼻大地獄受苦衆生，乃至十八寒冰地獄、黑闇地獄、十八熱地獄、十八刀輪地獄、劍林地獄、火車地獄、沸屎地獄、鑊湯地獄，如是地獄，復有八萬四千地獄眷屬等獄，其中受苦一切衆生，〈某甲〉等以菩提心、以菩提行、以菩提願，悉皆代爲歸依世間大慈悲父。(大正四五·九五八中)

(地獄リスト4：卷九)

又復歸依如是十方盡虛空界一切三寶。願以慈悲力，救拔拯接阿鼻地獄，乃至黑闇地獄、刀輪地獄、火車、沸屎眷屬等獄受苦衆生，以佛力法力、諸菩薩力、一切賢聖力，令諸衆生即得解脫，畢竟不復墮於地獄，一切罪障悉得消滅。(大正四五·九五八下)

(地獄リスト5：卷九「爲灰河、鐵丸等獄禮佛」第二)

今日道場同業大衆，重復至誠五體投地，爲灰河地獄、劍林地獄、刺林地獄、銅柱地獄、鐵機地獄、鐵網地獄、鐵窟地獄、鐵丸地獄、尖石地獄，如是十方盡虛空界一切地獄，今日現受苦一切衆生。〈某甲〉等以菩提心，普爲歸依世間大慈悲父。(大正四五·九五八下～九五九上)

(地獄リスト6：卷九「爲飲銅、炭坑等獄禮佛」第三)

今日道場同業大衆，重復至心五體投地，普爲十方盡虛空界一切地獄，飲銅地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、熱地獄、大熱地獄、炭坑、燒林，如是等無量無邊眷屬等獄，今日現受苦衆生，〈某甲〉等以菩提心，普代歸依世間大慈悲父。(大正四五·九五九上)

(地獄リスト7：卷九「爲刀兵、銅釜等獄禮佛」第四)

今日道場同業大衆，重復至誠普爲十方盡虛空界一切地獄，想地獄、黑砂地獄、釘身地獄、火井地獄、石臼地獄、沸砂地獄、刀兵地獄、飢餓地獄、銅釜地獄，如是等無量地獄，今日現受苦衆生，〈某甲〉等今日以菩提心力，普爲歸依世間大慈悲父。(大正四五·九五九中)

(地獄リスト8：卷九「爲火城、刀山等獄禮佛」第五)

今日道場同業大衆，重復至誠，普爲十方盡虛空界一切地獄，火城地獄、石窟地獄、湯澆地獄、刀山地獄、虎狼地獄、鐵床地獄、熱風地獄、吐火地獄，如是等無量無邊眷屬等獄，今日現受苦衆生，〈某甲〉等以菩提心力，普爲歸依世間大慈悲父。（大正四五・九五九下）

（地獄リスト9：寶唱等『經律異相』卷四九「十八地獄及獄主名字」）

十八小王者，一迦延，典泥犁，二屈遼，典刀山，三沸遼壽，典沸沙，四沸典，典沸屎，五迦世，典黑耳，六嶮傿，典火車，七湯謂，典鑊湯，八鐵迦然，典鐵床，九惡生，典嶮山，十寒冰〈經闕王名〉，十一毘迦，典剝皮，十二逕頭，典畜生，十三提薄，典刀兵，十四夷大，典鐵磨，十五悅頭，典冰地獄，十六鐵筋〈經闕王名〉，十七身，典蛆蟲，十八觀身，典鉞銅〈出『問地獄經』〉。（大正五三・二五九上）

参照：上掲「地獄リスト2：卷四」

（地獄リスト10：[参考] 偽經『妙法蓮華經馬明菩薩品第三十』）

將至鐵圍兩山間。於十八地獄中而考治之。第一鑊湯地獄。第二鑊炭地獄。第三刀山地獄。第四劍樹地獄。第五黑闇地獄。第六寒冰地獄。第七火車地獄。第八刀兵地獄。第九火輪地獄。第十鐵鑊地獄。第十一銅柱地獄。第十二沸屎地獄。第十三拔舌地獄。第十四釘身地獄。第十五吐火地獄。第十六飲銅地獄。第十七愚癡地獄。第十八火城地獄。行十惡者，皆悉遍此十八地獄中受罪。（大正八五・一四二六下～一四二七上）

以上のリスト十種から，リスト1は十八地獄を踏まえる表現であることが分かる⁸³⁾。

更に論ずべきもう一點は、『觀佛三昧經』の引用語に見える「南無十方菩薩摩訶薩。南無十二菩薩。南無無邊身菩薩。南無觀世音菩薩」という一文である。これが諸菩薩と特定の菩薩に對する歸依であるのは確かだが，十二菩薩とは何か，無邊身菩薩とは何かを明らかにすることができない⁸⁴⁾。

【2.10 原文 J】本節におけるまとまった分量の原文比較として最後に(1)『慈悲道場懺法』卷七の「自慶」（自らの幸いを喜ぶ）と(4)「統略淨住子淨行法門」自慶畢故止新門第二十一

83) このほか、『慈悲道場懺法』には八地獄説に基づく箇所や，八寒地獄・八熱地獄・八萬四千鬻子地獄に言及する箇所がある。上掲【2.1】の原文A(1)(2)を見よ。

84) 『慈悲道場懺法』全十巻中に無邊見菩薩は六十四回現れ，その全てにおいて例外なく，直後に觀世音菩薩に歸依する文言が續く。漢譯において無邊身菩薩は曇無讖譯『大般涅槃經』に十二回言及されるが，同じ箇所に觀世音菩薩（觀音菩薩）への言及はない。

を取り上げてみよう。

兩書ともにまず經典に説かれる八難（極めてめぐり會い難い境遇）を『五苦章句經』の文言に基づいて説明した後、困難であるにもかかわらず自らに與えられた幸いを挙げ、喜びを表す。それが「自慶」である⁸⁵⁾。下記兩欄から一目瞭然の通り、「自慶」すべき事柄として「統略淨住子淨行法門」は七項目——「七自慶」——まで数え、更にその後、數を明記しないで八項目續ける。各々「佛言」という語で困難を示すので文章構造は明らかである。これは「統略本」の表記であるから、道宣が南齊の蕭子良『淨住子』二十卷にあった語句を書き換えたことを示している。

これに對して、(1)『慈悲道場懺法』は、これまで何度か論じた通り、南齊よりも後の梁代に原形が編纂された可能性の高い文獻である。言い換えると、(1)『慈悲道場懺法』の編纂時期は、蕭子良『淨住子』の後であり、かつ(4)道宣「統略淨住子淨行法門」の前である。『慈悲道場懺法』を編纂し始めた梁代に撰者は蕭子良『淨住子』二十卷を手元に置き、その文言を、同じ順序で用いながら『慈悲道場懺法』の下記引用箇所を編纂した。このことは、一致する語と語順の對應から確かである。その當時、(4)道宣「統略淨住子淨行法門」一卷は、世の中に影も形もなかったことを頭にとどめて頂きたい。

下記原文引用の右欄と比べると、(1)と(4)は、「七自慶」までの箇所においては、かなりの程度で語とその順序が一致する。ところが「七自慶」の途中に二重下線の語句が加わり、その後、(1)では㉗～㉙の九項目が續く。その中には太下線で示したように兩欄に一致する語句も見られるが、それとは別に二重下線の語句がそれぞれ相違することを見て取れる。特に著しい相違は、(1)『慈悲道場懺法』が「七自慶」で數による明示を止めることなく、「十五自慶」まで數字付きで明示することと、末尾の㉗㉘㉙㉚の五項目に二重線の語句が目立つこと、そしてその中でもとりわけ㉘㉙の三項目は(4)「統略淨住子淨行法門」に全く對應がないことである。

以上の説明を参考としながら二つの原文を比較検討していただきたい。

85) 「自慶」という語で示される事柄がいつも同じというわけではない。例えば唐の法藏(643-712)『華嚴經探玄記』卷一七は「一慶自發心。二慶捨所有。三慶救毀戒。四慶和諍訟。五慶護正法。六慶樂正法。七慶物同行。八自慶供佛。九慶他得定。十慶他智滿」(大正三五・四三五下)という十種の自慶を列ねる。しかしこれは『淨住子』に基づく自慶とは全く異なる。

<p>(1) 『慈悲道場懺法』卷第七「自慶」第一〈此略申自慶大意。其中慶事，隨自莊嚴〉： 今日道場同業大眾，從歸依已來，知至德可憑，斷疑，懺悔則罪惑俱遣。續以發心，勸獎兼行，怨結已解，逍遙無礙。豈得不入踊躍歡喜。所應自慶今宣其意。『經』云，「八難。二者地獄。二者餓鬼。三者畜生。四者邊地。五者長壽天。六者雖得人身，癡殘百疾⁸⁶⁾。七者生邪見家。八者生佛前，或生佛後」⁸⁷⁾。有此八難。所以衆生輪迴生死，不得出離。</p> <p>……中略……</p> <p>今略陳管見，示自慶之端。 大眾若能知自慶者，則復應須修出世心。 何者自慶。</p> <p>佛言「地獄難免」，相與已得免離此苦。是一自慶。 「餓鬼難脫」，相與已得遠離痛切。是二自慶。 「畜生難捨」，相與已得不受其報。是三自慶。 「生在邊地」⁸⁸⁾，不知仁義，相與已得共住中國。道</p>	<p>(4) 「統略淨住子淨行法門」自慶畢故止新門第二十一： 『經』云，「八難難度。二，地獄難。三，餓鬼難。三，畜生難。四，邊地難。五，長壽天難。六，雖得人身，盲聾暗瘡，不能聽受難。七，雖得人身六情完具，而世智辯聰，信邪倒見，不信三寶，肆意輕侮。此身死已，便在三途，隨業沈沒，久乃得出。時在入道，還不正信家生。第八，前後佛聞，不觀正法，徒生一世，增長邪見，具造衆罪，尋爾徒死」</p> <p>……中略……</p> <p>今略出自慶數條，繫在心首。</p> <p>佛言「地獄難免」，而今同得免離此苦。一自慶也。 佛言「餓鬼難脫」，而今同得遠於此苦。二自慶也。 佛言「畜生難捨」，而今同得不樹此因。三自慶也。 佛言「生在邊地，不知仁義」，今在中國，修習禮</p>
---	---

86) [語例] 支謙譯『太子瑞應本起經』卷上「到四月八日夜，明星出時，化從右脇生墮地，即行七步，舉右手住而言，『天上天下，唯我爲尊。三界皆苦，何可樂者』。是時天地大動，宮中盡明。……以天香湯，浴太子身。身黃金色，有三十二相，光明徹照。上至二十八天，下至十八地獄。極佛境界，莫不大明。當此日夜，天降瑞應。有三十二種。一者，地爲大動坵墟皆平。二者，道巷自淨臭處更香。……三十一，境內孕婦產者悉男，聾盲瘡，癡殘百疾，皆悉除愈」(大正三・四七三下～四七四上)。

87) 失譯(傳竺曇無蘭譯)『五苦章句經』「八惡處者，一曰地獄。二曰餓鬼。三曰畜生。四曰邊地。五曰長壽天。六曰雖得人身，盲聾暗瘡，手足殘跛，不能聽受。七曰雖得人身，六情完具，世智辯聰，學世經典，信邪倒見，祠祀鬼妖，或屠殺田獵，肆心放意，欺僞萬端，不信三尊，從是後身，還入地獄，從冥入冥，無有脫時，時得爲人，復不信正，不奉三尊，誹謗聖道。八曰生佛故處，是謂八惡，亦謂八難」(大正一七・五四四上～中)。[比較] 道宣『淨心誠觀法』卷上・誠觀六難自慶修道法「一者，萬類之中，人身難得，如『提謂經』說，今得人身，難於龜木。二者，雖得人身，中國難生。此土即當邊地之中，具足大乘正法『經』『律』。……」(大正四五・八二一下～八二二上)。なお、『慈悲道場懺法』本箇所に引く『經』について鹽入(1977/2007:494)は「八難は『經云』とされ、表現は異なるが阿含經の八難經とほぼ一致する」と論じて『中阿含經』卷二九「八難經」を注に示すが、これは的外れである。そこに文字單位で合致する語句は存在しない。八難を説く經典は他に多く、そのうち語彙の一致から注目すべきは「統略淨住子淨行法門」自慶畢故止新門第二十一と本注冒頭に示す『五苦章句經』である。

88) 竺法護譯『德光太子經』「佛言，賴吒和羅，我不但謂是輩之人墮三道壘，亦復當墮八惡之處。何等爲八。一者，生在邊地。二者，墮貧窮家。三者，所生之處，面目醜惡。四者，生於邪

<p>法流行，親承妙典。是四自慶。 <u>「生長壽天，不知植福」</u>，相與已得更復樹因。是五自慶。 <u>「人身難得，一失不返」</u>，相與已得各獲人身。是六自慶。 <u>「六根不具，不預善根」</u>，相與清淨得深法門。是七自慶。</p>	<p>智。四自慶也。 佛言「<u>生長壽天，不知植福，福盡命終，還墮惡道</u>」，而今不以世樂自娛，迴以供養。五自慶也。 佛言「<u>人身難得，一失不返</u>」，有過盲龜浮木之譬，今得人身。六自慶也。 佛言「<u>六根難具</u>」，今無缺損。七自慶也。</p>
<p><u>「世智辯聰，反成爲難」</u>，相與一心歸憑正法。是八自慶。^⑦ <u>「佛前佛後，復謂爲難」</u>，或云「<u>面不覩佛，又爲大難</u>」，相與已能發大善願。於未來世誓拔衆生，不以不覩如來爲難。但一見色像，二聞正法，自同往昔鹿苑初唱，事貴滅罪，生人福業，不以不見佛故，稱之爲難。^⑧</p>	<p>佛言「<u>丈夫男身難得</u>」，我已得也。^① 佛言「<u>女人身者，須知佛性則是丈夫</u>」，我已知也。^② 佛言「<u>邪辯難捨</u>」，我今歸正法也。^③ 佛言「<u>佛前佛後，是爲大難</u>」，我今相與慷慨立志。既見色像，又聞正法，則同鹿野，滅惑不殊也。^④</p>
<p>佛言「<u>見佛爲難</u>」，相與已得瞻對尊像。是九自慶。^⑨</p>	<p>佛言「<u>見佛爲難</u>」，我今頂禮佛所說像，功用等倫也。^⑤</p>
<p>佛言「<u>聞法復難</u>」，相與已得滄服甘露。是十自慶。^⑩</p>	<p>佛言「<u>聞法爲難</u>」，我今備得聞也。^⑥</p>
<p>佛言「<u>出家爲難</u>」，相與已得辭親割愛，歸向入道。是十一自慶。^⑪</p>	<p>佛言「<u>出家爲難</u>」，我今且隨衆也。^⑦</p>
<p>佛言「<u>自利者易，利他爲難</u>」，相與今日一拜一禮，普爲十方。是十二自慶。^⑫</p>	<p>佛言「<u>出家專信，倍復爲難</u>」，我今一心無敢二見，敬法愛法，以法爲師。^⑧</p>
<p>佛言「<u>捍勞忍苦爲難</u>」，相與今日各自翹勤，有所爲作，不爲自身。是十三自慶。^⑬</p>	<p>(大正五二・三一六中～下。徐立強 1998a: 205; 船山 2006: 297-300)</p>
<p>佛言「<u>讀誦爲難</u>」，我今大衆同得讀誦。是十四自慶。^⑭</p>	
<p><u>「坐禪爲難」</u>，而今見有息心定意者。是十五自慶。^⑮ (大正四五・九五〇中～九五一上)</p>	

どうであろうか。(1)『慈悲道場懺法』が、(4)「統略淨住子淨行法門」が生まれるより前の時代に、原典である『淨住子』二十卷から直接に編輯作業を行った結果を、左欄は如實に示すと筆者は考える。恐らく道宣はこうした(1)『慈悲道場懺法』の文を知らぬまま、獨自に二十卷本を節略したために、右欄(4)のような編輯となったのである。兩書の關係をこのように理解するのが最も自然であり、説得力をそなえると考えてはどうか。少なくとも筆者自身はこの推定に強い自負を抱く者である。

惡反善之家。五者，生與惡知識會。六者，多疾病。七者，所生處壽命短。八者橫死。是爲菩薩八惡事，墮於邪壘」(大正三・四一三中)。

第3節『慈悲道場懺法』の語彙

『慈悲道場懺法』には、使用する時代を特定できる語句がいくつか存在する。

【3.1「攝大威儀戒」】まず注目すべき語は「攝大威儀戒」である。すなわち巻六に次のように言う。

又無始已來，至于今日，於攝大威儀戒、攝善法戒、攝衆生戒多有毀犯。身壞命終，墮三惡道。在地獄中，受無量無邊恆沙等苦。又墮餓鬼，無所識知，恆抱飢渴，受寒熱惱。又墮畜生，受無量苦，飲食不淨，飢寒困苦。又出生人中，墮邪見家，心常諂曲，信於邪言，失於正道，沒生死海，永無出期。三世一切衆惡怨對不可稱計。唯有諸佛盡知盡見，劑如諸佛，所知所見罪報多少，今日懺悔，願乞除滅。（大正四五・九四九中）

始め無き太古から今に至るまで、〔私は〕攝大威儀戒（正しい行爲を統括する法規）・攝善法戒（善い事柄を統括する法規）・攝衆生戒（他の衆生〔の利となる行爲〕を統括する法規）について、多くの違反を犯してきた。この身が減し壽命が終われば、三惡道に墮ちる。地獄ではガンジス河の砂數に等しい無量無邊の苦を受けるだろう。更に餓鬼道に墮ち、誰も識別できず、常に飢餓し、暑さ寒さの苦惱を受けるだろう。更に畜生道に墮ち、無量の苦しみを受け、汚物を飲食し、飢餓と寒さに苦しむだろう。更に人間に生まれても間違った考えを抱き、心は常に歪みねじれ、邪説を信じ、正しい道を喪失し、輪廻の大海に沈み、永遠に脱出できないだろう。三世の全ての悪や障礙は計り知れない。ただブツダたちだけが〔眞實を〕知り目の當たりにするから、ブツダたちが罪とその報いを知り當たりにするのと同じように〔なれるのを願って〕今日懺悔し、〔罪業の〕消滅を乞い願う。

この冒頭に出る「攝大威儀戒、攝善法戒、攝衆生戒」は菩薩戒の三聚戒を表し、通常はそれを「律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒」と表記する⁸⁹⁾。律儀戒に代えて「攝大威儀戒」

89) 菩薩戒を構成する三聚戒の名稱のみを略記すると次の通り。〔北涼〕曇無讖譯『菩薩地持經』一律儀戒・攝善法戒・攝衆生戒。〔南朝宋〕求那跋摩譯『菩薩善戒經』一戒・善戒・利益衆生戒、戒・受善法戒・爲利衆生行戒/爲利衆生故行戒、一切菩薩戒・攝持一切菩提道戒・利益一切諸衆生戒。僞經『菩薩瓔珞本業經』一攝律儀戒・攝善法戒・攝衆生戒。〔唐〕玄奘譯『瑜伽師地論』菩薩地 一律儀戒・攝善法戒・饒益有情戒。

という語を用いることは大正新脩大藏經に一例もない。藏外佛典を考慮しても唯一の例外は、以下に示す藏外文獻『出家人受菩薩戒法』卷第一である（ペリオ將來敦煌寫本二一九六號, Pelliot chinois 2196）。

○『出家人受菩薩戒法』卷一「羯磨四」:

善男子, 戒相大理有三。一是攝大威儀戒, 二、攝善法戒, 三、攝衆生戒〈亦云「護衆生戒」〉。善男子, 汝欲於我受一切菩薩戒, 攝大威儀戒〈『地持經』云「律儀戒」〉、攝善法戒、攝衆生戒。此是過去、未來、現在一切菩薩所住戒。過去菩薩已學, 未來菩薩當學, 現在菩薩今學。

○『同』卷一「受攝大威儀戒法五」:

出家人欲受菩薩戒, 先應受攝大威儀戒。攝大威儀, 即是調御戒。作心有廣狹, 要期有短長, 以此爲異。出家人受攝大威儀戒, 有二法。一者重受, 二者轉戒。

『出家人受菩薩戒法』卷第一は、「大梁天監十八年(519)歲次己亥夏五月敕寫」云々の跋を有する梁武帝と直結する寫本であり、大乘菩薩戒の受戒作法を記す。これが『慈悲道場懺法』と同じ「攝大威儀戒」という語を示す唯一の文獻であることは、『慈悲道場懺法』が梁代の特殊な用語に基づくことを示す⁹⁰⁾。

【3.2「道場」】次に『慈悲道場懺法』という書名および本文にしばしば現れる「道場」という語も特徴的である。「道場」を用いる漢譯として最もよく知られるのは鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』である。その菩薩品に「直心是道場, 無虛假故。發行是道場, 能辦事故。深心是道場, 增益功德故。菩提心是道場, 無錯謬故」云々と「～是道場」を反復する箇所がある(大正一四・五四二下)。そして『維摩經』サンスクリット語本と比べることにより「道場」の原語は「ボーディ・マンダ bodhi-maṇḍa」(悟りの場, 悟りの地)であることも分かるし、吳の支謙譯『維摩詰經』菩薩品との比較から「道場」という語は支謙譯(大正一四・五二四上)にあることも分かる。更に鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』序品にも「佛坐道場, 所得妙法」(大正九・三下)とあり, そこでも「道場」の原語は「ボーディ・マンダ」である。

「道場」は「悟りの場」の逐語譯であるが, その意味は二種に分かれる。一つは「悟りの場」そのもの即ち佛成道時に坐した菩提樹下を指す。これが悟りという修行の結果を

90) 三聚戒はサンスクリット語 trividha śīlaskandha の漢譯。三聚淨戒とも言う。菩薩戒を構成する三支柱である律儀戒/攝大威儀戒・攝善法戒・攝衆生戒の三を表す。三語の意味・サンスクリット原語・『出家人受菩薩戒法』の概略・関連研究は船山(2019a: 255-257, 261-264)を見よ。

示すのに對し、もう一つの意味は修行者が悟りに至る原因となる場すなわち修行道場を指す。これは廣い意味で寺と重なる。寺は佛像を祀る本堂をそなえる場であると同時に、修行者が集い修行し禮拜懺悔する場である。

『維摩詰所説經』の譯者鳩摩羅什は『注維摩詰經』巻四において「道場」の二義性をこう解説する。

得必由因故、爲廣説萬行。萬行是「道場」因。而言「道場」者、是因中説果也。(大正三八・三六三下)

〔未知の眞實を〕獲得することは、必ず原因に基づくから、廣くあらゆる行いを説き示す。あらゆる行いが悟りの場〔に到達するための〕原因である。そして「悟りの場（道場）」とは原因に對して結果を比喩的に用いる表現⁹¹⁾である。

この鳩摩羅什の説明からも「道場」には人々が修行する場（修行道場）という原因と、修行の果てに得られる悟りという結果を指す場合の二義が重なることが分かる。

「道場」を二つの意味で用いる例は他にもある。その第一は『出家人受菩薩戒法』第一である。その「羯磨四」の冒頭に、菩薩戒を授ける仲介役となるべき「智者」(*vijña, 授戒儀禮の司會進行役)が始めにすべき事を「智者は先ず道場の内に入り、當に佛像の前にて十方の佛に禮すること九拜すべし」と言う。この「道場」は、佛像を安置する授戒場である。同様に授戒場を「道場」と稱する事例は『出家人受菩薩戒法』に數回現れる。一方、「序一」は「釋迦牟尼佛は、蓮華藏莊嚴世界海に至り、盧舍那佛の所従り、還りて道場に坐し、菩薩戒を結ぶ」と言う。この「道場」は釋迦牟尼の坐す悟りの場すなわち菩提樹下を指す。このように『出家人受菩薩戒法』は「道場」を悟りの原因と結果である悟りの二義で用いる。

『慈悲道場懺法』にも「道場」は二百近く現れる。書名にも現れるが、最も多い用例は、自ら及び共に修行する仲間を「今日道場同業大衆」(今日、この道場にて同じ行爲を共有する我ら大衆)とする言い方である(全十巻で百回以上)。この「道場」は修行道場の意である。他方、『慈悲道場懺法』巻二には「〔某甲〕等は、今日より去、道場に坐すに至るまで、人天の心に著せず、聲聞の心を起こさず、辟支佛の心を起こさず、唯だ大乘の心を起こさん」とある(大正四五・九二九上)。これは修行者の誓願であり、「道場に坐すに至るまで」は「悟りを得るまで」と同義である。ここにも「道場」の原因・結果の二義性を見

91) 原語「因中説果」を「原因に對して結果を比喩的に用いる表現」と譯した。轉義的な語の使用であることを示すサンスクリット語の常套語に upacāra がある。私見として、その一つの種類である *kāraṇe kāryopacāraḥ を「因中説果」の原語と想定した。比喩的表現・轉義的表現 (upacāra) には kāraṇe kāryopacāra, avayave samudāyopacāra など數種ある。

て取れる。

【3.3「東西二冶】『慈悲道場懺法』卷九「爲六道禮佛」第二の「三惡道禮佛」（第八）の末尾「爲執勞運力禮佛」に言う。

又願東西二冶、諸餘牢獄、徒囚繫閉、憂厄困苦、諸有疾病、不得自在者、各及眷屬、以今爲其禮佛、功德威力、一切衆苦皆悉解脫。（大正四五・九六二上）

更に願わくは、東冶と西冶と他の牢獄とに閉じ込められた囚人たちで悩み苦しむ者たちや病める者たち、自由を得られない者たち、そして彼らの一族が、今彼らのために禮佛する功德の威力によって、一切の苦惱からすっかり解放されんことを。

ここに現れる「東西二冶」は建康の都の東冶（東部にある冶鑄工場）と西冶（西部にある冶鑄工場）を指す。梁代にはそこに囚人を幽閉し勞役刑を課した。『高僧傳』卷九の齊の正勝寺の法願傳は、東冶にて勞役刑に服す囚人がいた逸話を伝える（大正五〇・四一七上）。東西二冶については『資治通鑑』梁紀四・武帝天監十四年條の胡三省の注に「建康に東、西の二冶有つて、各々冶令を置きて以て之れを掌らしむ」とあるのが参考になる（吉川・船山2010: 385注9）。故に上に引用した『慈悲道場懺法』の「東西二冶」は、囚役と繋がる梁代の實態を踏まえる。

【3.4「隨從】『慈悲道場懺法』卷一「懺悔」第三に「隨從佛語」——佛語に隨從す——という四字句が二回現れる（共に大正四五・九二六下）。このほか『慈悲道場懺法』は「隨從」という語を「皆悉隨從」——皆な悉く隨從す——という四字句で用いる。後者「皆悉隨從」は他の佛典にも用例が多い⁹²⁾。それ故、「皆悉隨從」は『慈悲道場懺法』に特有とは言えないが、前者「隨從佛語」は極めて特殊である。「隨～佛語」という四字句の事例を具體的に知るため、大正新脩大藏經で語彙検索すると、「隨從佛語」の四字を用いる例は『慈悲道場懺法』に現れる二回のみであり、他には用例が全くない。一方、意味的に同じ「隨順佛語」を検索すると、その用例は大正新脩大藏經に二十五回現れる。

更に特筆すべきは、『慈悲道場懺法』は十巻を通じてただの一度も「順」字が現れない事實である。これは偶然の所産ではない。意圖的な避諱である。具體的には梁の武帝の父「蕭順之」の「順」を避け「從」に改めているのである。

一般的に言えば佛典は原則として諱字を適用しない。しかし例外があった。それは通

92) 「皆悉隨從」の用例は、例えば無羅叉（/無叉羅?）譯『放光般若經』に五回、鳩摩羅什譯『大智度論』に四回、玄奘譯『大般若波羅蜜經』に二回など、大正新脩大藏經に合計三十八用例がある。

常の佛典でなく、皇帝に献上することになる敕撰の佛典の類いであった。梁代には武帝の敕によって編纂を命じられた寶唱撰『經律異相』に「順」を「從」に變えた例がある。また、梁の武帝の命令で敕寫した『出家人受菩薩戒法』卷第一（P 2196）も「順」を避け「從」を用いる。このような例が實在することは筆者が既に別稿で論じた通りである⁹³⁾。更には、第2節で取り上げた梁武帝「東都發願文」にも短い分量の中に「隨從」は七回も現れるが、「順」字は一度も現れない。この状況に鑑み、『慈悲道場懺法』が「順」を一度も用いず「隨順」を「隨從」とすることは、『慈悲道場懺法』の當該箇所は梁代に編纂されたことを告げると理解できる。

【3.5 副詞「～到」】次に漢字二字から成り、二字目を「到」とする副詞が少なからず用いられる。『慈悲道場懺法』には「増到」（益々・重ねて）が六回、「苦到」が四回（念入りに・懇ろに）、「至到」（十分に・極限まで）が二回現れる。一方、『統略淨住子淨行法門』には「増到」が一回、「濃到」が一回現れる。「至到」の用例はない。また「斷酒肉文」にはこれら「～到」の用例は見られない。これら「～到」型の副詞として比較的多く用いられるのは「至到」のほか、「懇到」（懇ろに）であろう。

「～到」は齊梁のみに用いられた語ではない。「懇到」は『後漢書』諒輔傳に「精誠懇到」、『宋書』懷眞道に「果烈懇到」と用いられるように、先行する時代に用例がある。しかしながら大正新脩大藏經を用いて佛典における「増到」の用例を検索すると、ヒットする書名は『慈悲道場懺法』（六回）と『廣弘明集』（五回）の二種のみである。これは「増到」を用いる時代と文献が佛典では限られることを示唆する。

第4節 『慈悲道場懺法』の引用書

本節では『慈悲道場懺法』の編纂の根幹に関わる引用文献を同定し、文献の種類と年代を確定する。本書は儒學・道學その他の一般書と接點が希薄なため、特に注目すべき外典の引用はない。そこで以下に内典すなわち佛典に限って引用される文献を列挙し、その細目を分類する。

93) 「順」を避け「從」に改める史書として梁の蕭子顯『南齊書』があることは錢大昕『廿二史考異』卷二五・南齊書に「梁武帝父名順之，故子顯修史，多易爲從字」云々とある通りである。同じことは陳垣『史諱舉例』卷八歷朝諱例にも指摘されている。梁代佛典の避字については船山（2010: 193-194）を見よ。

【4.1 『慈悲道場懺法』が引用・言及する佛典】

佛典の種類	書名を明示して引用するもの	書名を示さず引用／暗黙裏に言及するもの
漢譯	『經』（＝帛尸梨蜜多羅譯『灌頂七萬二千神王護比丘呪經』） 『法華經』（＝鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』） 『般若』（＝鳩摩羅什譯『金剛般若波羅蜜經』） 『經』（＝鳩摩羅什譯『佛垂般涅槃略說教誡經』＝遺教經） 『經』（＝鳩摩羅什譯『華手經』） 『長阿含經』 『雜藏經』（法顯譯） 『經』（＝佛陀跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』） 『三昧經』（＝佛陀跋陀羅譯『觀佛三昧經』） 『大集經』（＝曇無讖譯『大方等大集經』） 『經』（＝曇無讖譯『大方等大集經』） 『經』（＝求那跋陀羅譯『罪福報應經』） 『經』（＝曇摩蜜多譯『觀普賢菩薩行法經』） 『經』（＝求那跋陀羅譯『罪福報應經』＝『輪轉五道罪福報應經』＝『輪轉五道經』） ⁹⁴⁾	支謙譯『太子瑞應本起經』『八師經』 維祇難譯『法句經』 竺法護譯『普曜經』 燉煌三藏譯『決定毘尼經』 法立・法炬共譯『大樓炭經』 康僧鎧譯『無量壽經』 難提譯『請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經』 竺佛念譯『出曜經』 鳩摩羅什譯『首楞嚴三昧經』『妙法蓮華經』 『維摩詰所說經』『十住經』『持世經』『大智度論』『十住毘婆沙論』 佛陀耶舍・竺佛念共譯『四分律』 法顯譯『大般泥洹經』『雜藏經』 佛陀跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』『觀佛三昧經』 ⁹⁴⁾ 曇無讖譯『金光明經』『大方等大集經』 南本『大般涅槃經』（曇無讖譯『大般涅槃經』） 求那跋陀羅譯『勝鬘師子吼一乘大方便方廣經』 [參考] 波頗譯『般若燈論釋』卷一一引『空寂所問經』（大正三〇・一〇九上）
失譯漢譯		『罪業應報教化地獄經』 ⁹⁶⁾ 『鬼問目連經』 ⁹⁷⁾ 『貧女爲國王夫人經』 『兜調經』 『十卷譬喻經』（寶唱『經律異相』卷四八引） 『五苦章句經』

94) 大正新脩大藏經は『觀佛三昧海經』と題する。しかし南朝齊梁期には「海」を付さず『觀佛三昧經』と稱するのが標準的であった。[梁]僧祐『出三藏記集』卷二『觀佛三昧經』八卷（大正五五・一一下）。僧祐『釋迦譜』に引用される經題も八回全て「海」を付さない。

95) 卷三の「『經』言」に続く長い引用（大正四五・九三二中～下）は、求那跋陀羅譯『罪福報應經』（大正一七・五六二中～下）とかなり高い確度で一致する。そのほか道世『法苑珠林』卷六八に引く『輪轉五道經』とも一致する（大正五三・八〇五上～下）。『慈悲道場懺法』（左欄）の用いる『三昧經』も「海」を付さない經名である。

96) 『罪業報應教化地獄經』を後漢の安世高譯とする傳承が信ずるに足りないことについて【5.2 梁後の改變】（特に注109）を見よ。

97) 大正新脩大藏經が『鬼問目連經』を後漢の安世高譯とするのも後代の付會である。梁の僧祐『出三藏記集』は卷四「新集續撰失譯雜經錄」に『鬼問目連經』一卷を列して失譯と見なし、安世高譯としない。

偽經	『護口經』 ⁹⁸⁾	『決罪福經』 ⁹⁹⁾ 『比丘應供法行經』(=『比丘應供經』=『應供行經』) ¹⁰⁰⁾
失譯?偽經?	『地獄經』(=『問地獄經』=寶唱等『經律異相』卷四九引『問地獄經』) 『經』(=寶唱等『經律異相』卷四九引『問地獄經』)	『現在賢劫千佛名經』

【4.2 引用書から分かること】上記【4.1】に示した引用一覽は、筆者が目下調査中の中から確かに言える事柄を抽出したに過ぎない。従って将来的には更に豊かな内容となる可能性があるものとしてご覧いただきたい。ともかくこの一覽表から何が分かるか。暫定的に三點を指摘したい。

第一に、この一覽には隋唐宋の新譯が見られない。漢譯者を確定できる引用のうち最も年代的に下るのは南朝宋の求那跋陀羅(394-468)譯『勝鬘師子吼一乘大方便廣經』と『罪福報應經』(別名『輪轉五道罪福報應經』、『輪轉五道經』)である。

第二に、本稿【2.9 原文 I】に表示した通り、『慈悲道場懺法』巻四には佛陀跋陀羅譯『觀佛三昧經』巻五からの逐語的で長大な引用がある。また、そのほかにも『觀佛三昧經』や『大方廣佛華嚴經』の逐語的な引用が多い。總じて『慈悲道場懺法』における引用および暗黙裏の經典文言使用は原文に忠實な場合が多い。

第三に『慈悲道場懺法』の引用と文言が一致する偽經もある。上記表中に『比丘應供法行經』(=『比丘應供經』)と『決罪福經』とを挙げた。前者の『比丘應供法行經』は偽經『梵網經』下巻第四十三輕戒にも引用される偽經である¹⁰¹⁾。それ故、『比丘應供法行經』の成立下限は五世紀中頃を下ることはない。

一方、『決罪福經』の年代はどうか。

98) 『護口經』は、巻一に「如『護口經』說」と引用される(大正四五・九二五中～下)。ほぼ同文が、[梁]寶唱等『經律異相』巻一六に同名の『護口經』を引用する(大正五三・八六下～八七上)。しかしほぼ同文は[後秦]竺佛念譯『出曜經』巻一〇にも見える(大正四・六六三上)。「出曜經」は漢譯であることが確かであるから、同文を有する『護口經』は中國で編輯した經典か偽經かであり、編輯年代は400年代初頭から516年(『經律異相』の成書年)の間と推定できる。

99) 【4.2 引用書から分かること】を見よ。

100) 【4.2 引用書から分かること】を見よ。

101) 船山(2017: 406-409)、望月(1946: 348-349)。「梵網經」の編纂時期は約450~480年頃の三十年間に収まると考えられる(船山2017: 16-19)。

『慈悲道場懺法』卷三	『決罪福經』
<p>『經』言、「作善得善，作惡得惡。而五濁惡世不可作惡。善不失善報，爲惡自招殃」。莫言輕脫立此懺法。『經』言、「莫輕小善以爲無福。水滴雖微，漸盈大器。小善不積，無以成聖。莫輕小惡以爲無罪。小惡所積，足以滅身。大衆當知，吉凶禍福，皆由心作」。若不作因，亦不得果。殃積罪大，肉眼不見，諸佛所說，誰敢不信。我等相與生世強健。復不勤學，自力行善。臨窮方悔，亦何所及。今已共見一切過患。</p> <p>(大正四五・九三三上)</p>	<p>行善得善，行惡得惡。惡世不可行惡。惡人先勝後負，先吉後凶。善世不可失善，失善者爲自罰。勿繫<small>(マ)</small>小善以爲無福。水滴雖微，漸盈大器。小善不積，無以成身。無輕小惡以爲無罪。水滴唯微，漸成大器。小惡不積，不足滅身。吉凶禍福，皆由心生，不可不順。五戒爲人本，十善福之根，五戒德之根，十善天之種。佛爲一切父，經爲一切母，同師者則兄弟壘劫常親。</p> <p>(大正八五・一三三三上)</p>

このように比べると『慈悲道場懺法』は『決罪福經』を踏まえると言ってよいかと思われる。では『決罪福經』はいつ頃の編纂か。經典目錄をひもとくと、[隋]法經等『衆經目錄』卷四の疑錄に「『決罪福經』一卷〈一名『惠法經』〉」(大正五五・一三八上)と記す。ただしやや異なる經名『決定罪福經』をも考慮すると、梁の僧祐『出三藏記集』卷五「新集疑經偽撰雜錄」に「『決定罪福經』一卷」(大正五五・三九上)が見え、隋の費長房『歷代三寶紀』卷九にも「『決定罪福經』一卷〈世注爲疑〉」(大正四九・八四中)とある。唐の智昇『開元釋經錄』卷一八は『決定罪福經』を『法經錄』を「一名『慧法經』」とするから、『決定罪福經』と『決定福經』は同本であり、梁の僧祐以前に存在したことが判明する。

以上によって『慈悲道場懺法』は引用する偽經もまた、漢譯同様、梁代以前のものに限られるから、『慈悲道場懺法』の成立の上限は南齊末から梁初の頃に設定して問題ないという結論が得られる。

第5節 『慈悲道場懺法』の原形と改變

第三節で『慈悲道場懺法』は語彙的に梁代の佛教文獻と共通性を有することを指摘した。そして第四節では『慈悲道場懺法』中に引用する佛典を漢譯と偽經に大分して示し、どちらの場合も隋唐およびそれ以後の成立であることが確かな文獻を見出せないことを示した。従って導き出せる結論として、『慈悲道場懺法』の骨格と内容は梁代に編纂された可能性が濃厚である。これを承けて本節では『慈悲道場懺法』の編纂過程を検討してみたい。

『慈悲道場懺法』は梁代に成ったとするならば、では何故に早期の經典目錄に言及がないのか。本稿序に述べたように、『慈悲道場懺法』の存在を示す最早期の經典目錄は、圓珍『日本比丘圓珍入唐求法目錄』(857年)である。『慈悲道場懺法』の原形が500年代初

頭に成ったならば、圓珍が取り上げるまで約350年の長きにわたり日の目をみなかったことになる。その理由について徐立強(1998)は、經典目錄に載録する文獻は漢譯が主であり、中國の經典目錄は漢人撰著の記錄に漏れが多いことと、日本の經典目錄は漢人の撰著にも強く關心を有することを指摘する。要するに經典目錄に言及がないことと文獻の存否は別かも知れない。

【5.1 梁武帝『發菩提心』】以下に、筆者なりの視點から『慈悲道場懺法』の編纂流布を更に考察してみたい。結論を先に吐露してしまうならば、原著が『慈悲道場懺法』であり、分量は十巻であったと斷言するにはあまりにも資料が不足しているけれども、一つ注目すべき事は、『慈悲道場懺法』巻二と巻一〇に次の二行が現れることである。

敬禮興正法馬鳴大師菩薩。

敬禮興像法龍樹大師菩薩。(大正四五・九三一下=九六七中)

「興」の用い方に癖があるが、「正法〔の時代〕に興起した馬鳴大師という菩薩に敬しんで禮拜す。像法〔の時代〕に興起した馬鳴大師という菩薩に敬しんで禮拜す」という意味であろう。馬鳴(アシュヴァゴーシャ Aśvaghōṣa)や龍樹(ナーガールジュナ Nāgārjuna)への言及は特に珍しくない。特徴的なのは、ここに馬鳴は「正法」(釋迦の滅後五百年以内)、龍樹は「像法」(釋迦の滅後五百年より後)の菩薩と明記する點である。よく似た文獻に隋末唐初の吉藏(549-623)の『百論疏』と『中觀論疏』がある。その原文を掲げる。

吉藏『百論疏』序疏：

叡師『成實論序』是什師去世後作之，述什師語云，「佛滅後三百五十年，馬鳴出世。五百三十年，龍樹出世」。又云，「馬鳴興正法之末，龍樹起像法之初」。梁武帝『發菩提心』因緣中云，「敬禮興正法馬鳴菩薩。歸命興像法龍樹菩薩」。(大正四二・二三三上) 叡法師の『成實論序』は鳩摩羅什法師の逝去後の著作であり、鳩摩羅什法師の言葉の次のように述べる，「ブツダの滅後三百五十年に馬鳴が世に現れた¹⁰²⁾。〔ブツダの滅後〕五百三十年に龍樹が世に現れた」。更に言う，「馬鳴は正法の末に興起し，龍樹は像法の初めに興起した」。〔叡法師の解説とは別に〕梁の武帝は『發菩提心』の「因緣」章に言う，「正法〔の時代〕に興起した馬鳴大師という菩薩に敬しんで禮拜す。像法〔の時代〕に興起した馬鳴大師という菩薩に敬しんで禮拜す」。

吉藏『中觀論疏』卷一末：

102) 馬鳴を佛滅後三百五十年とする説は、想像するに鳩摩羅什譯『馬鳴菩薩傳』(落合・齊藤2000: 268)と梁の僧祐『薩婆多師資傳』(船山2019: 302)に「佛滅後三百餘年」に世に現れたとする説に基づくであろうか。

睿師『成實論序』述羅什語云、「馬鳴是三百五十年出。龍樹是五百三十年出」。(大正四二・一八中)

叡法師の『成實論序』に鳩摩羅什の言葉を述べる、「馬鳴は〔ブツダの滅後〕三百五十年に現れた。龍樹は〔ブツダの滅後〕五百三十年に現れた」。

このうち『百論疏』も『中觀論疏』も共に鳩摩羅什の言葉を叡師(僧叡=慧叡)¹⁰³⁾の『成實論序』から引用する孫引きを含む。『成實論序』の本文は散佚し現存しない。合わせて比較すべきは慧叡「大智釋論序」の「馬鳴起於正法之餘，龍樹生於像法之末」の二句である(僧祐『出三藏記集』卷一〇。大正五五・七四下)。ただし「大智釋論序」中の後半「龍樹生於像法之末」は誤寫であり、本來は「龍樹生於像法之初」だったに違いない。しかしこれまでこの箇所¹⁰⁴⁾に誤寫の問題があることを論じた者がいるとは寡聞にして知らない¹⁰⁴⁾。

更に注目すべきは梁の武帝『發菩提心』の「因緣」章である¹⁰⁵⁾。その文は『慈悲道場懺法』の二箇所と同じである¹⁰⁶⁾。これは何を示唆するか。恐らく導き出せる結論は二種ある。一は『發菩提心』は『慈悲道場懺法』の別名である可能性。一は梁武帝が『發菩提心』と『慈悲道場懺法』という異なる二書に同文を用いた可能性。私見によれば後者の可能性が大きい¹⁰⁷⁾。

【5.2 梁後の改變】何度も述べた通り、『慈悲道場懺法』には梁代の言語的特色が認められるから、その最初の成立は梁代だったと見なすのが自然である。その遙か後の例えば唐中期頃に梁代に付託して作成された可能性は無に等しい。そこで『慈悲道場懺法』

103) 僧叡と慧叡は同人である。横超(1942/71)参照。

104) 堅實な譯注として高い評價の中嶋(1997: 291, 295 注7)さえ「龍樹生於像法之末」という句については何も論じない。

105) 確證は示せないが、『發菩提心』を書名、「因緣」のその中の一部(因緣を述べる章の類い)と暫定的に解した。

106) 吉藏『中觀論疏』の注である日本奈良朝の安澄『中論疏記』巻一本に「梁武帝『發菩提心』序文」への言及があるので、「因緣」は書名でなく、章名の類いと解すべきである。

107) 直前注に言及した安澄『中觀論疏』巻一本は、梁武帝「捨道詔文」より「『大經』中說、道有九十六種、惟佛一道是於正道、其餘九十五種名爲邪道。朕捨邪外道、以事正内。諸佛如來若有公卿能入此誓者、各可發菩提心。老子、周公、孔子等、雖是如來弟子、而化迹既邪、止是世間之善、不能革凡成聖。其公卿、百官、侯王、宗族、宜反僞就真、捨邪入正」(=『廣弘明集』卷四「捨事李老道法詔」。大正五二・一一二上~中)という文を引用し、その後で「梁武帝『發菩提心』序文亦同」——右掲「捨道詔文」と同内容の文が梁の武帝『發菩提心』序文にもあると述べている。しかし現存する『慈悲道場懺法』は序文を持たず、右と同内容の文を見出すことができない。それ故、安澄の言う梁武帝『發菩提心』は『慈悲道場懺法』とは全く別の文獻であると筆者は推測する。

の中核部の成立時期は梁代であったと推定したい。しかしその場合もあくまで中核部の成立時期についてであって、十卷全體を梁代成立と見なすことは不可能である。

その理由は本文中にある。禮拜懺悔を行う人物を次のように記述する箇所がある。

「當今皇帝（舊云大梁皇帝）、皇太子」（卷二、大正四五・九三一下。卷八、大正四五・九五五下）

「分土諸王（舊云臨川諸王）」（卷八、大正四五・九五五下）

ここには二つが内含されている。一つは、皇帝に関する元來の表記が「大梁皇帝」であり、それが後のある時——時期は不明¹⁰⁸⁾——に「當今皇帝」と書き換えられたこと。もう一つは諸王に関する元來の表記が「臨川諸王」であり、それが後に「分土諸王」と書き換えられたこと。

元來は「大梁皇帝」という稱したということは、『慈悲道場懺法』の成立は「梁」に「大」を付して呼んだ時代すなわち梁の最中だったことを示している。南齊でも陳でも隋唐でもなかった。一方の「臨川諸王」から「分土諸王」への書き換えについて筆者は定見に至っていない。

『慈悲道場懺法』が上記二箇所以外にどれ程まで後代の改變を含むか、筆者には確言することが憚られる。引用文獻から見る限り、その殆どは梁以前の漢譯と同定することが可能であるのは確かである。しかし問題が皆無であるわけではない。

問題の第一は、古い漢譯とされるけれどもその歸屬性が疑わしい經典である。その例に後漢の安世高譯とされる『罪業應報教化地獄經』がある¹⁰⁹⁾。本經の初出は隋の費長房

108) 「當今皇帝」に書換えた時期はいつ頃か。筆者は史學に疎いため誤解の誇りを免れないが、大正新脩大藏經と大日本續藏經に収める文獻に限って言えば、「當今皇帝」を用いるのは元か明に限られる如くである。大正新脩大藏經においては、『慈悲道場懺法』に現れる二例の外は、元の念常『佛祖歷代通載』卷二二（大正四九・七一—九中）、元の祥邁『辯偽錄』卷五「大元世主當今皇帝、聖躬萬歲、萬歲萬萬歲」（大正五二・七七—八上）、明の幻輪『釋鑑稽古略續集』一「當今皇帝云」（大正四九・九〇—七上）であり、三例共に「大元世主當今皇帝、聖躬萬歲、萬歲萬萬歲」という形で現れる。大日本續藏經を検索しても元明を遡る用例は見られない如くである。

109) 典型的な例を二箇所挙げると次の通り。[1a]『慈悲道場懺法』卷三「如是我聞、一時、佛住王舍城耆闍崛山中、與菩薩摩訶薩及聲聞眷屬俱。亦與比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及諸天龍、鬼神等、皆悉集會。爾時信相菩薩白佛言、「世尊、今有地獄、餓鬼、畜生、奴婢、貧富、貴賤種類若干。凡有衆生聞佛說法、如孩子得母、如病得醫、如裸得衣、如闇得燈。世尊說法、利益衆生、亦復如是」。爾時世尊觀時已至、知諸菩薩勸請殷勤、即放眉間白毫相光、照于十方無量世界、地獄休息、苦病安寧。爾時一切受罪衆生尋佛光明、來詣佛所、遶佛七匝、至心作禮、勸請世尊、廣宣道化、令諸衆生得蒙解脫」（大正四五・九三—三下）
≡ [1b] 安世高譯『罪業應報教化地獄經』「如是我聞、一時、佛住王舍城耆闍崛山中、與大菩薩摩訶薩及聲聞眷屬俱。亦與比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及諸天龍、鬼神等、皆悉集會。爾時信相菩薩白佛言、「世尊、今有地獄、餓鬼、畜生、奴婢、貧富、貴賤種類若干。」

『歴代三寶紀』巻四に見える『地獄報應經』一卷であり、それ以前の經録たとえば僧祐『出三藏記集』には言及されない。確かに唐の智昇『開元釋經録』は『罪業應報教化地獄經』を安世高譯と認定する¹¹⁰⁾。しかし「如是我聞」から始まることは鳩摩羅什または彼と同期の竺佛念譯かそれ以後の特徴である¹¹¹⁾。菩薩摩訶薩に言及するのは常識的に見れば大乘經典であることを示唆し、大乘經典と明確に斷定できるものを含まない¹¹²⁾と一般に承認されている安世高譯の性質と相容れない。それ故、『慈悲道場懺法』に引く素材經典は安世高より遙か後の經典であると考えべきである。しかしそれがいつ作られたか、眞經か偽經かの判定も含め、俄には斷定できないところが残る。

問題の第二は、一般に『佛名經』と總稱される諸經典との関係である。『慈悲道場懺法』は十巻を通じ、おびただしい箇所、「南無～佛」「南無～菩薩」という形で佛・菩薩の名を列挙する。その中にはいわゆる『佛名經』でない『觀佛三昧經』¹¹³⁾や『決定毘尼經』¹¹⁴⁾に基づく文言であると確定できるものもある。しかし『佛名經』に屬する諸經

唯願、世尊、具演說法。若有衆生聞佛說法、如孩子得母、如病得醫、如羸得食、如暗得燈。世尊說法、利益衆生、亦復如是。爾時世尊觀時已至、見斯菩薩勸請愍愍、即放眉間白毫相光、照于世界、地獄休息、苦痛安寧。爾時一切受罪衆生尋佛光明、來詣佛所、遶佛七匝、爲佛作禮、勸請世尊、敷演道化、令此衆生得蒙解脫(大正一七・四五〇下)。^[2a]『慈悲道場懺法』巻三「時信相菩薩爲愍念諸衆生故、即從座起、前至佛所、胡跪合掌、白佛言、世尊、今有衆生爲諸獄卒判確斬身、從足斬之、乃至其頂斬之已訖、巧風吹活、還復斬之。受此苦報、無有休息。何罪所致」。佛言、「是諸衆生以前世時不信三尊、不知供養、不孝父母、興惡逆心。屠兒魁膾、斬害衆生。是以因緣故獲斯罪」(大正四五・九三四上)≡^[2b]安世高譯『罪業應報教化地獄經』「爾時信相菩薩爲諸衆生而作發起、前白佛言、世尊、今有受罪衆生爲諸獄卒判確斬身、從頭至足、乃至其頂斬之已訖、巧風吹活、而復斬之。何罪所致」。佛言、「以前世時坐不信三尊、不孝父母、屠兒魁膾、斬截衆生。故獲斯罪」(大正一七・四五〇下～四五二上)。『罪業應報教化地獄經』は^[1b]に「如是我聞」を用いるから、後漢譯ではあり得ず、同じく^[1b]「菩薩摩訶薩」を用い、^[1b]^[2b]に「信相菩薩」に言及する。これは大乘經典の要素を示し、安世高譯の一般的性格と矛盾する。

110) 智昇『開元釋經録』巻一(大正五五・四八〇上)、巻一三(六一五下)、巻二〇(七一七上)。

111) 船山(2019a: 62, 85 注3)。

112) 船山(2013: 26)。

113) 『慈悲道場懺法』十巻中、佛名を列挙する最初は、巻一「南無彌勒佛。南無釋迦牟尼佛。南無善德佛。南無無憂德佛。南無栴檀德佛。南無寶施佛。南無無量明佛。南無華德佛。南無相德佛。南無三乘行佛。南無廣衆德佛。南無明德佛」(大正四五・九二六上)であり、彌勒と釋迦を除く善德佛より以下は、排列順は異なるものの、佛陀陀羅譯『觀佛三昧經』巻九「於十方面隨意作佛。東方善德佛者、則我身是。南方栴檀德佛。西方無量明佛。北方相德佛。東南方無憂德佛。西南方寶施佛。西北方華德佛。東北方三乘行佛。上方廣衆德佛。下方明德佛」(大正一五・六八八中～下)に基づく列挙と言える。

114) 『慈悲道場懺法』十巻中、佛名を列挙する第二は、巻一「南無彌勒佛。南無釋迦牟尼佛。南無金剛不壞佛。南無寶光佛。南無龍尊王佛。南無精進軍佛。南無精進喜佛。南無寶火佛。南無寶月光佛。南無現無愚佛。南無寶月佛。南無無垢佛。南無離垢佛」(大正四五・九二六下)であり、第二の釋迦より以下は、燉煌三藏譯『決定毘尼經』「菩薩應當三十五佛邊、所

典と合致する佛名については、素材を特定できない場合がある。具體的には、『慈悲道場懺法』が巻一・巻二において『觀佛三昧經』『決定毘尼經』『觀虛空藏菩薩經』の諸佛名をこの順序で列挙した後に示す巻二のリストである。原文は次の通り。

南無彌勒佛。南無釋迦牟尼佛。

南無寶海佛。南無寶英佛。南無寶成佛。南無寶光佛。南無寶幢幡佛。南無寶光明佛。南無阿閼佛。南無大光明佛。南無無量音佛。南無大名稱佛。南無得大安隱佛。南無正音聲佛。南無無限淨佛。南無月音佛。南無無限名稱佛。南無月光佛。南無無垢光佛。南無淨光佛。(大正四五・九三〇下)

このうち、一行目の彌勒佛と釋迦牟尼佛は他のリストにも共通して反復されるから二行目の「寶海佛」より「淨光佛」に至る佛名に注目すると、完全一致ではないものの、最も適合率の高いリストは次である。

『佛名經』巻八：

南無寶海佛。南無寶英佛。南無寶幢幡佛。南無無量音佛。南無大名稱佛。南無德大安隱佛。南無無限淨佛。南無正音聲佛。南無月音佛。南無無限名稱佛。南無無量寶佛。南無蓮華最尊佛。南無身尊佛。……(大正一四・二一八上)

注記：點線は兩書的一方に缺落があることを示す。破線は全く一致しない佛名列挙である。

ここに引用した『佛名經』は、大正新脩大藏經第十四卷第四四一號『佛名經』三十巻である。佛名經典は複數存在するが、上記のリストを含むのは三十巻本のみである。この三十巻本の成立期はいつかについて、十分な先行研究の蓄積がないのを遺憾とするが、従来言われている通りであるとすれば、『佛名經』三十巻は、北魏の菩提流支譯『佛名經』十二巻(大正新脩大藏經第十四卷第四四〇號)の増廣と見なされている如くである¹¹⁵⁾。上に示した『慈悲道場懺法』と『佛名經』三十巻の場合、一致しない要素が多いので、

犯重罪、晝夜獨處、至心懺悔。懺悔法者、歸依佛、歸依法、歸依僧。南無釋迦牟尼佛。南無金剛不壞佛。南無寶光佛。南無龍尊王佛。南無精進軍佛。南無精進喜佛。南無寶火佛。南無寶月光佛。南無現無患佛。南無寶月佛。南無無垢佛。南無離垢佛。……」(大正一二・三八下) そのままを忠實に轉用した表記である。因みに第三の佛名列挙は巻二(大正四五・九二八下)にあり、それは『決定毘尼經』の「南無離垢佛」の直後に續くリスト(大正一二・三八下～三九上)と一致する。『決定毘尼經』の三十五佛を列挙した後、『慈悲道場懺法』の佛名列挙は、南朝宋の曇摩蜜多譯『觀虛空藏菩薩經』の過去五十三佛名を三回に分けてそのまま忠實に列挙する。

- 115) 鹽入(2007: 311)「現存三十巻本佛名經や敦煌出土の諸斷簡の佛名經は、十二巻本佛名經の佛名を適宜に分け、そこへ菩薩名、經法名、懺悔文、沙門地獄を述べる經典などを配分して成立したものであるから、その中核は十二巻本でなければならない」。鹽入良道はこう述べるが、三十巻本の成立時期については觸れず、自説を開示しない。

ここから『慈悲道場懺法』は『佛名經』三十卷を素材としたと結論することはできない。佛名經典は複數ある¹¹⁶⁾。それぞれ部分的・不一致が見られるものの嚴密な成書年代の未確定なものが多く、また、將來に新たな佛名經典が発見される可能性も決して無ではない。従って今の段階では、『慈悲道場懺法』上記一節の素材は現在の我々が知らない別の文獻であった可能性すら捨てきれない。『慈悲道場懺法』において佛名を列擧する他の箇所も考慮すると、佛名の素材となった文獻が梁代以前に年代を限定できるか否かは未確定である。

そして最後に問題の第三は、『慈悲道場懺法』の素材となった偽經・疑經の類いである。端的な例を幾つか挙げると、『慈悲道場懺法』卷三に「經言」と引用するものが最も合致する經典が偽經『決罪福經』の箇所がある¹¹⁷⁾。この經典は僧祐『出三藏記集』に明言されず、隋の法經等『衆經目錄』卷四「衆經疑惑」の項目下に言及される。

以上、「當今皇帝〈舊云大梁皇帝〉、皇太子」と「分土諸王〈舊云臨川諸王〉」の書き換えに加えて、三種の問題が依然として殘存していることに鑑み、『慈悲道場懺法』の加筆修正の度合いを現時点では結論するに十分な材料と研究蓄積を有していないということを指摘した。

【5.3『淨住子』の影響】本節ではここまで具體的語彙に注目して『慈悲道場懺法』の原本の語彙と後の改變を取り上げてきたが、それとは全く異なる大きな枠組みについて看過し得ない記述がある。それは元の至元四年(1338)に付された「校正重刊慈悲道場懺法序」である。その撰者は智松柏庭である。吉岡(1959: 393-394)に紹介される原文に従って、特に直接關係する一節を押さえておきたい。なおこの序には『慈悲道場懺法』という書名のほか、『梁皇寶懺』という呼稱も用いられている。

116) 大正新脩大藏經に收める佛名經典に限っても以下のものがある。〔北魏〕菩提流志譯『佛名經』十二卷，〔隋〕闍那崛多譯『五千五百佛名神呪除障滅罪經』八卷，失譯『佛名經』三十卷，失譯『十方千五百佛名經』一卷，失譯『百佛名經』一卷，失譯『過去莊嚴劫千佛名經』一卷，失譯『現在賢劫千佛名經』一卷，失譯『未來星宿劫千佛名經』一卷，失譯『現在十方千五百佛名竝雜佛同號』。これに敦煌寫本から知られる佛名經や佛名一覽に言及する通常の經典を合わせるならば、佛名經典群の總數はかなりの數に上る。これについての先行研究として鹽入(2007: 261-265 佛名經一覽表)がある。

117) 『慈悲道場懺法』卷三「〔經〕言，「莫輕小善以爲無福。水滴雖微，漸盈大器。小善不積，無以成聖。莫輕小惡以爲無罪。小惡所積，足以滅身。大衆當知，吉凶禍福，皆由心作」(大正四五・九三三上) ≡ 『決罪福經』「行善得善，行惡得惡。惡世不可行惡。惡人先勝後負，先吉後凶。善世不可失善。失善者爲自罰。勿繫小善以爲無福。水滴雖微，漸盈大器。小善不積，無以成身。無輕小惡以爲無罪。水滴雖微，漸成大器。小惡不積，不足滅身。吉凶禍福，皆由心生」(大正八五・一三三三上)。

未詳撰者『慈悲道場懺法』十卷の資料価値

南朝齊武帝永平★年間、文宣王子良蕭氏撰『淨住子』、成二十卷、分淨行法爲三十門、未及流通、又羅變易。大梁天監、具德高僧刪去繁蕪、撮其樞要、采摭諸經妙語、改集十卷『悔文』、總列四十品章。(吉岡 1959: 394)

★吉岡 (1959: 410 注7) に従い「永明」の誤寫と見なす。

南朝齊の武帝の永明年間 (483-493) に、文宣王蕭子良 (460-494) は『淨住子』二十卷を編纂し、清淨なる佛道修行を三十門に區分したが、それが世に流布する前に變化を蒙った(?)。大梁の天監中 (502-519) に有徳の高僧らが〔『淨住子』二十卷の〕煩瑣な文言を削除し、樞要を撮略し、諸經典の絶妙な言葉を摘録して『悔文』十卷に改編し、都合四十章本とした。

ここには本稿第一節に紹介したと重なる内容が含まれる。具體的には武帝が『悔文』十卷を編纂したという内容は【1.21 郗氏の因縁】に紹介した(1)未詳撰者「慈悲道場懺法傳」と共通し、有徳の高僧らが編纂に携わったという内容は【1.22 傳承上の撰者と年代】に紹介した「梁朝諸大法師集撰」と記録する傳承と繋がる。しかしそうした共通性を越えて注目すべき大きな相違がある。それは上記の一節が、『悔文』十卷——すなわち現存『慈悲道場懺法』十卷——を南齊蕭子良『淨住子』二十卷の文言を取捨選擇して書き直した書と見なしていることである。極端に言えば、『慈悲道場懺法』は『淨住子』の一種の改編と言えるのである。

吉岡義豊が指摘するのは智松柏庭「校正重刊慈悲道場懺法序」のみであるが、元代にこのような見方が存在したことを示した意義は大きい。管見の限りでも、その後、同類の見方を示す文献は他にもある。

[明] 禪修『依楞嚴究事懺』下卷、繳懺意、修次依楞嚴了義究事懺跋語：
懺法度世，……。今之流通者，梁法雲、僧祐諸師，以齊竟陵文宣王子良夢感所撰『淨住子』二十卷，節爲十卷，卽『梁皇懺』也。(續藏一・二・乙・二・一・二二裏上)
懺悔の方法が世に普及し〔様々なものが現れたが〕……現在流布しているものは、梁の法雲 (467-529) や僧祐 (445-518) らの諸法師が、南齊の竟陵文宣王〔蕭〕子良が夢で感應を得て編纂した『淨住子』二十卷をば十卷に節略したものであり、〔世に知られる〕『梁皇懺』にほかならない。

この説を信じるならば『慈悲道場懺法』十卷の撰者は法雲・僧祐その他となる點が異なるが、『淨住子』から『慈悲道場懺法』へという影響關係は智松柏庭「校正重刊慈悲道場懺法序」と共通する¹¹⁸⁾。

118) このほか印順 (1993) は『茶香室叢鈔』に基づいて梁代諸僧が『淨住子』に基づいて『慈悲道場懺法』を編纂したという説を紹介する ([清] 兪樾 (1821-1907) 『茶香室叢鈔』六)

本稿では第2節において『淨住子』・「統略淨住子淨行法門」・『慈悲道場懺法』に共通する語彙のうち、筆者が重要と判断した原文と、異なる傾向を示すと判断した原文の主要十種(原文A~J)を取り上げた。そして『慈悲道場懺法』は『淨住子』の語彙に深く影響されていると結論した。そのように判定した理由は単純である。『淨住子』の節略本「統略淨住子淨行法門」の語句が、同じ順序で散在的に『慈悲道場懺法』の原文と一致すると認めたからである。【2.2 原文B】に着目した『釋門自鏡錄』の引用する『淨住子』は「統略淨住子淨行法門」よりも更に詳しい内容として重要である。同じ意味で【2.10 原文J】も重要である。

しかしながら、『淨住子』から『慈悲道場懺法』への影響を是認すると言っても、そのことから直ちに『慈悲道場懺法』は『淨住子』の改編書であると見なすなら¹¹⁹⁾、大きな誤りである。再編纂書であるという見方に對する反證は【2.7 原文G】【2.8 原文H】【2.9 原文I】の三つの原文である。更に本稿末「附録『慈悲道場懺法』における「統略淨住子淨行法門」併行句の所在」の卷一「歸依三寶」第一、「斷疑」第二、卷五・(6)「解怨釋結」第三も併せて参照されたい。更に附録全體を見れば、『慈悲道場懺法』が『淨住子』の構成順序通りに併行句を示しているわけでないことも歴然とするであろう。『慈悲道場懺法』の原文は『淨住子』およびそれと同じ構成を残す「統略淨住子淨行法門」の章立てと異なる形で語句が對應するから、『慈悲道場懺法』の内容が『淨住子』の内容と同じ順序で語句を再活用したわけではなく、別個の視點から語彙を選択し再活用した様子を窺わせる。

結

本稿は共同研究班「中國在家の佛教觀：唐道宣撰『廣弘明集』を讀む」で會讀中の梁武帝「斷酒肉文」を理解するために、それと深い關連をもっているけれども研究が十分進んでいない未詳撰者『慈悲道場懺法』十卷の語彙的特徴に注目し、南朝齊梁の幾つかの佛典に認められる共通の語句を探り、『慈悲道場懺法』の資料價値を考察した。

「圖」参照)。しかし印順は『慈悲道場懺法』を元代の書と論ずる。この結論に筆者は従えない。

- 119) 『慈悲道場懺法』を『淨住子』の内容と語句に基づく再編輯書であると見なす立場を示す前近代の文獻として、直前に紹介した〔元〕智松柏庭「校正重刊慈悲道場懺法序」と〔清〕禪修『依楞嚴究竟事懺』下巻がある。これらと基本的に同じ立場から『淨住子』と『慈悲道場懺法』の關係を論ずる現代の研究として吉岡(1959)と、鹽入(1977/2007)、李秀花(2008a)がある。

『慈悲道場懺法』十卷は、その内容を原形と呼ぶべき中核部と、後代に一部文字を改めた改変部とに大別できる。ただし後代の改変は分量的に少なく、實質的な内容は南齊末か梁初の西暦 500 年前後に編輯されたと言ってよい。この編輯には蕭衍が最も深く關與した。しかし撰者を蕭衍自身とすべきか、蕭衍の命を受けた複数の出家僧かを確定することは残念ながらできなかった。

『慈悲道場懺法』に現れる特有の語句は、しばしば同時代の他の佛書と共通する。それらは第 2 節で取り上げた(1)~(8)の八種である。今八種の順序を年代順に並べなおすと、南齊の蕭子良『淨住子』二十卷(佚)——(1)『慈悲道場懺法』——(2)梁の蕭衍(武帝)「斷酒肉文」と(3)「東都發願文」——(7)梁の蕭綱(簡文帝)「唱導文」と(8)「四月八日度人出家願文」——(4)唐の道宣「統略淨住子淨行法門」——(5)道世『法苑珠林』の一部——(6)唐の懷信または慧祥『釋門自鏡錄』卷上に引用する「南齊竟陵文宣王『淨住子』略」となる。

本稿ではこれら八書に共通する語句を太下線で表記し、原典 A~J の十種に分け、それぞれを表にして示した。

これら八文獻は一本の太い線で結ばれている。それは同時代文獻に共通する特有の語彙である。それは具體的には二つの形で現れている。

一つは、(2)「斷酒肉文」・(3)「東都發願文」・(7)「唱導文」・(8)「四月八日度人出家願文」に共通する、梁武帝自らのものと思われる語彙である。それは第 2 節の原文 A・B・H・I において具體的に確認することができる。

もう一つの太い線は、蕭子良『淨住子』二十卷に由來する語句である。蕭子良の原文は散佚し、傳わらないけれども、それを忠實に節略した(4)「統略淨住子淨行法門」の語句を基準として他と比較することによって、『淨住子』の語彙が複数文獻に受け繼がれ、再活用されていることが確定的に判明した。この共通性は『淨住子』の内容と語句の再活用ないし轉用、二次的使用と表現してもよい。これを示す文獻は原典 C・D・E・F・G・H・I・J である。この中で特に注目すべきは原文 C・G・I の三つである。

太下線で示した文字は、(1)~(8)において文字レベルで共通する語句であるという特徴に加え、更に、それら共通する語句の現れる語順が原則として(1)~(8)の諸文獻の該當箇所において等しく一致し、かつ、それら共通する語句が、文獻ごとに、“飛び飛びに一致する”という點に他に類のない著しい特徴を認めることができる。“語句が飛び飛びに一致する”ということは、別の言い方をすれば、“語句が散在的に一致する”ということである。對應する語と語の間に一語、二語あるいはそれ以上の語數の對應しない部位をはさみつつ全體として緩やかな一致を示しているのである。このことを更に比喩的に“文獻中で語句が緩やかに斑狀に一致する”と言っても誤解されることはあるま

い¹²⁰⁾。

本稿は『慈悲道場懺法』とは何か、どのような使い方ができるかを示すことを目標として文献の語彙を分析した。その結果、『慈悲道場懺法』は、「斷酒肉文」と共通するような梁初特有の語彙を含むことと、梁の直前に蕭子良が『淨住子』に記した内容と語彙が、直後の時代、複数文献に再活用され影響を與えたことを原文に即して確かめた。

第2節に示した原文A~Jのうちでも特に重要なものは、原文C・G・Iの三種である。この三種には唐の道宣が二十分の一に縮小した「統略淨住子淨行法門」には含まれない『淨住子』の文言が含まれるからである¹²¹⁾。本稿はそれらの“失われた『淨住子』の原本”の語句を二重下線で表中に示した。C・G・Iに示した原文のうちで“失われた『淨住子』原本”の語彙を含む文献は(5)道世『法苑珠林』と(6)『釋門自鏡錄』の二つである。

(6)には該當箇所を「南齊竟陵文宣王『淨住子』略」という名で引用するから、(6)における“失われた『淨住子』の原本”の語句を同定する作業が機械的に行えるのに對し、“失われた『淨住子』の原本”の語句の同定に關して深刻な問題をかかえる文献は、(5)道世『法苑珠林』である。道世は『淨住子』の文言を決して引用であると明示することなく、自らの“地の文”の中に取り込んで用いた。そのため、道世が引用する箇所と自ら書き換えた箇所・加筆した箇所とを截然と區別することが現在の我々にはできない。道世自らがそれを一切明記せず、『淨住子』二十卷は佚しているからに他ならない。

120) これらの“語句が飛び飛びに一致する”“語句が散在的に一致する”“文献中で語句が緩やかに斑状に一致する”という表現とその意義を最初に指摘し論述した拙稿は船山(2019b)である。また、注39も参照。

121) 原本の蕭子良『淨住子』二十卷を唐の道宣が「統略淨住子淨行法門」という書名で節略本一卷としたことについて、以下の四つが既に複数の研究者に是認されている。

(1) 道宣は蕭子良が用いた言葉の中から大略を示すには不要な些末な内容を割愛し、蕭子良の用いた語のうちの重要語を選定してそれらをつなぎあわせる形で「統略淨住子淨行法門」の原文を編輯した。それ故、「統略淨住子淨行法門」に現れる語は(一部例外は免れないもの)原則としては蕭子良自身が用いた語である。

(2) 道宣「統略淨住子淨行法門」は三十一門から成るが、これは二十卷原本の構成をそのまま反映している。

(3) 道宣が採用しなかった原文は、經典の逐語的な引用を大量に含むと考えられる。その失われた一部を残す文献が一つ存在するS721v(スタイン將來敦煌寫本七二一號裏)である。その内容は、佛陀跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』の逐語的引用(轉載)である。これについては船山(2006:305-308)を見よ。ただし鹽入(1961)はS721vの内容を特定できなかったばかりか、鹽入(2007)においても船山(2006)に全く言及していない。

(4) 現時点で推定できることをまとめると次の通り。『淨住子』二十卷は三十一門に分かれ、各門には内容の概略を示す解説部(綱要部)と、教證として概略が正しいことを裏付ける大量の經典引用から成っていた。道宣は經典引用部を全て削除した上で、解説部を節略したものを「統略淨住子淨行法門」と稱した。

理想を言うならば、そうした問題を克服した上で、これが二十巻本の原文に当たる語であると確定的に提示できるのが最も望ましい。しかし現在の筆者にはそれを行うことができない。そこで次善策として、第2節原文 A~J のうち、失われた原文の語を示すと確定できる箇所に二重下線を引いただけでなく、更にそれに加えて、最終的に十分確定することはできないが、総合的に鑑みて、失われた原文の語句の可能性が高いと推定されるものを点線で示すことによって原文の可能性を示唆した。この線種の區別から原文の可能性がある箇所を汲み取っていただければ、本稿の目的は半ば達成されたと言ってよいと感じている。

附録 『慈悲道場懺法』における『淨住子』併行句の所在

『慈悲道場懺法』表題・卷・細目 [大正頁行]		『統略淨住子淨行法門』併行句 [大正頁行]	
(無題：導入部)		[T45, 922c-923a]	(無該當)
「歸依三寶」第一	卷一	[T45, 923a-924b]	開物歸信門第二 [T52, 307a-b] 三界內苦門第十四 [T52, 312c] 禮舍利寶塔門第二十五 [T52, 318b]
「斷疑」第二		[T45, 924b-926b]	斷絕疑惑門第十六 [T52, 313c] 三界內苦門第十四 [T52, 312c] 出三界外樂門第十五 [T52, 313a] 大忍惡對門第二十二 [T52, 317a] 開物歸信門第二 [T52, 307a] 自慶畢故止新門第二十一 [T52, 316c]
「懺悔」第三		[T45, 926b-928a]	緣境無礙門第二十三 [T52, 317b]
「發菩提心」第四	卷二	[T45, 928a-929c]	開物歸信門第二 [T52, 307a]
「發願」第五		[T45, 929c-931a]	(無該當)
「發迴向心」第六		(「發迴向心」) [T45, 931a-c] 「讚佛呪願」 [T45, 931c-932a]	[參考] 梁武帝『發菩提心』 ¹²²⁾
「顯果報」第一	卷三・四	[T45, 932a-939a]	生老病死門第五 [T52, 308c]
「出地獄」第二	卷四	[T45, 939a-942a]	沈冥地獄門第十一 [T52, 311a-b] 禮舍利寶塔門第二十五 [T52, 318b-c]
「解怨釋結」第三	卷五・六	[T45, 942a-949b]	大忍惡對門第二十二 [T52, 316c] 一志努力門第二十四 [T52, 318a] 禮舍利寶塔門第二十五 [T52, 318b] 出家懷道門第十二 [T52, 311c] 十種慚愧門第十七 [T52, 314b] 開物歸信門第二 [T52, 306c-307a] 善友勸獎門第十九 [T52, 315b] 在家從惡門第十 [T52, 310c] 滌除三業門第三 [T52, 307b, 307b-c] [參考] 『出家人受菩薩戒法』 卷一 ¹²³⁾
「發願」第四	卷六	(「發願」) [T45, 949b-950a] 「讚佛呪願」 [T45, 950a]	(無該當)
「自慶」第一	卷七	(無題：導入部) [T45, 950b] (無題：「自慶第一」導入部) [T45, 950b-951b]	自慶畢故止新門第二十一 [T52, 316b]
		「警緣三寶」第二 [T45, 951b-952a]	(無該當)
		「主謝大衆」第三 [T45, 952a-b]	(無該當)
		「總發大願」第四 [T45, 952b-953a]	(無該當)
「爲六道禮佛」第二		「奉爲天道禮佛」第一 [T45, 953a-c]	(無該當)

122) 【5.1 梁武帝『發菩提心』】を見よ。

123) 【3.1 「攝大威儀戒」】を見よ。

附録 『慈悲道場懺法』における『淨住子』併行句の所在 (続き)

『慈悲道場懺法』表題・卷・細目 [大正頁行]		『統略淨住子淨行法門』併行句 [大正頁行]		
『爲六道禮佛』第二	卷七	「奉爲諸仙禮佛」第二 [T45, 953c-954a]	(無該當)	
		「奉爲梵王等禮佛」第三 [T45, 954a]	(無該當)	
	卷八	「爲人道禮佛」第七 〔爲人道禮佛〕第七	「奉爲阿修羅道一切善神禮佛」 第四 [T45, 954b-c]	(無該當)
			「奉爲龍王禮佛」第五 [T45, 954c-955a]	(無該當)
			「奉爲魔王禮佛」第六 [T45, 955a]	(無該當)
			(無題：「爲人道禮佛」第七導 入部) [T45, 955a-b]	(無該當)
			「奉爲國王禮佛」第一 [T45, 955b-c]	(無該當)
			「奉爲諸王禮佛」第二 [T45, 955c-956a]	(無該當)
			「奉爲父母禮佛」第三 [T45, 956a-b]	(無該當)
			「各爲過去父母禮佛」第四 [T45, 956b-c]	(無該當)
			「奉爲師長禮佛」第五 [T45, 956c-957b]	(無該當)
			「爲十方比丘, 比丘尼禮佛」 第六 [T45, 957b-c]	(無該當)
			「爲十方過去比丘, 比丘尼禮 佛」第七 [T45, 957c-958a]	(無該當)
	卷九	「三惡道禮佛」(第八)	「爲阿鼻地獄禮佛」第一 [T45, 958a-c]	沈冥地獄門第十一 [T52, 311a]
			「爲灰河, 鐵丸等地獄禮佛」 第二 [T45, 958c-959a]	(無該當)
			「爲飲銅, 炭坑等地獄禮佛」 第三 [T45, 959a-b]	(無該當)
			「爲刀兵, 銅釜等地獄禮佛」 第四 [T45, 959b-c]	(無該當)
			「爲火城, 刀山等地獄禮佛」 第五 [T45, 959c-960a]	(無該當)
			「爲餓鬼道禮佛」第六 [T45, 960a-b]	(無該當)
			「爲畜生道禮佛」第七 [T45, 960b-c]	(無該當)
			「爲六道發願」第八 [T45, 960c-961a]	(無該當)
			「警念無常」[T45, 961a-c]	(無該當)
			「爲執勞運力禮佛」 [T45, 961c-962a]	(無該當)
	「迴向」第三 = 「發迴向」第三		(無題) [T45, 962a-b]	(無該當)
			「說迴向法」[T45, 962b-c]	(無該當)
			「菩薩迴向法」[T45, 963a-c]	(無該當)

附録 『慈悲道場懺法』における『淨住子』併行句の所在（続き）

『慈悲道場懺法』表題・卷・細目 [大正頁行]		『統略淨住子淨行法門』併行句 [大正頁行]	
「迴向」第三＝ 「發迴向」第三	卷十	(無題：「發願」第四導入部) [T45, 963c]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321a]
「發願」第四		(無題：「發願」第四導入部) [T45, 963c]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321a]
		「初發眼根願」 [T45, 963c-964a]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321a]
		「初發耳根願」 [T45, 964a-c]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321a]
		「初發鼻根願」 [T45, 964c-965a]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321a]
		(無題：「發願」第四導入部) [T45, 963c]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321a]
		「初發舌根願」 [T45, 965a-b]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321a-b]
		「初發身根願」 [T45, 965b-c]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321b]
		「初發意根願」 [T45, 965c-966a]	發願莊嚴門第三十一 [T52, 321b]
「初發口願」 [T45, 966a-b]		(無該當)	
「諸行法門」 [T45, 966b967a]		(無該當)	
「囑累」第五		(無題：「囑累」第五導入部) [T45, 967a-c]	(無該當)
	「讚佛呪願」 [T45, 967c]	(無該當)	

先行研究

- 池田 (1990) 池田温『中國古代寫本識語集録』, 東京: 東京大學東洋文化研究所, 1990.
- 横超 (1942/71) 横超慧日「僧叡と慧叡は同人なり」, 同『中國佛教の研究, 第二』, 京都: 法藏館, 1971, pp. 119-144. 原載同名『東方學報』東京 13/2, 1942.
- 落合・齊藤 (2000) 落合俊典・齊藤隆信「馬鳴菩薩傳」, 牧田諦亮 (監)・落合俊典 (編)『七寺古逸經典研究叢書第五卷, 中國日本撰述經典 (其之五)・撰述書』, 東京: 大東出版社, 2000, pp. 265-286.
- 川口 (1975/2000) 川口義照「法苑珠林と諸經要集の關係」, 同『中國佛教における經錄研究』, 京都: 法藏館, 2000, pp. 151-163. 原載同名, 『駒澤大學大學院佛教學研究年報』9, 1975, pp. 139-146.
- 鹽入 (1961/2007) 鹽入良道「文宣王の『淨住子淨行法門』」, 同『中國における懺法の成立』, 東京: 大正大學天臺學研究室, 2007, pp. 414-467 (原載「文宣王蕭子良の『淨住子淨行法門』について」, 『大正大學研究紀要』46, 1961)。
- 鹽入 (1977/2007) 同「慈悲道場懺法の成立」, 同『中國における懺法の成立』, 東京: 大正大學天臺學研究室, 2007, pp. 468-515 (原載『豐岡博士還曆記念, 道教研究論集: 道教の思想と文化』, 東京: 國書刊行會, 1977)。
- 鹽入 (2007) 同『中國における懺法の成立』, 東京: 大正大學天臺學研究室, 2007, 第五章 pp. 225-361「佛名經の源流とその流傳」。
- 諏訪 (1988) 諏訪義純『中國中世佛教史研究』, 東京: 大東出版社, 1988, pp. 64-91 第一章第三節「茶食主義思想の形成 (二): 周顒・沈約・梁武帝」。
- 諏訪 (1997) 同『中國南朝佛教史の研究』, 京都: 法藏館, 1997, pp. 118-136 第六章「梁武帝の『酒肉を斷つ文』提唱の文化史的意義: 南北朝隋唐の僧侶たちの動向から」。
- 土橋 (1980) 土橋秀高『戒律の研究』, 京都: 永田文昌堂, 第五章第二節「毘尼討要と四分律行事鈔」, pp. 925-960.
- 中嶋 (1997) 中嶋隆藏『出三藏記集序卷譯注』, 京都: 平樂寺書店, 1997.
- 西山 (1995) 西山進「説話よりみた唐代佛教: 『釋門自鏡録』を中心として」, 『佛教史學研究』38/1, 1995, pp. 21-37.
- 船山 (2006) 船山徹『南齊竟陵文宣王蕭子良撰『淨住子』の譯注作成を中心とする中國六朝佛教史の基礎研究』, 科學研究費成果報告書 (非賣品), 京都, 2006, 324p.
- 船山 (2010) 同「梵網經諸本の二系統」, 『東方學報』京都 85, 2010, pp. 179-211.
- 船山 (2013) 同『佛典はどう漢譯されたのか: スートラが經典になるとき』, 東京: 岩波書店, 2013.
- 船山 (2017) 同『東アジア佛教の生活規範 梵網經: 最古の形と發展の歴史』, 京都: 臨川書店, 2017.
- 船山 (2019a) 同『六朝隋唐佛教展開史』, 京都: 法藏館, 2019.

- 船山 (2019b) 同「文字検索のさらなる地平に向けて：文字列の散在的一致を網羅するために」, 下田正弘・永崎研宣 (共編) 『デジタル學術空間の作り方』, 東京：文學通信, 2019, pp. 169-181.
- 船山 (2020) 同「『出要律儀』佚文に見る梁代佛教の音寫語」, 『東方學報』京都 95, 2000, pp. 522-402.
- 望月 (1946) 望月信亨『佛教經典成立史論』, 京都：法藏館, 1946.
- 山内 (1974) 山内洋一郎「法苑珠林と諸經要集」, 『金澤文庫研究』20/9, 1974, pp. 1-6.
- 吉岡 (1959) 吉岡義豊『道教と佛教, 第一』, 日本學術振興會刊, 1959, 第一編Ⅲ第一章「施餓鬼思想の中國的受容」, pp. 369-411.
- 吉川・船山 (2010) 吉川忠夫・船山徹 (譯) 『高僧傳 (四)』, 岩波文庫, 東京：岩波書店, 2010.
- 蔡運辰 (1983) 蔡運辰『二十五種藏經目錄對照考釋』, 臺北：新文豐, 1883.
- 陳志遠 (2013) 陳志遠「梁武帝與僧團素食改革：解讀《斷酒肉文》」, 『中華文史論叢』111 (2013年3期), pp. 93-121.
- 黃徵・吳偉 (1995) 黃徵・吳偉 (編校) 『敦煌願文集』, 長沙：嶽麓書社, 1995.
- 紀志昌 (2016) 紀志昌「統略本《淨住子》懺法的引經模式與編撰觀點試」, 『臺大佛學研究』23, 2016, pp. 1-58.
- 郭麗英 (1993) 郭麗英「敦煌本《東都發願文》考略」, 謝和耐・蘇遠鳴等著, 耿昇譯『法國學者敦煌學論文選萃』, 北京：中華書局, 1993, pp. 105-119.
- 李秀花 (2008a) 李秀花「《慈悲道場懺法》成書考」, 『東方論壇』2008年2期, pp. 35-39.
- 李秀花 (2008b) 同「論齊梁皇族蕭氏願文」, 『甘肅聯合大學學報 (社會科學版)』24/3, 2008, pp. 20-23.
- 徐立強 (1998a) 徐立強「『梁皇懺』初探」, 『中華佛學研究』2, pp. 177-206.
- 徐立強 (1998b) 同「《梁皇懺》未見載於隋唐經錄的因緣」, 『華嚴專宗學院佛學研究所論文集』, 1998, pp. 1-18.
- 印順 (1993) 印順『華雨集 (四)』, 竹北 (新竹縣)：正聞出版社, 1993, 三「中國佛教瑣談」, 五「經懺法事」。
URL — <http://gangeslog.com/content?bookid=3&parentid=95970#0129a03>